

88

73

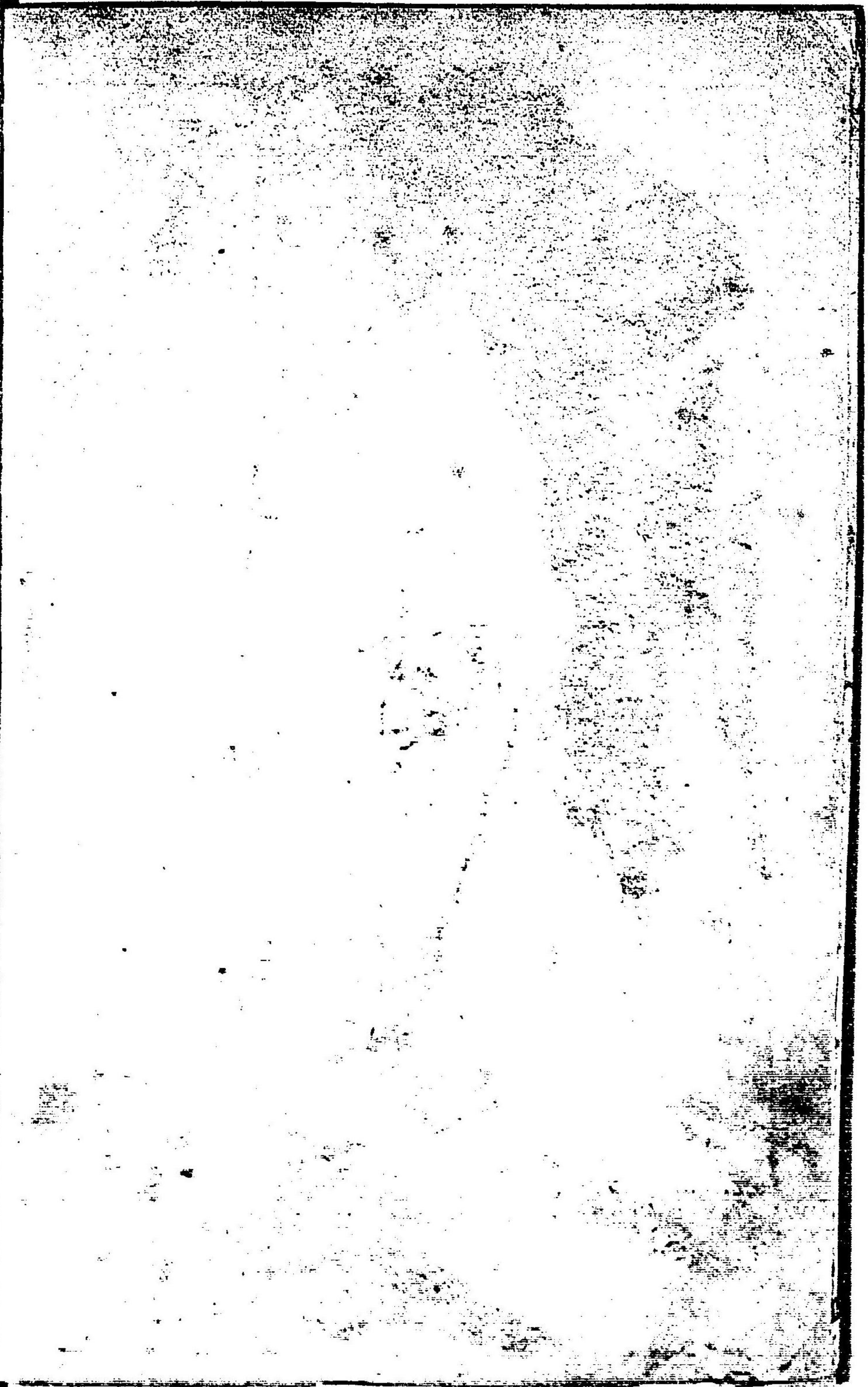
鎌倉
參禪

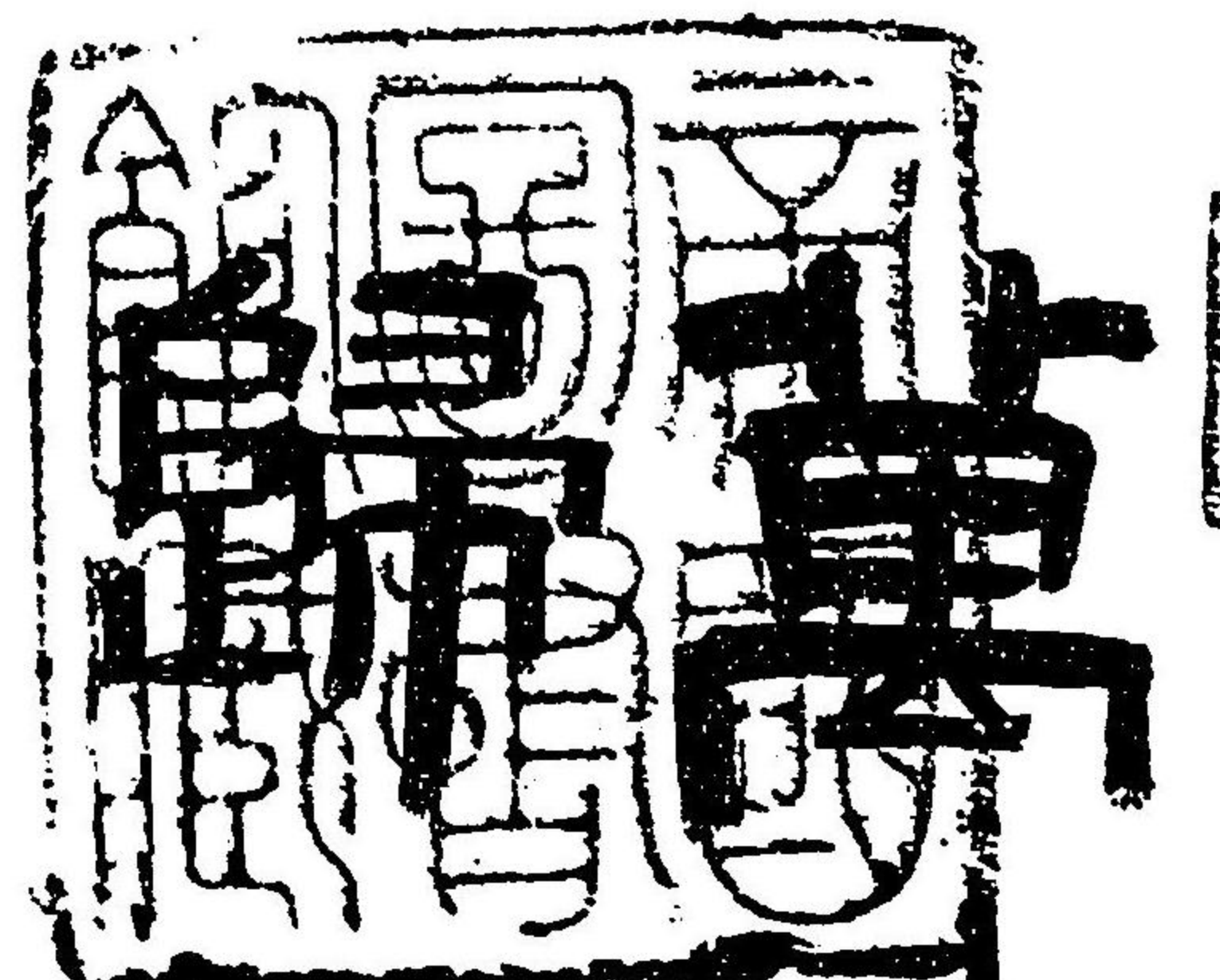
個中の消息





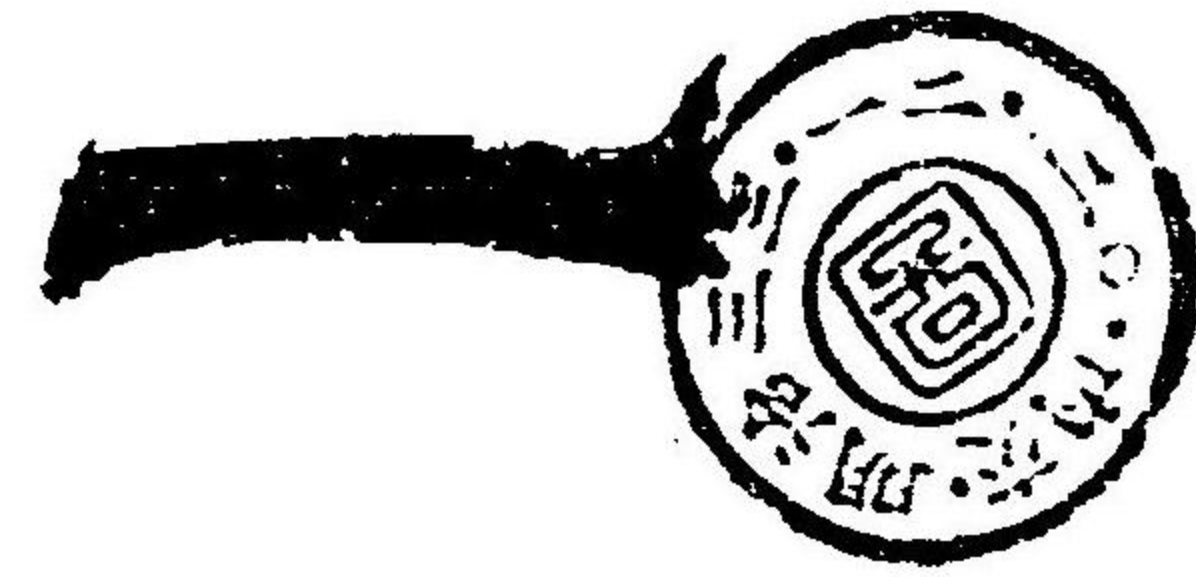
不物样字





歸心
何處

無邊國武



題

天地之間，又更何物。寂寞無形，變化無常。茫乎何之，忽乎何適。須是到絕計較情塵，赤裸々，淨灑々處，仔細透徹得。道友無休庵主人，元是多血多淚漢。初學儒，中奉西教，今歸禪。折衷三教，有一個獨自本領。頃日著一書，題曰個中消息。把而讀之，清微玄澹，會得個中之趣。圓

滿靈活、破來眼前之機。機鋒如沈。術數
又冷。嚙之愈多、嚼之不見。赤髀々、淨灑
々、心天雲朗、性海波澄。是豈非禪機乎
哉。

明治庚子初冬

吉本

裏



禮錄

個中の消息 全

到

着

無休庵主人著

出立の節はいろいろ、御厚意難有奉存候、乍憚御一統様へよろしく、御風
聲可被下候然者大井より下車、更に腕車を驅ると半里程點燈頃山の内
村に達候、即圓覺寺のある處にして、一小驛をなせり、柳屋と申旅人宿よ
ろしと豫て承居候間、不取敢、投舎、今日は早朝より登山致候處、老師は生
僧、藤澤驛の遊行寺にて、南條村上諸先生、并に大内青樹、加藤咄堂諸子と、
俱に佛教演説の催しありて、留守、山中諸所見物して、歸候、扱澤庵和尚順
禮錄倉記の中に、

次の日は圓覺寺に入り、開山佛光禪師を拜するに、所がら常ならず、

個中の消息

仙境やかくあらんと覺ゆ、塔様殊勝なり、慈顔うるはしく、いける人
 にむかふ如くなり、いかなる屈強の人も、泪をもよほす計なり、野鳥
 來りて肩になれ、白龍けさに現すと傳へしが、在世の有様をうつし、
 椅子に白き鳩二とまり、けさに白龍をきさみそへたり、實に谷虛に
 して、山をのづからこたへ、人無心にして、物よく感ず、芭蕉耳なく、し
 て雷をきき、磁石無心にして、鉄をてんず、無心の力いくばくぞや、菩
 提心さへ胸に残らば、煩惱なかるべし、ましてぼんなふを胸にをか
 んをや、煩惱即菩提といへるは、一坂越たらん人の眼より云ふ言葉
 なり、そのが眼あきらかならずして、達人の言葉を取持來りて、わが
 物となして云論世におほし、玉はもと石なれども、みがかざれば光
 なし、みがさる石をさして玉なりといはんや、玉といはゞ玉なる
 べし、光なくば何を玉の徳とせん、達人のいへるこゝろは、石みな玉

なり、なぞみがきて光を得ざる、人皆菩提なり、修して何ぞ菩提の光
 をはなたさるとなり、又修もなく證もなしといへども、こは修得證
 得の人の言葉なり、祖師先徳には、花實をなはりたり、今の世には、あ
 だ花のみ咲きて實なし、言葉をとる計なり、甘と云文字をなめたり
 とて、口あまるかるべからず、火とよなへたりとて、口あつかるべか
 らず、口のはとりにある佛法たのもしからず、何事をも腹にあぢは
 ん人こそゆかしけれ、

老杉古檜蔚たる中にかみさびたる堂塔の、人情を拂うて、高く聳候様は
 不恙なる身にも、そのづから道心動候、黄塵萬丈の都會を出て、半日を費
 さす、此の別天地に入候心地、何も申されず、頓に心身の新なるを覺候、長
 生の術を學度人は、明眼の師に就きて、冷煖自知するまでの修行、肝要に
 存候、澤庵和尚の所謂、口のはとりにある佛法たのもしからずと申者に

候、小弟も暫らく、此地に留まり、何かの所得もあらば仕合に存候、書餘後便、

* * * * *

紹介と下宿

拜啓、老師へ相見致候には、必らず紹介を要し候、昨日遊行寺には、河野廣中氏も被相會候付、紹介頼み遣はし候、河野氏は磐城三春の人、遊行宗の開祖一遍上人は、實に此河野家より出し人にして、今も代々住職は河野姓を名乗られ候由、廣中氏との關係不淺、先年火災に罹り候折も、殆ど廣中氏の寄附と盡力とによりて、再建出來候やに承及候、同氏は最も佛縁深き人にして、雲照律師に就いて、眞言宗にも造詣せらるゝ所あり、又禪宗も小弟等の先輩にて候、曾て西山禾山橋本峨山、兩師に參せられ、弟も

其折同參の縁あるを以て、右の次第に及候、若し別に紹介狀なき人は、各其宿する所の主人に紹介を頼むべし、扱下宿料は、夜具共拾七八錢より、貳拾錢までに候、寺内の塔頭何れも貸間、或は賄致候、又居士林も有之、同宿出來候、只今下野の人、星野榮吉と申人、居士長なり、至て情厚き人にて、萬事懇に世話被致吳候、弟は尙柳屋にあり、明日より佛日庵に引越可申候、今日老師は、鳥尾得庵居士と俱に、甲府に向て出發被致候、山梨縣有志家の請にて、一週間計、彼地にて佛教演説、有之筈に候、以下後便、

* * * * *

圓覺寺縁起

圓覺寺は瑞鹿山と號じ、鎌倉五山の第二位に候、開山は佛光禪師祖元、開基は北條相摸守時宗に候、抑も時宗佛法崇敬の念厚く、弘安元年大覺禪

師道隆を請うて、新に伽藍を建立せんとし、師の指圖により、此地をトシ、
 兩人共に地を鑿すること三下して歸る。是より時宗、役夫を促し、自己も
 勇を助て地を穿つ。忽ち一石櫃を掘得て之を開けば、中に圓覺經を收む。
 即ち寺號の因縁に候。同二年時宗、工匠を撰て、宋國に遣し、經山諸堂の製
 を見せしめ、是に擬して當寺を造る。同五年成功に至り、祖元和尙を宋よ
 り請して、開祖とす。開堂の日、白鹿群れ來たり、衆と共に法を聽く。和尙見
 て吉徵とし、瑞鹿を以て山號とせられ候由、今に白鹿洞と云。洞穴、御座候、
 外に白鷺池、虎岩、坐禪窟、宿龍池、獨木橋等、此外いろくの故蹟、御座候、皆
 おもしろき由緒ありて、古來名家の詩歌不尠候。唯折々思出しは、太宰純
 の詩に

門外潺湲溪水流、鹿山風景不勝秋。
 上方終日無人語、落木蕭々送客愁。

恰も今日、秋の最中に候得者、感に打たるゝと一入に候。はの暗き木の間
 を、紅葉うかべて流るゝ水、怪しげなる鳥の聲、山愈深く覺候。三級峯と申
 候は、開山塔のある所の背後に候。秋の景色見んとて、三四人相携へ、躋攀
 致し、境内を見おろし候處、天地の美觀を一區に集めたる如くに候。折し
 も雨氣催して、崖下を過る雲、足元近く群れよせて、錦隔てゝ塔頂伽藍の、
 老聾の間に隱顯する。恰も天空より彌勒の樓閣を、下瞰する心地にて候
 ひし、明日は辨財天の洪鍾、并に佛牙舍利など、拜見可致候頓首。

相見

老師へ相見相濟候。相見料は、五拾錢以上に候。是れ來謁者の志を見るま
 での事に候。扱釋宗演師は、若狹の人、久しく圓覺寺前管長、故今北洪川和

尙に隨身せられ、終に其衣鉢を嗣ぎ、和尚の滅後、管長にまで推撰せられ候丈ありて、面目俊邁、一見其凡ならざる性格を奉伺候、應接ふりは極寛和にして、誰れも能く親しむを得候。然れども、與奪自在の處ありて、折々は人をして恟慄ならしめ候。三田慶應義塾の出身なる由にて、英語も一通りは解せられ、當世の事にも自ら一隻眼を被具候。曾て印度に遊び、又米國「シカゴ」府の萬國宗教會議にも臨まれ、知見該博なるとは申すまでも無御座。詩文章は、頗巧なる方にて、諸所の僧俗、添削を乞來るもの不尠候。落款は「洪岳楞伽窟」とは、故洪川和尚より、貰れたる安號ならむ。又楞伽窟とは、只今の隱察正續庵の一棟を、楞伽窟と申候に、因まれ候者ならむ乎。宗演師の人となり、を一口に申せば、公○共○の○二○字○を○善○く○被○解○候○様○存○候。社○會○に○對○し○一○私○人○に○對○し○公○共○の○二○字○は○殆○と○宗○演○師○の○種○智○か○と○見○候。位に有之、依て會下に屬するもの一向不平なき様に、

見受候、教育家としても、政治家としても、或は適當なるべく、詢々學人をして倦まざらしめ、更に面責するなどの事なし。寛容の中に極めて俊發なる所、矢張當時の一流として、可仰存候、あらく、頓首、

* * * * *

半僧坊

今日は午後より、兩三名と共に、半僧坊に登候。權現堂は、白木總檜造にして、建長寺開山、大覺禪師、座禪窟の側に有之候。此山、勝上巖と申して、地方の名山に候。建長寺の境内にして、祖師の座禪窟など、有之候。へば、古來高蹤の靈地として、其名も四方に聞ゆ。岸鳳質の詩に、「此○日○登○臨○探○高○蹤○彩○雲○深○處○望○山○色○」又、高惟馨の句にも、「石○窟○昔○安○禪○山○色○觀○空○現」など、をのづから遊子の吟腸を奪ひし跡、今は半僧坊の爲、俗了不足見、可惜之至に候。抑

も半僧坊と申すは、遠州奥山、方廣寺の開山、無文禪師に、隨侍したる半僧半俗の行者なりし由、無文禪師は、後醍醐帝の皇子、入宋の大徳に候、御入山の折、此半僧も、御迎申候て、種々の問答をし、又不思議なる事共現じ候由、師の滅後、去る所を知らず、迷信の僧徒等、觀音の化身なりと申傳へ、月の十七十八日を以て、之を祭り、今は守護神として、諸方に其分靈御座候。去明治廿三年五月中、建長寺、管長、霄貫道、一夜權現の靈夢に感じたりとて、結社勸請を唱へ、莫大の費用を掛けて、巖險を削り、磴階十丁、中には鐵鎖を攀ちて、崖畔を上下する様に致候處もあり、其絶頂は遠く四方を望み、云ふに云はれぬ景色に候、扱今や講員貳萬餘人、其所在地、一府十數縣に及び、外に數知れぬ、歸依渴仰の徒、毎日くくの參詣にて、餘程の收入有之候由、建長寺の維持、并に寺内學林の、基本金に相成居候、是も衆生濟度の方便と申さは申すものゝ、去りとては、亦陋劣の手段に候、道隆、蘭溪禪

師、昔曾て山上に觀瀾閣を建つ、安脩の詩に「絶巖臨滄海、隆公昔倚欄。何知千歲後、我輩亦觀瀾。」今は只途を挟むの茶店に、腰打かけて、往來の人を觀候のみ、建長寺には、禪堂有之候得共、參禪聽く人もなく、亦一人として坐禪辨道に、身を委するもの無御座候。

行遊梵境、謁金仙、頓覺人情空、萬緣庭松鋪、菌生碧蘚、巖間鳴玉、迸清泉。秋風寂、歷安禪窟、晚日蕭條、講法筵、九代繁華如夢幻、唯看浩却一燈傳。

是れ田寧の吟なる由、建長寺學寮の一僧より聞候へども、弟は唯今昔の感に不禁候、鎌倉五山の第一位にありて、而も樓觀欄閣、其儘に存じ、境は鳳孫龍子を養ふに適し、末寺の敷を問へば、尙望みを屬すべし、詩人の「巖間鳴玉、迸清泉」と咏せし所には、嬌女軒をつらねて、酒食を嚙ぐ、寧ろ人情の萬縁に、蘊はるゝならんや、「唯看浩却一燈傳」語を寄す半僧坊、這箇浩劫の一燈、果して護し得るや否や、臆。

今日佛日庵に移候、北條家の祠堂に候間、尙庵主より聞取の分、可申上候、頓首、

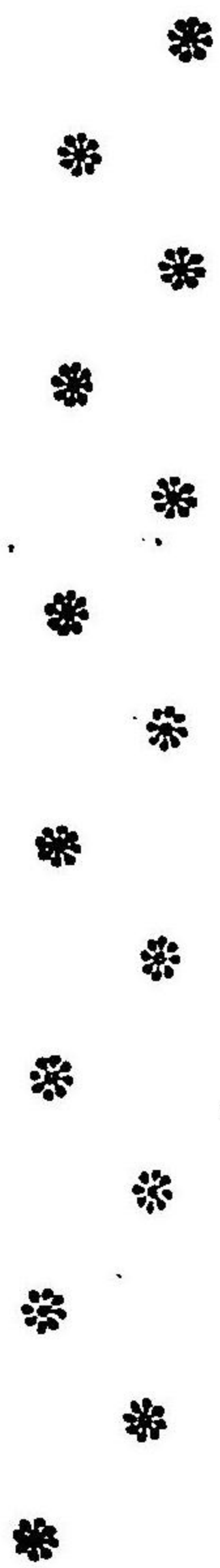
* * * * *

佛日庵

佛日庵に住込、久振にて精進料理を食候處、腹の工合よろしからず、折々柳屋に居候友人を訪ひ、會食罷在候、佛日庵は至て清潔にて、間も多く、夜具などは贅澤に候、寺の常として、風呂もしばく、立ち、水は無此上、清良に候、小庭の柑子稍色つきて、古郷手培の菓樹も、今如何ならむと思出させ候、軒にさし掛る楓葉、日々秋の更けゆくを見、菊花隱逸の姿は、徐ろに名利の途を隔候、一牆を分つ處、正續院にして、僧堂あり、隱寮あり、朝夕參禪の鑿鑿聞ぬ候間、甚便利に候、此邊は凡て、崑層を鑿ちたる所にして、洞

窟を物置場となし、石泉自在に筧にて呼候、當山名所の一なる、妙香池も坐して臨むべく、金鱗潑刺の音、寢耳にも入候、扱佛日庵は先日申上候通、北條家の祠堂に候、本山大檀那相摸守時宗相摸守貞時相摸守高時の廟に御座候、其始めは時宗のみの靈屋にして、佛日庵とは、即ち時宗靈室の名なるよし、貞時高時の靈屋は、分處して、黃梅續燈の二院にありしを、中古合して當院に安じ候者のよし、中興鶴隱和尚に至り、寺領も豊かに相成、鶴隱性茶を被嗜、茶店を構へて、烟足軒と稱せられ候由、只今弟の住する室は即ち烟足軒の跡にして、額面も其儘に殘居候、當院は代々名僧の住持せられし由、有名なる誠拙和尚も、此寺に住せられ、其遺稿當院の藏版にて上梓相成居候、東海和尚、洪川和尚、及ひ只今の洪岳和尚も、皆一時住持ありし由、徳川氏代々の將軍より百石づゝ御朱印給はり候由にて、當山の塔頭にては、一位なるべく候、本坊に百參拾石、正續院に何拾石

とか承候、兎に角圓覺寺中にて都合三百石に御座候、從來山内村は、當山の餘澤大なりしものと見ゆて、今日も寺の事としいへば、甚丁重に致候、現佛日庵主福泉東洋氏は頗る事務の才ある人にして、當山の俗務は、殆ど氏の一手に有之候趣、學問も一通りは、出來修業の方も曾て雪潭和尚の雷撃に遇ひ、滴水老漢の毒手に觸れ候事ありし由、凡僧中の翳々たるもの、容貌は一見蘊蓄の相を具し、態度圓滿にして、氏に接するもの先づ肝膽を呈せざるはなかるべし、當年四十歳計り、折々談話致候處、世間通にて中く、おもしろく、要するに圓覺寺中にての、手腕家と見受候、一日より、大休老師參られ、宗演老師留守中、代りて大衆を攝せられ候、餘は明日に讓候、不宣、



正續院及び舍利殿

啓上、宗演老師、未だ歸山なし、大休老師、不相變、掛錫中に御座候、扱正續院に付、聊申上候、禪堂浴室、只今該院に有之候、院號を萬年山と申し、老師の居間、即ち隱寮と申すものも、該院内にして、禪堂舍利殿及び隱寮、鼎足相對居候、舍利殿及び開山塔の事、先日も一寸申上候通、由緒尤もふかく候、舍利殿の中央、須彌壇は、西土の佳木を以て製せしものよし、木理のさま古色を存し、近代のものに無御座候、結構は餘り大ならず候得共、南都興福寺の靈寶殿に擬して、造候由に付、心して見れば、自ら尋常ならず候、此舍利殿内には、種々小分けありて、左方は祖師堂、右方は土地堂、後方は、即ち開山塔に御座候、抑も舍利殿の因縁に付ては、種々の説ありて、一定せず候得共、通常聞及候處によれば、建長四年、宋人陳和卿、鎌倉府に來り、實朝に謁を請ふ、實朝對面ありしかば、陳和卿、恭しく三拜し了り、涕淚悲

泣して實朝の面を仰ぎ奉る。實朝怪しみて其故を問へば、和卿答へて、幕下の前生は唐南山の宣律師にて候。某の前生は其時の門弟にて候。ひつるが、今何の幸ぞ、恩顔を拜し奉ると申せば、實朝さもあらんずるぞ、思當りし事ありとて深く和卿を信用せらる。是より先實朝一夕奇夢に感じ、和卿の言ふ所と一々符合しければ、終に渡宋の念を發し、和卿に命じて、大船を造らしめ、陪從の徒も夢想に應じて、一に之を定め、頓て由比浦にて艤装しけるに、船動かざりければ、不祥の兆なりとして、渡宋の事止み、其代りに、先に夢想に遊びし所、宋國能仁寺に使節を遣はし、佛牙の舍利を請ひ、持歸る云々、申傳候。ねども、開山佛光禪師、來朝の時、携はくれしと云説稍信を措くべきが如し、五拾錢差出候。ねば、誰れにも見せ候。長さ一寸餘りの牙に候。外に極小顆の圓牙數十あり、親牙の分身なるよし、以前は年々殖ゑたるを以て、諸方より禮を厚うして勸請せしも、今は増殖や

みて、授與するを不得候とか申候。抑も釋迦入涅槃の後、遺効により、八箇所に舍利を配りし筈、決して他に分散しやう道理もなし、何處の馬骨やら、譯もわからぬものを信仰致候事、東西宗教家の一般に候。近頃の新聞にて見候には、印度にて、英國人某、釋迦の遺骨を掘出候由、是れにて亦、世人大騒ぎ可致候。元來一生不犯の行者を、茶毘に付し候。ねば、一種の玲瓏たる骨出候由、左れば印度には、羅漢行者の舍利、山はども御座候。是れまで世間に申はやす佛舍利も、誠に怪しきものに候。正續院の佛牙舍利も、使者歸朝の際、路次京都を過ぐるに當て、時の天子順德帝、叙聞ありて之を鳳闕に召され、遂に留めて還し給はず、實朝大に憤激し、鎌倉と京都の間に交渉起りし事共御座候由、世に迷信家の執拗よりおそろしきものは無御座候。正續院は、舊時此舍利殿附屬寮に有之候由、北條貞時建立に候。後醍醐帝特に勅して、此所を開山塔とせられ、繪旨を下し賜はりつ

る由、開山塔には勅證佛光禪師と書したる、伏見上皇宸筆の額あり、門額には常照と記したる、足利持氏の筆あり、此外先日、澤庵和尚願禮記の中より、抜いて申上候通に御座候以上、

* * * * *

巨鐘

圓覺寺の門を入りて、右手なる山上に、一の巨鐘御座候、其具體は辨財天なるよし、依て洪鐘大辨功德天と申して、其所に奉祠候、賽錢箱に何程でも投込候へば、此鐘撞てもよろしと申候付、小弟も試候處、何せよ大鐘の事とて、弟の方位にては、洪音出させかね候、辨財天に、畧縁記を賣候間、物好きに買見候處、不相變妄談のみに候、其要略を申せば、北條貞時父時宗の芳志を繼ぎ、巨鐘を鑄造し、永く法器に備へんとし、時の住持、第八世西

潤和尚は、宋朝の人にして、當代の宗匠なりしかば、貞時此事を問議せしに、和尚も之を賛し、其教に従ひ、江島辨財天に祈請しけるに、不慮の示現を蒙り、宿龍池即ち開祖來朝の時、龍現じて、船を守護し來りて、此地に止るとやらにて、件の名稱ありと申す池の、水底を搜りて、金銅一塊を得しかば、感激に堪へず、遂に此銅を以て、鑄鐘の功を竣ふ、このゆゑに江島より、弘法大師の彫刻、石像蛇形の辨財天を、洪鐘の具體とし、鐘樓の傍に、勸請し「洪鐘大辨功德天」と號候者に、御座候、何事も方便くと申して、智識は智識程、他の迷信を利用せしものと見ゆ候、弘法大師などは、外道の法術を假り持ひて、大乘弘宣の善巧方便とせられ候、今日の結菜果して、若何宗教家のよろしく、注意すべき事に候、鐘銘は西潤の作にして、唯其縁起を序したるまでに候、あらく、頓首、

猶々圓覺寺山内には、いにしへ四十四五箇寺も、御座候由、それく

由緒有之候、只今存するもの、二十箇寺計に候、委しき事申上候は、
 いろく、難有咄御座候得共、修行の法方に付種々の御尋、今に預り
 あれば、追々拂出しに掛可申候、覇府銷沈の蹟、八幡宮の古器、長谷の
 大佛、観音見物致候、

* * * * *

書籍

登山後未だ一回も雨ふらず、乍去山、明水清、常に如洗に候、紅葉は二月の
 花よりも紅にして、松柏の色も却て彌増候得者、秋の淋しきをも打忘、業
 敷參禪罷在候書籍は、佛日庵の藏書、儒佛大方相掬候間、自由に借覽致し、
 仕合に存候、かねて申上候通、當佛日庵には、代々智識の被住候蹟故、いろ
 いろな珍らしき書物、可驚程、澤山御座候、臨濟宗の常として、讀書は、餘り

よろこばざる方に候間、何れの寺にも、藏書至て乏しく候、同參の中に、餘
 程不自由を、感じ居るものも不尠、小弟のみ意外の幸福に候、扱禪宗にて
 讀書に精なるは、曹洞宗に限候、其代りに公案には、至極疎なるものにて、
 文學教相の方面にのみ、切りに骨折候、傾き有之候は、自然兩派の風儀
 ひとしからず、今日にては、殆別宗旨の様に相成居候、濟派よりは、洞派を
 目して、口頭の禪と詭り、洞派よりは、濟派を斥けて、公案かぞへど、笑候、公
 案を數へるのみも、感心不仕、教相悟りの理窟禪も、賛成出来兼候、

白雲端禪師、五祖ノ演ニ語テ曰ク、數禪客、廬山ヨリ來ル、皆悟入ノ處
 アリ、伊レヲシテ説カシムルニ、亦來由アルコトヲ得タリ、因縁ヲ舉
 テ伊レニ問フニ、亦明ヲメ得タリ、伊レヲシテ下語セシムルニ、亦下
 シ得タリ、祇々是レ未在、

祇た是未在の處、甚難透に候、此に至て、白雲端禪師の孤峻、攀つべからず、肯

来て嶮龍領下の玉能く雙手に分付せらるゝもの、天下幾人かある、世間知らずの室内探りにも得がたし、水中の月を捉ふる、猿臂漢にも得がたし、唯天下に這箇の一人ありて、當さに之を可得候、但し白雲未在の話は、難中の難、小弟等の爲めには、眞に鐵酸脩、容易に咬破しがたし、右は公案かぞへの學人、誓誠の爲に引候、比喻に外ならず、要は唯二十年三十年苦み候ても、自己に復歸する處なければ、更に益なし、何れの道何れの修行にても如此者に御座候、公案も一種の技術と相成候ては、おもしろかる間敷候、其中聖胎長養の事も可申上候、不具、

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

故 洪川 和 尙

致啓上候、追々寒氣強相成候、何方様も無事に候や、弟も參禪の餘暇には、

諸邸宅の蹟、古刹の舊記、又八幡其他にて正宗雲敬の妙手を賞する、坏、諸所散策致候、僅に歩を移せば、左右皆多少の歴史を有せざるなく、伏して七百年の沿革を想像すれば、彷彿として、其境を経るが如く、恰も目前に繪巻物の展すると同様に候、扱故洪川和尙は、近代の龍象に候、實に圓覺寺、中興の祖とも可申人にして、去明治二十五年一月十六日、世壽七十七にて寂せられ、其遺骨は骨清窟と申して、祖師殿の側に御座候、聊和尙在世中の事申上候、和尙は姓今北、諱は宗温、虛舟と被號、洪川は其字に候、諸所にて鹿山と落款せられたるもの見受候、是は當山を瑞鹿山と申すに因みたる者に御座候、父は確乎齋と申されし由、篤實の人にして、古徳の風あり、郷曲に感化を及ばし候位にて、其第三子即洪川師尙、見たりし時、夏袒せず、冬爐せず、毎日く父の書齋に侍して、曾て童嬉に不交、自ら奇相有之候由、抑も師の家は、至極名族の末葉なる由、當時民籍に列せしも、

家風は自ら因襲する所ありて、他の俗に不染、教育行届候者と見ゆ、十二三の頃、父及び仙桂上人に依て、已に秦漢以前の書ハ見盡され候との事、右仙桂上人と申すは、藤澤東咳先生の高足に候、師の生育地は、攝津西成郡、福島村と申す所にて、仙桂上人は、其近郷福泉と云所の、某寺に住持せられ、業を享くるに、場所もよく、且儒佛二教の對照に、最もよき因縁を與へ候者と見ゆ候、十四歳の春、桂上人に携へられて、東咳先生に謁し、其塾に在ると五年、後篠崎小竹、廣瀬旭莊等に歴從し、十九歳の時、浪華の中之洲に業を開き、帷を垂れて師發明の折衷學を唱へられ候處、諸藩士醫家僧流頗る多く、集り候由、兎に角先輩の説意に適はずとて、別に一主義を呼號し、都會の地に、而も僅十九歳位にして、儼然師家を氣取るなど、其尋常の漢にさらざるを被知候、師は中くの勉強家にして、晝讀夜講、孜孜不怠候事、凡五年、一日孟子を講せらるゝの次、浩然章に至り大聲を發

して曰く、孟子は浩然を説く、我は浩然を行はんと、自是脱俗の志を抱き、父母の之を氣遣ひ、爲めに妻を迎へて抑留せんとするにも關はらず、二十五歳の時、親眷門人を招請して生別の宴を設け、人毎に書籍器品等を贈遣し、且一語を附して曰く、

孔聖釋尊非別人、彼謂見性此謂仁、脫塵休怪吾、竊放行箇浩然一片、眞又少婦田中氏に與ふる一紙、

我と汝と譬へば、縷糸を以て、土偶を繋ぐが如し、今糸斷れて、我は山に入る、穢土厭離帖如件、

九華眞人花押

阿麻氏

是より先、父確乎齋も、遂に其志の翻へすべからざるを知り、師の出家を許し、此時白隠親書權現尊號一軸を、附屬して、錢となせり、且曰く、汝若し

道眼明ならずして、縦へ名利巨蘭を擁すとも、我れ終身の恨なり、道の爲めに淬礪、打殺せらるゝも、毫釐の恨なしと、師去て萬年山相國寺に登り、鬼大拙、演禪師を拜して師資の禮を執れり、一般の人は兎角、箇様の事を怪むものに候得共、思想の自由を有する洪川和尚の如きは、千變一律の謂ゆる、善人仲間には、到底容れらるべくもあらず、三代以降消極的に、只管忠孝くとのみ云ひて、無事平和を希ふ、漢學者流の知る處にあらず候、最初鶴林隻手の則を與へられ、或は兀坐不臥、或は七日斷食、凡三閱月にして、演和尚其の願心の固きを見、剃髮をゆるし、戒を授け、安名を守拙と付られ候、師是より選佛場に入り、衆と俱に入室し、晝參夜參、怠慢なく工夫せらる、一日鬼大拙講坐の折、佛光國師十二歳の時、父に隨て山寺に遊ひ、僧の「竹影掃、堦塵不動、月穿潭底、水無痕」と云句を吟するを聞き、忽ち省所ありて、出家を志せりとの因縁に至り、洞然として平生の疑團消し、

飄る悟入の處あり、然れども鬼大拙と呼ばれたる惡辣の師匠なれば、中へ容易の事にては肯ふべくもあらず、師入室所見を呈せんとすれば、怒罵鞭打、いつも是くの如くにして、毒手觸れがたし、師常に涙を含て室を出、路次人なき處に至て、泣然たること毎々なり、其後大拙老漢重病に罹り給ひければ、參禪も儘ならず、大衆追々去盡し、唯師と外一人残りて、看護怠りなく、其暇には精勵刻苦、頭燃を救ふが如くに、晨參暮叩す、外一人は即ち荻野獨園師なり、而して大拙和尚は尙打倒し、蹴倒し、師の面を見れば、忽ち怒氣を發するが如き有様にして、殆ど讎敵も管ならず、去れども師恭敬服事、烹饌撫背、鋤圃採薪、汲水灑掃、勞を忘れて、只周からざらんとを恐る、此時に當て師言はんと欲して、言ふべきなく、呈せんと欲して、呈すべきなく、進むに不得、退くに不得、伎倆維谷まり、知見皆忘し、快々鬱々、飲食味なく、形容癯瘠して、面色土の如く、人皆生命を氣遣ひ、或は近

日にして驚れんとまでに、噂しける程に有之候處、一夕獨り禪堂に入りて、精神を抖擻し、端坐心を攝して、清々純熟、曉聲を報ずる頃、稍慶快を覺ふ。師愈益公案を提撕して、凝坐體究、終日堂を出ず、粥飯皆忘る。黃昏に至る頃、忽然として前後際斷し、絕妙の佳境に入て、眼耳惺々、眼耳皆なきが如し。須臾にして胸次豁然として、眞眼耳を開き、大好事を見、大好聲を聞き、自知自得、甘露を飲むが如し。從前の疑團、從前の學碍、底に徹して、一時に雪解氷釋す。忍俊不禁、覺へず知らず、口を衝て連叫して曰く、我れ神悟す。我れ神悟す。百萬の典經、日下の燈、太だ奇なり、太だ奇なり、と乃ち偈を説ひて曰く、

疎潤孔子相逢阿堵中。

憑誰多謝去、好謀主人公。

即忙はしく院に走り、是處を呈す。大拙和尚始めて徹徹として笑ふ。師曰

く、某し曾て禪に妙悟ありと聞く。今日始めて知る。古人の我れを欺かさるを、和尚曰ふ、爾一日の慶快を以て、是となすなかれ、今より須らく四句の誓願輪に鞭ち、無量の妙慧を喚發し、無數の因縁を透過して、末後別に生涯あるを識得すべし。無慧の定坐は邪定なり、慎て無念無心にして、了るなかれと、其餘諄々涙を含て誓願し、昏時より初更に至る、師感承、泪を拭て退く。是より師の入室ごとに、大拙和尚授するに、數段の因縁を以てす。或は直前看破、或は一二日にして透見、毎々舉措快活、自然口妙言を吐き、機妙用を呈す。一夜和尚師に謂て曰く、箇事譬へば、珠を剝琢するが如くに相似たり。愈剝げば愈光る、愈琢けば愈明なり。我れ已に、爾を一剝琢し了る。爾幾生の工夫に勝されり、よろしく之を思ふべし。即一語を書して、師に與へて曰く、

臨危不變、眞大丈夫。

師喜悅嘗ならず、日を追うて、神采煥發、禪病自然に癒へ、形容舊に復し、面色潤を増す、人皆大に之を異とす、師愼て歡喜を秘して、漏さず、密々參究怠らず、以上大略、浩川老師入頭の因縁に候、往昔釋尊の雪山に於て、「アヲ」^ツ「カヲ」^ヲ等の仙人に薪水の勞を執り、鞭打蹴撃、幾たびか絶息するに至りしも、同様の事に候、彼は至尊の王位を捨、此は少壯の意氣を抑へ、死して、又活し、活して、又死し、大道の轡轡に入り、箇事を究明せられし跡、今日吾人の追慕に堪へざる所以に御座候、亦修行の容易ならざるを御推了ありたく候、久振にて孔夫子に出合はれ候はば、此度は數千里外の聖人にあらずして、阿堵の中に手を携へて、語るの人に有之候、件の奇遇も誰れに憑て謝すべきぞ、唯好謀主人公のあるあり、誰れか是れ好謀主人公、よくく御念可被入候、孟子浩然の氣によりて立志せられ、危きに臨て變せず、眞に大丈夫、嗚呼四十五にして心を動かさざるもの、天下幾

人かある、修行の功能も、此に至て價值あるものに候、黄金色上、更に黄を添ふ、師は其後備前の曹源寺儀山和尚に參叩せり、和尚機活手、機泊しが、だし、孜孜、刻意、日ならずして、數段の因縁を透過し、終に復た從前の所得を忘却し、更に南泉雲門等の用處を徹見し、諸方に遊で徹骨徹髓、古人の別妙處洞見せざるなく、諷防岩國吉川家の菩提所永興寺に住せられたることは、安政五年師四十三歳の時なりしと申候、永興寺にありて、徒衆頗多く、其中には有望の風籬も不抄候ひし由、陽明學者東澤瀉先生も、此岩國の人にして、旗幟翻々たるの折柄、恰もよし師の禪海一瀾世に公にせられ、先生よりも亦之に對して、禪海翻瀾の著あり、一方は禪を以て儒教を了義し、他は儒道を據守して、雄を佛域の外に張り、思想界に一異觀を添へしも、此時に御座候、是より先、鎌倉圓覺寺の東海和尚遷化せられ、一時法座を虚うしければ、師を教請して止まず、是非共本山に住せられ

度旨、荻野獨園師に憑りて、賜を通し來るもの三四回に及びければ、師元荻野氏と故あるを以て、遂に辭しがたし、明治八年の十一月四日、教部省よりも師を召して、特撰を以て圓覺寺住持職に任ずとの命にて、同廿八日師始めて當瑞鹿山に晉興せられ、十二月八日開堂式を修し候ひし、又大教院に赴き、總發生徒を董せらる、翌歲旦には、大教院において、祝聖燒香、二十日參内賀正、天顏を拜し、二月一日、開院式を修し、臨濟録を提唱せらる、其時の偈に、

二十三流一卷錄、錄中仰見幾重關、

自斯將箇正法眼、欲照五洲海外山、

當時教校の生徒に對して、適切の句に候、翌年の元旦にも、亦大教院に於いて、祝聖燒香、二十日參内賀正、天顏を拜せらる、當時生徒の數、雲水百餘名、參禪居士三拾餘名なりしと申候、明治十年九月、發長職を辭し、當山に

歸住し、正續院と申す所にある禪堂を開き、本分の成規を以て、衲子を接し、東京居士は正傳庵と申す内を、擇木園と稱して、其處にて參禪を勤め申候由、尙折々上京居士及び禪子を接得せられ、勵精會と云居士の團體起り、早川千吉郎氏、鈴木馬左也氏、北條時敬氏等の諸士首唱にて、俗流に禪波沸き、餘程盛大に趨き、白隱の雙手音聲、趙州の無字など透得して、安名を附せられしもの居士禪子百名計りに及び候、今の正覺會は、師の遺志を繼いで、宗演和尙、牛込月掛寺に於て開かれたるものに、御座候、明治十八年師志を發こして、禪堂を再建せんと欲し、鳥尾得庵、山岡鐵舟、中島長城、諸居士と謀り、化緣發起勸進帳を製し、各士に託して金を募り、三年にして竣成す、明治十六年一月、師年六十八にして、只今の宗演和尙、大事了畢し、偈を與へて、證明の意を表せらる、抑も宗演和尙は、若狹の人にして、妙心越溪禪師の徒弟に候處、久しく、洪川老師の門に在りて、已に大事

を了し、此年幸ひに師京都に趣かれければ、先づ越溪和尚に面會せられ、乞うて師の徒弟となし、其頃當佛日庵、席を虚うしけるを以て、其住職に補せられ候。當庵は歴代正續院の僧堂に結縁深く、誠節和尚、東海和尚、并に浩川老師、皆住院の跡に候。當時尙浩川和尚の住持中にて、翌十七年八月、隱寮一撃齋、再建落成し、師移り住して宗演和尚、其跡に座せらる。右一撃齋を改めて、蒼龍窟と名つけ別に遊仙窟と號し、師自ら言ふ、余壯歲、菩提心を發し、霜辛雪苦、今此境界に至る、是れ余修道の結果なり、是れ余望む所の極樂界なり、亦何をか求めん、即ち遊仙窟と名つくる所以、只是れのみと、明治二十五年一月十六日、世壽七十七、法臘五十二にして、示寂せられ、淨智寺の背後金寶山と云所にて、荼毘し、遺骨を正續院内開山塔の側に歛め、骨清窟と申候。師は前にも申す通名流の子孫にして、夙に精を儒教に勞せられしも、諸先賢の注脚、終に師の思想を柱ふるに足らず、別

に一家の見を立しも、尙満足を與へず、便ち禪門に入去て、右のごとく大に宗風を振起せられ候。死に至るまで一日のごとく、俛焉職を盡され、幾多の徒衆、幾多の居士禪子を育成せられ、其餘恩にして、今日東京にても、許多の居士會起り、自由に大道を學ぶとも出來候。十七年の二月、師鳥尾山岡二居士の請に應じて、明道協會に蒞まれ、碧岩錄の提唱ありしより、毎月一回必らず、之に臨席し、講演被成候由、今は其跡絶へたるも、古老の間に、往々斯道の存するあるは、實に浩川老師、與て力あるものと可仰候。師は頗る濃情の性にして、人々に愛慕せられあるとは、親參せし人に聞て可得知候。末年に及で、最も居士攝得に力を用ゐられ、師の印可を受けし人には、川尻寶岑翁御座候。又身體至て強健なりし爲め、勤務に精なると、少壯者も不及、其滅時尙整然として、齒揃ひ一本も欲損無之候ひしとなり、左に末期の偈、一讀、蒼龍窟の清風、千里の外、尙襟を開くべく候。

忘却兮忘却兮。不風流處也風流。
蒼龍俄爾巴蛇變。衲被冒頭萬事休。

右はんの大略のみ申上候、尙歸京拜晤の上、委しく親話可致存候、頓首、

* * * * *

傘松祖師道詠

致啓上候、益御清適、珍重奉存候、然者傘松祖師道詠と申、小冊子見受候間、
其中より二三十首拔萃、差上候、兄は歌に興味被爲持候間、至極おもしろ
からんと存候、且又最明寺時頼、初め道元禪師に參せし由、鎌倉と因縁あ
るのみならず、此中十首は、は、最明寺にての作なれば、當地の土産とし
て、御賞味可被下候、抑も越前永平寺より、五十丁計山奥に、大佛寺と申古
刹あり、即本邦洞派の開山、道元禪師、始て法堂を建られ候處にて、其表に

傘のやうなる老松御座候由、常に其蔭下に端坐せられしとの事、傘松祖
師とは、それに因みての謂なるべく候、

長月の紅葉のうへに雪ふりぬ

みる人誰れかことの葉のなき

是は「寛元三年九月二十五日初雪の一尺ばかり降ける時」と題しあれば
此傘松樹下坐禪の頃の作ならん、又草庵雜詠と云題の下に

山深み峯にも尾にもこゑたてゝ

けふもくれぬと日くらしのなく

都には紅葉しぬらんかく山は

夕も今朝もあられ降り

山のはのはのめくよひの月影に

光もうすくとふはたるかな

おろかなる心ひとつの行するを

六の道とや人のふむらん

此他深山有之候、かのづから幽静の蹤伺はれ候、左の十首は「寶治元年相州鎌倉に在して、最明寺道崇禪門の請によりて、題詠十首」とあり、三十一字にてよく頌せられ候。

教外別傳

あら磯の波もゆよせぬ高岩に

かきも付べきのりならはこそ

此詠特に貴く聞ゆ候、教外別傳の意は情を以て解すべからず、意を以て計るべからず、擬疑し去らば千尋不可焚にて候、唯懸崖に雙手を放て、命根絶せざれば得べからず、兄は平生「バイナル」御研究被成候故、聊申上候、「アダム」「イーウ」生命樹菓を食はんとして、之に近づきし時、天使烟

劍を以て、途を遮り、自ら舞旋するの劍は、樹を隔候、是れ謂ゆる高岩にかきも著くべきの心に候、生命樹を得んと欲せば、唯十字架に死して、再び蘇るより外無御座候。

不立文字

いひ捨しその言の葉の外なれば

筆にも跡をとめさりけり

「三級浪高魚化龍、癡人猶屏夜塘水」文字の外、の文字あり、高く御眼可被着候。

正法眼藏

波も引風もつなぬ棄をふね

月こそ夜半のさかりなりけれ

「霜天月落夜將半、誰共澄潭照影寒」繁かざるの舟を放ち、孔なきの笛を

吹きて始めて得らるべく候

涅槃妙心

いつもたゞ我ふる里の花なれば

色もかはらず過し春かな

陰陽不到の處別に一片の好風景御座候、月庵和尚の歌に、「枯果てしかも花さく梅か枝にこゑをもたてす露のなく」是れ即ち吾人の古郷に候一たび歸見たくば修業必用に候

本來面目

春は花夏はとゞきす秋は月

冬雪さねて冷しかりけり

利休の歌に「寒熱の地獄にかよふ茶柄枚も心なければ苦しくもなし」貧賤に處しては貧賤を行ひ富貴に處しては富貴を行ふ中庸の端的御

細嚼可被成候

即心即佛

おし鳥やかもめともまた見ぬわかぬ

立る波間にうき沈むかな

無難禪師の歌に「はとけはととへはまよはぬものそなきをのかこゝろと知る人もかな」吾奴は識らず錦囊の重きとを青山の暮色を褒み得て歸ると古人の詠せし處に眼御若可被成候、東坡の吟に「不識廬山眞面目、只緣身在此山中」少しく離れて御覽可被成候、「只箇一點無明、煇鍊出人間大丈夫」又「頻呼小玉元無事、只要檀郎認得聲」佛に別段用事はなし、只箇の心を示すまでの事に候、「人面不知何處去、桃花依舊笑春風」

應無所住而生其心

水鳥のゆくもかへるも跡たねて

されども道はわすれさりけり

是は金剛經の中に聲香味觸法に住して心を生すべからず應さに住する所なくして其心を生すべしと有之候文に候此歌特に能く其心を誅せられ候建仁の龍宗和尚いづくにもこゝろとまらば住かぬよなからへはまた元の古郷とよまれしも此文の意にて候法相に住するも不可色相に住するも不可畢竟無作の行能く此心を莊嚴して萬里雲なく日月長へに照すかごとくなるべしとの意に候

父母所生身即證大覺位

尋ね入る深山の奥のさとそもと

我住馴れし都なりける

是は華嚴經にある文句に候歌の意は佛と云も法と云も皆心の垢眼中の塵故に父母所生の身を離れて別に安樂淨土を求むるは他郷に客作

するの賤人に候法華信解品中長者獅子の譬へも是にかなしく「ハイア」も唯此處を専途と教へ候注意して御覽可被成候我佛教にて回光返照と申すは此事に候

盡十方界眞實人體

世の中にまことの人やなかるらむ

かきりも見ぬ大空の色

是も華嚴經の意にして限りも知れぬ大虚の中唯一無位の眞人ありて常に我か面門に向て出入す其外何れを捜しても更に眞實の人は見ぬすとなり借問す一眞人何處に候や賊を以て子となし奴を認めて耶と作すもの多く候四大分離の時如何か主を辨じ可申候や

靈雲見桃花

春風にはころひにけり桃の花

枝葉にのこるうたかひもなし

靈雲の志勤禪師、三十年も辨道して、未だ悟らず、或時遊山して、山腹に休息し、遙に人里を望見す、時方に春なりければ、桃花のさかりなるを見て、忽然として悟道せり、即ち偈を作りて、大滄禪師に呈せられ候、「三十年來尋劍客、幾回落叶又抽枝、自從一見桃花後、直至如今更不疑」と其何の道理を見しかは、他より言ひ不可得候得ども、兎に角此時從前の疑情、全く解去りて、大滄も縁より入るものは、永く退失せずとて、即ち許可せられしと申事に候、扱是迄が、即ち鎌倉にての詠なるべく候、此外にもおもしろき歌御座候、

鏡清雨滴聲

聞まゝにまた心なき身にしゐれば

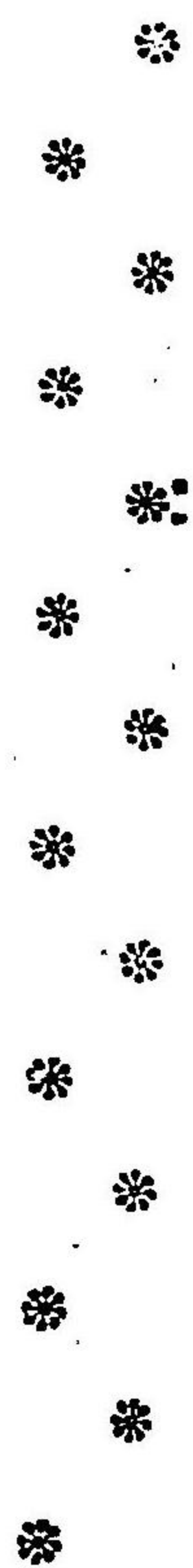
そのれなりけり軒の玉水

鏡清禪師、或時門外に雨滴の聲を聞き、傍の僧に向て、是れ何の聲ぞと問はれしに、其僧雨滴の聲にて候と答へたりしに、鏡清申さるゝは、「衆生顛倒して己れに迷ひ物を逐ふ」此因縁を詠候ものにて、觀音の耳根圓通と申すも、之に外ならず候、己れに迷ひ物を逐うて、止まざるもの、之を儒にて放心と申候、王陽明は學者の弊を救はんとて、特に此處に骨折られ候、芭蕉の句「古池や蛙飛こむ水の音」よく「味ひ候はば、其時の境も、其人の性格も、目睫の間に往來して、眞に芭蕉に面會する心地せられ候、即今何れの處に向て鏡清に相見被成候や、又

聲つから耳にきこゆる時しれば

我友ならむかたらひそなき
 と同題に見ゆ候、孔子顔回終日對坐して、互に乖く處なかりき、如何にして善く如此を被得候や、是れ有言か、是れ無言か、此歌を解得候は、顔回

孔子に面會し得て、親しかるべく候。無難禪師の歌にも「耳に見て目見さくならば疑はし、いのちなりけり軒の玉水」と有之候。耳を以て聞かば會しかたかるべく、眼處に聲を聞て始めて可被得候。



牛過窓櫺

世の中は窓より出る牛の尾の

引ぬにとまる心はかりそ

是は五祖の演禪師の言に「譬へば水牯牛の窓櫺を過ぐるか如し、頭角四蹄、都べて過ぎ了る、甚麼に因てか、尾巴過ぐることを得ざる」と有之候。尾巴とは尾の事に候。是れ甚だ奇怪なる言に候得共、此話見得候はば、罷參を放さるとて、參禪は一通り成就せりと申ものに候。松源和尚云く、長沙

岑禪師に問て、南泉和尚遷化し、「明眼、衲僧、因甚麼、脚下紅絲線不斷」此話甚だ相類せり、又秀首座と云もの、長沙の岑禪師に問て、南泉和尚遷化して、何れの處に向て去ると申候時、岑禪師答へて、「石頭爲沙彌時、曾見六祖」石頭がまだ小僧でありし頃、六祖大師に見ゆし事ありと申され候。此問答、難中の難、容易に透得しがたし、縦へ情解は出來候ても、室内にては、命根を抜かれ候。但し前の牛窓櫺の話、見得候はば、左までかたき事にも有之間敷候。小弟共の如きは、是等の則に向て殆ど、齒も立かね候。「バイナル」に基督死より蘇りて父の右に坐すと有之候。父の右とは、何處を指候や。若し天に在りと云は、依然として偶像なり、地にありと云は、基督未だ昇天せず、即今如何して、基督に相見致候や。若し落處を知らば、牛窓櫺、南泉遷化の話に答得て餘りあるべく候。左に拙劣なる三轉語を出し候。「バイナル」研究會の御連中、一々之に著語被下候は、幸甚(一)耳環何

としてか犢牛と成り去る答へて曰く、聖靈父より出づ(二)「モウと」何と
 してか約束の地に入るを得ざる答へて曰く、祝日に死屍を留めず、(三)
 礮石碎け金積養られて何れの處に向て去る答へて曰く、基督をして洗
 脚せしむ、

夢中説夢

本末もみな偽りのつくも髪

おもひ亂るゝ夢を社とけ

此歌わるき方に取るべからず、永祖の正法眼藏と云書の中に、覺中の發
 心、修行、菩提涅槃あり、夢中の發心、修行、菩提涅槃あり、おのゝく實相なり、
 大小すべからず、勝劣すべからず、夢是れ盡大地なり、佛祖現成の道理か
 ならず、夢作夢中なり、解脱は元夢中説夢にあらずと云事なし、是れ唯佛
 與佛の境界なり、金を賣るの人は、須らく是れ金を買ふの人なるべし、玄

の玄證の證と申され候、或僧巴陵に問うて曰く、如何なるか是れ道、巴陵
 答へて「明眼人落井」と申され候、此話徹根する人は、夢中説夢の道理會得
 難かるべからず存候、烏丸中納言の歌に「されはとて覺すもわれなまよ
 ひきて、とても夢みる此世なりせば」と御座候例に因て左に一轉語を呈
 候、何卒御連中各著語被下度候、如何なるか是れ安息日、答へて曰く、父の
 如く我も亦働く、

十二時中不空過

人しれすめてし心は世中の

たゝ山賤のあきのゆふくれ

是れも前の夢中説夢の意解し得られたる人には容易なるべく存候、小
 弟試みに「バイナル」を引て、一轉語を下し候、曰く「アダム」の熟睡「イーウ」
 生る、

此十二時中不空過の道理に點頭する人は、「バイブル」中の安息日の意に、一段の滋味あるべく候、「石女舞成長壽曲。木人唱起大平歌」能く石女の曲を見、木人の歌を聞くの人にして、始めて賤山人しづやまかみの秋の夕暮をも愛づる心なるべく候、中將姫の歌に「中く」に山の奥こそすみよけれ、くさ木は人の善惡さかをいはねは」とあるは、意同しからず、是れは唯他人の讒訴など、かよばぬ隠靜の山奥に引籠りて、身の安すらぎたる様をよみたるのみに候、乍去姫は法華の義を諦らめられたりと聞けば、或は這箇の道理にも、入られしものか不知候、

坐禪

濁りなき心の水にすむ月は

波もくたけて光とそなる

此歌の下句、よくく味ふべし、汪洋として濁しても濁らず、澄しても澄

まず、是れ坐禪の妙功に候、何を以て如此なるを得候や、他なし「波もくたけて光とそなる」地獄の中よりも光明發し、糞蛆も釋迦彌陀と同淨樂に候、本來無一物とて、佛來るも三十棒、魔來るも三十棒、修行涅槃など云ふ悟り臭きとは、風上に据置べからず候、君子は周くして比せずと申して、對待を絶し去り、偏黨なき大人は元、萬物一體、何物かよく、染汚可致や、大燈國師の歌に「坐禪せは四條五條の橋の上、ゆきゝの人を深山木にして」往來の人を深山木と見るまでの、坐禪辨道肝要に候、「バイブル」研究會の御方に問ふ、惡魔若し天使の服を着來らば、如何して正邪を辨すべきや、自ら代て答へて曰はん、基督を殺し、殿堂を毀ち、猶太人を逐へ、

此心天つそらにも花をなふ

三世の佛に奉らはや

是れも右同題に出候、現在、過去、未來、三世恒河沙の諸佛に向て、一時に花

を供し、六道の亡靈、一時に濟度するの、手脚を具する人にして、始めて此歌了會せらるべく候。唯此心即ち坐禪に候、よくく師家に就きて、吟味可被受候。基督の十字架、神に向ては供養となり、人に對しては贖罪となる。借問す何れの處に基督を尋ねん。

禮拜

冬草も見ぬ雪野のしらさきは

をのか姿に身をかくしけり

此歌實に可貴候。白鷺能く雪裡に身を藏し候。端的、是れ禮拜得髓に候。黄檗禪師は額に瘤の出來るまでに、善く佛を禮拜せられし人なり。其會下に大中と云ふ和尚あり、或時黄檗の頻りに禮拜し居るを見て、檗に問うて曰はく、師はいつも我く共に示して、佛に著して求むべからず。法に著して求むべからず。衆に著して求むべからずなど、申さるゝが、師の左

様に禮拜なさるゝは、何を御求めに候や。黄檗答へて曰はく、「佛に著して求めず。法に著して求めず。衆に著して求めず。常に禮拜すると、是くの如し。」此公案解得候は、歌の心の易かるべく、且又基督は神にして、善く神に祈禱を捧げられし意も自ら見ぬ候べく、加之元來坐禪の身にして、善く坐禪し、道滿の身にして、善く修行辨道するの工合をも、分明なるべく候。

詠法華經

溪の響嶺になく猿たぬくに

たゝ此經をどくと社さけ

東坡の詩に「溪聲元是廣長舌。山色豈非清淨身。夜來八萬四千偈。他日如何舉似人」とあるも、和泉式部の歌に「法の花八卷はかりにかきらめや、松竹さくら當意即妙」と御座候も、おなじ意に候得共、前者と後者とは、稍別

相あり、前者は般若の意にして、後者は永祖の詠と同じく、法華の意なり、是等の道理は別に師に就きて、歸らめらるべく候、

夜もすから終日になす法の道

みな此經の聲とこゝろと

此經の心を得れば世中の

うりかふ聲も法をとくかは

是れ亦同題に候、三首共此經の二字、御座候故、動もすれば金剛經の諸佛無上の法皆此經より出づの此經と同意のやうに、心得候ものもあらん、去れど永祖の此經と置かれしは、法華を指したるものに候、序に申上候「バイナル」にも華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃の別御座候、初めに「エマシ」の樂園は華嚴の會座、「エマシ」までは鹿野苑、即ち阿含教の會座、沙漠は般若、基督の一生は方等、復活後四十日は涅槃、外天後は法華、又「ノア」

の方舟、「ヨナ」の魚腹、「イザク」の山上に犠牲とならんとせし端的、紅海「ホルマン」及び十字架、皆般若なり、其外「アマム」の樂園失墜より「エマシ」に入るまでの間にも、此六會の意皆備はれり、「エマシ」を出て「カナシ」の地に歸るまでには、特に時期を區別して、分明に示し候、其れより師士時代「エマシ」の建國、他國よりの侵掠、「バビロン」の囚虜、羅馬の唐歴、皆此六會の謂はれを寓し居候、佛教を學で、始めて「バイナル」の意明らかになり得べく候、佛教も亦「バイナル」を學で、大に發明する所有之候、此兩者決して相離るべからざる、關鎖有之候、乍憚「バイナル」研究會の御連中によるしく、實に諸君參禪傍ら、比較的いろく御研究の段、至極贊成に候、宗教家として、比較的の智識なきは、恰も普通學なくして、一科の専門を學びたるかどとし、世間に何の用をかなさん、今日の僧侶に鑑みて、可被知候、頓首

基督教と保羅教

小弟かねて主唱罷在候、基督教と保羅教との差別に付、御尋越、且御意見の邊も、一應理なきにあらす、乍去言語や思慮の及ぶ所は、聊の藩園にして、皮肉の一斑を申すにも足らず、弟の筆先にては、到底盡すべくもあらず、候得共、御参考までに、左に比較致候、唯馬太傳にあるごとく「來りて見よ」の句御玩味可被下候。

基督教

神と人とは一なり、故に人々皆神たるを得べし。

保羅教

神と人とは、絶對的に別なり、故に人は如何にしても、神たるを得べからず。

靈と肉とは不二なり、故に復活とは、靈肉一體を云ふなり、聖靈は體なり、佛教にて猶法身と云ふがごとし、

靈と肉とは別體なり、故に肉は朽ちて、靈は朽ちず、父を以て體となし、聖靈と子を用とす、

神なる基督、人なる基督、魔なる基督あり、基督は神に入り、人に入り、復能く魔に入る、心物を立てず、故に物心不二なり、

神なる基督、又總に人なる基督ありて、魔なる基督なし、神に入り、人に入り、魔に入るべからず、唯心教なり、

地下に埋葬せられ、分身應化を説く、故に父の右に坐すと

地下に葬られたる端のを説かず、唯父の右に坐して、信徒

云ふは、人々の脚下に之を証す、

大死一番再活現成を説く故に、基督と俱に自ら死するを肝要とす、

誰れも皆基督にして、一切の罪を贖ひ、天地を淨むるを得べし、

神をも、其位相を變せしめ、須臾くも偶像たらしめず、故に殿堂を毀ち、基督を復活せし

の偶像となり了れり、

基督は罪なくして死し、吾人に代りて罪を贖ふたりと説くのみにして、自らの復活を言はず、

人は基督即ち王にあらずと説く故に、律法の奴隷として、終身満足せざるを得ず、

神は常に偶像たり、耶蘇を殺さず、猶太人を散せず、至聖所と聖所の間に懸る殿幕は、眼

め、猶太人を散す、

基督は、舊約の解釋者たるを以て、一々舊約書中の寓意と、

隱微を、新約に顯かにす、

無形有形、眼裏に滯るものは、皆之を偶像とす、

日々是れ好日、大死一番復活し來れば、過現當正さに是れ一聖日、一安息日なり、

紅海は洗禮なり、「ヨルダン」

は十字架なり、

裏の花となりて、今猶存す、

舊約と新約との關聯を明にせず、唯僅かに前者は後者の準備と做す、

有形を偶像とし、無形を聖體とす、

七日の初めを以て、聖安息日となし、餘は皆地に屬して天に屬せず、

紅海を越すも、「ヨルダン」を渉るも、皆洗禮の儀型にして、曾て十字架なし、

基督を信するものは皆基督に隨て死せざれば益なし、基督の論法は因明的なり、

基督一人死すれば吾人は之を信するのみにて天地淨し、

善惡樹は生命樹の兩極なり、

保羅の論法は「ロマンチック」的なり、

善惡樹、生命樹、絶對的に相容れず、

基督教は感化的にして把住放行併せて之を用ふ故に基督教は春夜月の朦朧たるに似たり、

保羅教は征伏的にして魔に入るとなく昭々靈々地に坐して連天秋水の深きがごとし、

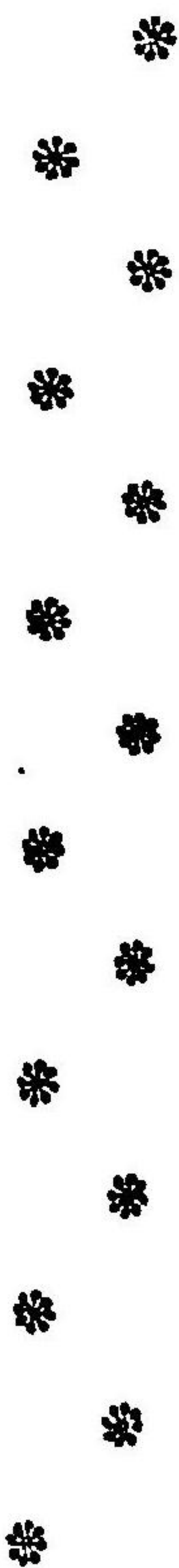
基督教は舊約を重んず、

保羅教は舊約を輕んず、

大略右のごとくに候、保羅教は到底日本に行はるゝ宗旨にあらず、唯基督

基督教は追々蔓延可致候、西洋人を見んと欲せば彼れの宗旨を知らざるべからず、恰も儒佛を外にして我日本人の腹見ぬざると同様に候、且今日にては「バイナル」の勢力全世界を壓し、遂に日本のみ殘居候、今後の人には是非共「バイナル」儒教、佛教、此三者は知らざるべからず候、社會に痛痒、休戚を感せざる無智の僧侶は「バイナル」を研究すれば、彼此嫌候得共、頓著せず、御やり可被成候、彼等は自己一身の安否を氣遣ふのみにて、國家を知らず候、朝家の爲に祈禱をし、至尊の肖像を掲ぐる等は、彼等唯、政府の保護を受けんと諂ふにて候、佛教は決して彼等に托し置くべきものにあらず、殊に禪宗のごときは、ひしる僧侶よりも、在家に適當致候間、此後は教會組織にて居士にて可持候、僧侶は唯血脈の亂れざるやう、法燈を護するのみにて足れり、蓋し世は化學又は順列法、聯結法等の道理にて、相互の調和上如何に變ずるか、如何なる物を生ずるか、懸計決

して退守すべき者に無御座候。今日の保羅教と、佛教は、防禦的、割據的にして、統一の雄にあらず候。俗言に御耳被傾聞敷候。以上。



六祖慧能

大鑑禪師、慧能和尚の因縁に付、一通り申上候。師は盧姓、幼にして父を喪ひ、其母志を守て鞠養す。長するに及で、家尤も貧窶なりければ、樵采して母に給せり。或日薪を負ひ、市中に入り、何人か、金剛經を讀むを聞くに、「○ソツ無所住而生其心」と云句に至り、慧能忽ち、感悟被致候て、是れより其意を母に語り、出家に及候。終に師を尋て、黃梅山に造り、五祖大滿禪師に參謁す。祖問て曰く、何れより來る。答て曰ふ、嶺南。祖又問うて申されけるは、來て何事をか須めんとするや。師曰く、唯作佛を求む。祖曰く、嶺南の人、佛性

なし。若何ぞ佛を得ん。師即ち答ふ、人には南北あり、佛性豈然らむと。五祖も是れ異人なりと見て、乃ち訶して、碓房に就き、杵臼の間に服勞せしむ。それより八ヶ月計經て、五祖大法を付屬するの時至れるを知り、遂に大衆に告げて、申され候様、正法解しかたし。徒に吾言を記し、己れが任となすべからず。汝等各自意に隨て、一偈を述べよ。若し語意冥符せば、衣法皆附すべし。時に五祖の會下には、七百餘人あり、第一座の神秀と云は、學内外に通じ、衆の宗仰する所なり。咸共に推稱して曰ふ、若し秀上座にあらずんば、誰れか之に當るものあらむ。秀竊かに、衆の己れを譽むるを聆き、復思惟せず、偈を作ると已に成り、數度之を呈せんと欲して、堂前に至るも、心中恍惚として、偏身汗流る。呈せんと擬すれども、得ず。前後四日を經此くの如くすると、十一度終に偈を呈すると、不得候ひしかば、秀乃ち思惟候様、如かず廊下に向て、書著し、和尚忽ち見て、好しと道は、出て禮拜

し、是れ秀が作なりと言はん、若し或は未だ堪へずと道は、枉て山中に在て、尙年を數へむ、此夜三更人知れず、自ら燈を執て、偈を南廊の壁間に書して、心の所見を呈す、其偈に曰く、

身是菩提樹、

心如明鏡臺、

時時勤拂拭、

勿使惹塵埃、

五祖經行して、忽ち此偈を見て、是神秀の述る所なるを知り、乃ち讚歎して曰く、後代之に依て修行せば、亦勝果を得んと、各自に誦念せしむ、慧能師、碓房に在て、忽ち大衆の偈を誦するを聞き、同學に問うて申され候は、是れ何の章句ぞ、同學曰く、汝知らずや、和尚法嗣を求む、各をして心偈を述べしむ、此は則ち、秀上座の述る所なり、和尚深く歎賞を加へらる、必ず將さに、法を附し、衣を傳へらるべしと、師問ふ、其偈云何、同學爲めに、神秀の偈を誦す、師聽き了り、良久して、申され候様、美なるとは、則ち美なり、

了するとは、則ち未だ了せず、同學訶して曰く、咄庸流何をか知らむ、溢りに狂言を發するなかれ、師曰ふ、汝が信せずや、願くは、一偈を以て、之を和せんと、同學答へず、相視て笑ふのみ、師夜に入り、一童子に告げて、引て廊下に至り、自ら燭を秉て、童子をして、秀の偈の側に、一偈を寫さしむ、

菩提本非樹、

明鏡亦非臺、

本來無一物、

何處惹塵埃、

この偈を看て、一山の上下、皆曰く、是れ肉身の菩薩の偈なりと、内外かまひをしく稱す、祖これ盧能が作なりと知りて、他人の嫉惡を避けんが爲に、乃ち曰く、是れ誰れがなせるぞ、未見性の人なりと、云ひて、抹し去る、之に因て、一衆悉く省みず、夜に及で、祖竊かに碓坊に入り、問うて曰く、米白まりしや、師曰ふ、白まれり、未だ篩不申候、祖杖を以て、臼を打つと、三下す、師笑の米を三たび斂て、入室す、祖示して申されけるは、諸佛出世して、一

大事因縁の爲めに、機の大小に隨て之を引導す、遂に十地三乘頓漸等の旨ありて、以て教門をなす、然れども、無上微妙秘密圓明眞實の正法眼藏を以て、上首迦葉尊者に附す、展轉傳授すること、二十八世菩提達磨に至り、此土に來て、慧可大師を得、承襲以て吾に至る、今法寶及び如來所傳の袈裟を以て、汝に附す、善く自ら護持して、斷絕せしむるなかれ、師跪いて、衣法を受け、啓して曰く、法は則ち既に受け畢ぬ、衣は向後何人にか附し可申候や、祖答へて、昔し達磨初めて至り、人の未だ信せざるが故に、衣を傳へて法を得るとを明かす、今信心已に熟す、衣は還て争ひの端なり、汝が身に止めて復た傳へされと、ありければ、師乃ち足を禮し、衣を捧げて出賜ふ、黃梅のふもとに渡頭あり、祖自ら送りて此に至る、師揖して曰ふ、和尚すみやかに還るべし、學人已に道を得、當さに自ら渡るべしと、祖曰く、汝已に得道すといへども、我れ尚渡すべしと、云いて、手づから竿をと

り、彼岸に渡し了り、祖獨り寺に歸り給ひ、一衆みな知るとなし、以下本來の面目風幡心動等の話、後信に殘し候、頓首、

猶々、婆子燒庵の話とて、名高き難透の一則、有之候、御研究中の「バイナル」何れの問答に當はめ候ても、適合の好話と存候間、左に申上候、

昔シ一婆子アリ、一庵主ヲ供養シテ、二十年ヲ經常ニ一リノ二八ノ女子ヲシテ、飯ヲ送リ給侍セシム、一日女子ヲシテ、抱定シテ、正恁麼ノ時、如何ト云ハシム、庵主云ク、「枯木倚寒岩、三冬無暖氣、」女子歸テ、婆ニ舉似ス、婆云ク、我レ二十年、只箇ノ俗漢ヲ供養シ得タリト、云フテ、遂ニ逐出シテ、庵ヲ燒却ス、

右庵主、如何にせば、婆の意に適ひ候や、隨分困難の地位に立居候、東嶺和尚は、之に著語して曰く、某し庵主に代て、一轉語あり、正與麼の時、女

子を擯住して道はん。我受汝供養二十年」と禪宗にては常に如此公案多く候。是は少々別解脱なれども、風外和尚の三轉語と云ふは左のごとし。

- 一 佛魔同相ニシテ現スル時如何カ正邪ヲ辨セシ、
 - 二 四山一時ニ追ル時如何カ透脱セシ、
 - 三 睡眠ノ時如何カ放逸ナラザルヲ得シ、
- 是等は公案の初入に候。唯第三問稍見難し。雲門の「庵内人何不知庵外事」と云ふがごとき。一度十字架に死せざれば能はず候。

* * * * *

煩惱即菩提

致啓上候、不相變「バイナル」御研究の由、來意のごとく、今日は耶蘇教と

ても、不可不知候。且西洋の事情、否、世界の大事を、洞察するには、是等好箇の材料に候。乍併可成、眼光を高く御若可被成。西洋人の糟粕をなめて、他後に、瞠若たるは、日本男兒の耻に候。扱御説の通り、耶蘇教徒、即ち弟の平生、保羅教徒と罵るものゝ中には、煩惱即菩提の妙理を、不會却て佛教を、邪道のやうに申候。舊約にて、嫉妬の神と申せしは、新約にて、愛の神に候はすや。「モウセ」蛇を野に擧げしごとき、我が身もあげらるべしと、基督の申されしは、基督も自ら蛇なることを、證明せしに、あらずや。抑も「アラビヤ」の野において、「イスラエル」人を噛みし火蛇、「モウセ」之を銅にて撰造し、竿頭に掲げて、其の嚙まれたる人々に、見せしめしかば、疼傷忽にして癒ゆけり。此因縁、子細に御玩味可被成候。其頃は、殆ど銅器時代とも、可申世にして、件の毒ある銅は、日用最も必須のものに有之候。即ち神の祭壇にも、銅器、甲冑、劔戟、銅釜に至るまで、皆銅を以て、製造致候。又「イスラエ

ル人の埃及を出て、飢ける時天上より「マナ」を與へられ候、去れど終に其無味枯淡に饜果て、肉をほしくと叫候折から、何處よりすともなく、風に吹かれて、鶉の群れよするを見之を捕へて食候寓意、彼の保羅徒教には、謂ゆる煩惱即菩提と悟らざるにや、千篇一律更に變化のなき「モウセ」の儀文に屈託し、其苦痛は火蛇に噛まれしと同様、人生の尤も堪へかたき者は、心中の不平に候、此不平を慰するものは唯自由、自由は即ち煩惱を其儘に利用するに候、基督世に出られしも、這箇の道理を、世に示さん爲めの慈悲に外ならず候、食なく水なき沙漠に「イスラエル」人を誘致したる「モウセ」の右手は、生命を與へたる彼れの左手にあらすや、火を以て人を熾はるばせし「エホバ」の瞋恚は、鹽と水とを流せし基督の胸臆にあらずや、是れ即ち煩惱即菩提に候、保羅の徒之を知らずして、蓋に口を開き候事、返すくも片腹痛く候、彼等は十字架にかゝり

し。基督を望見て、罪業贖はれたりと、安心致候、是れ即ち保羅の教義に候、煩惱即菩提の道理を、會得したる我等の爲めには、堪笑亦堪悲の儀に候、御返事まであらく、頓首、

白隠和尚曰く、阿蘭陀人には、なせ鬚がない」

或曰く、齊一變せば、魯に至らん、魯一變せば、道に至らん、道一變せば、何れの處にか至らむ」

文殊所説摩訶般若に曰く、清淨の行者、涅槃に入らず、破戒の比丘、地獄に墮せず」

石霜和尚云く、百尺の竿頭、如何か歩を進めん」

古人曰く、張公酒を喫すれば、李公醉ふ」

鳥尾得庵居士

此節は公案に心とられ、兩三日御無音罷過候、一昨日洪岳和尚も山梨縣より歸錫被致候、伴僧に就き、彼地にての模様を承候に、中くの禮遇にて到處盛會に候ひし由、扱先日申上候通、此一行は鳥尾中將と、本師洪岳師と、兩人して、山梨縣篤信家の請に應せられ候者にて、御兩人共演説の外なかりし趣、得庵居士の演題は、いつも忠孝説にして、折々國土の恩衆生の恩なども出候由、心地觀經は、居士の最も御得意にて、先に居士自ら訓點を施されしもの、世に出居候、大辨は訥のごとしとやら、其言語には、殆ど感心する程の點なきも、流石に、正三位勳一等居士なれば、聽者皆敬賛せし由、ありがたさに、涙こぼるゝの謂なるべく候、毎に洪岳和尚も、前席を勤められ、途中も後押なりしとの事、先以て、居士も満足に被思召候半、抑も得庵居士は、最初故伊達自得翁より、誘掖せられ、荻野獨園師の、

碎啄に遇ひ、由理滴水、今北洪川等、諸老漢の開眼を経て、今日の境界に達せられしものに候、居士は元來、我慢強き性なれば、入室參禪は、とんと經驗なき由、最後の一句甚無覺束候、居士は常に演壇に立て、能く一指頭を拈じ、或は両手を撒しなどして、濟まされし事などありし由なるが、今日は親孝行の御談議など、兎に角、居士の臭味ぬけたる徴に候、乍併餘り親孝行も、極端に走せ候ては、支那の様に相成候、支那にては、親の權利として、子を勝手に賣買質入等致候、又一家の主婦たるものは、必らず一の筭杖を坐傍の柱に掛居候、是れは自分の子供意に忤ひしとき、鞭打するの用に供へ候、其時子供は、争ひ或は逃避など致候、は、忽ち不孝の罪其上に加はり候間、唯ヒ一叫で、跪ひて母の怒の和らぐまで、忍び候、東洋人は、唯、大平無事を冀ひ、先祖よりの賜物失はぬやうに、のみ心懸、財産にても、進で得んと欲するより、退て守るの道を教候、西洋人は、然らず、退て

守らんよりむしろ進て取れと習はせ候。東洋人は曰く守るは進む所以なり、西洋人は曰く進むは守る所以なりと、抑も是れは彼我の宗教實に此動機をなし候此點に於ては、基督の謂ゆる我が來るは爾等に大平を與へんが爲にあらすの語却て難有聞候。試みに西洋人と東洋人と孰れか善く孝なるや、比較被成候は、實に雲泥の相違あるとかねて御互申事に候。國家に對し、社會に對し、皆此通りに候。心地觀經に就ても、古來いろくの説あり候。或は支那の習俗に和同せんが爲の偽經にはあらざるかと、弟も尙疑居候。儒は畢竟孝を推して、天下を治めんと欲し、禪は這箇の一事を主とするものに候。明日隱山、卓洲の兩派に就て、聊申上度候以上。

* * * * *

隱山と卓洲

宗演和尚被歸候付、昨日大休老師も、永田へ回錫相成候。老師は武州八王子在、山田の廣園寺寺中、西笑院の住職にして、久しく故洪川和尚に、隨身せられ、和尚在世中、既に罷參を被許候人にて、當年四十歳、素實重厚、俗脱正廉の風あり。本師宗演和尚とは、同參の人に候得共、洪川和尚、他界の後、本師の證明を受られ候爲、今は師弟の間柄に候。當時横濱在、永田村寶林寺に住し、衆を接せられ、且寶林寺は、當山末寺中にて、最も因縁厚く、殆ど當山の出張所の様相成居候間、本師の留守居は、いつも大休老師被勤候。師は頗教育家にして、子弟よく育ち候。扱寶林寺と申候は、元、峨山和尚、開拓の道場に候初め、白隱禪師の高足に、峨山と申和尚あり、本郷湯島の隣群院に出世して、大衆を接せられ候處、江戸は到底法縁の地にあらすとて、右永田村に道場を卜し、寺號を東輝庵と稱し、之に住持せられ候間に、

隠山卓洲の二尊足出来候、只今全国に許多の智識も有之候得共、皆此隠山卓洲の二派に候。京都の妙心、相國、紫野の大徳、嵯峨の天龍、及び美濃の多分は隠山派にして、八幡の圓福、名古屋の徳源、久留米の梅林、京都の建仁等は、卓洲派に候。両派共別に異なりたる點も無之。唯隠山派は綿密を主とし、卓洲派は機鋒を專とす。八王子の大徹和尚、松島の南天坊等は、卓洲派に候間、機鋒最も鋭き方に候。白山の南隱和尚も、卓洲派なれども、頗る老巧、且雲門に私淑せられ居候由にて、自ら其風相見候。當山は隠山派故、頗る綿密亦一種の家風に候。大休和尚の室内は、殊に故洪川老漢に類し候。由申事に候。鎌倉雜作なく、透し候など申候得共、實際はなかく、左様にて無御座候。夫にはいろく手段もあり、學人の根柢にも與り候事故、一樣ならざるも、未徹根にてゆるすなどの事は、夢にも不見受折々根柢のなき書生共、飽喰はせられて喜居候も少からず。是は師家の方便に

候。室内は可成、不人情の方、學人の爲に候。是れ諸祖の大戒にして、室内にて聊にても老婆心などある人は、畢竟子供の頸に石括りつけて、海底に沈むるがごとし、浮むの期なかるべく候。又學人にして、室内の事を他に漏泄するものは、其咎にて白癩に變すると申候位にて、是は尤もよろしからず。仁者のなさいる事に候。西山禾山師は、隠山派にて、臨濟將軍と云中に、自然雲門天子の威具り、是亦一種の室内に候。天龍の峨山師に至りては、寛嚴程よき處に可有之候。師家の人望、多くは室内に關係致候。不相變身體よろしからず、困入候。乍去弟の如き、業障ふかくして、身心不具、何一として、世間に合格したる處なき者は、愈益、宗教の恩徳相覺候。

荷葉團團似鏡

菱角尖尖似錐

是も公案に候。鏡よりも團しとは、如何に團く候や。錐よりも尖しとは、如

何に尖く候や箇の鏡よりまるきもの鏡よりもするどきものを得候是れ宗教の安心に候、弟も今日は漚返不少、自然白癩共にならぬ様、公開御無用に候、頓首、

追伸、右寶林寺は、即ち東輝庵の跡に候、又只今全国にて、大概八合通りは、隠山派にして、卓洲派は、至て尠く候以上、

雲門乾屎橛

御手紙拜見致候、御多忙之中に、斯道御研究、感心の外なし、元是日用行中を、離れざるものに候、間名利の街なりとて、決して厭ふべきものにもあらず、唯其身の心懸一つにて、這箇の一事を、歸らめたる人、古來俗間に不勤候、扱御申越の乾屎橛の話、中く、難透にて、われく、其の爲には、殆ん

と鐵酸館の如きものに候、乍去一旦、咬破の曉には、百味具足疑なしと存候、間、飢腸を鼓して、折角朝辛、甚苦、罷在候、乾屎橛とは、糞篋の事に、御座候、僧雲門に問ふ、如何なるか、是れ佛、雲門答へて曰く、乾屎橛、他宗のか同行なぞに向て、斯様な答話を與へ候は、それを禪天魔の詭、免れ間敷候、我が宗にても、或者は意解して曰ふ、佛と云ふも、糞篋と云ふも、同じく法體なり、故に乾屎橛を以て答ふと、又一般の人ありて、佛を呵し、祖を罵る、是れ法の臭味を、抜く由縁なりなぞ、種々に情量を恣にするもの、御座候、得共、千里萬里の相違、矢新羅を過ぐとは、此事に候、無門禪師の評、最もかもしろし、

雲門可謂家貧難辦、業餐事忙不及、草書動便將屎橛來、擗門拄戶、佛法興衰可見、

空腹の場合には、まづいものなし、使を立たせ置いては、悠々と草稿など

する暇なしとなり、不意に戸障子の倒れかゝりたる柏子、有合せの糞篋を以て、挂へたる所に、眼御著可被成候、佛法の興衰見つべしと云ふも、無門の弄筆と見るべからず、此中に大事有之候、

六助「そなたは、吉岡一味齋殿」

ソノ「ハイ娘の園でござんする」

淨瑠璃本の中にも、随分かもしろき、文句御座候、御玩味可被成候、無門更に雲門の意を頌して曰く、

閃電光、擊石火、得眼已蹉過

答處は、寧ろ問處の親きに如かず、如何なるか、是れ佛と問候處に、乾屎橛とは、實に谷神の應するが如き、思有之候、此處御會得被成候、ば、孔子の所謂、君子は言を失はず、亦人を失はずの意、自在に御受用出來可申候、小弟とても公案の方は、兎角抄取不申、畢竟力用の足らざる故と、恥入候耶

蘇教と禪宗の關係に付ては、後便可申上候、頓首、

都府樓、纒見瓦色、觀音寺只聽鏡聲

全景を見るに勝り候、或人の句に「七景は霧にかくれて三井の鐘」是亦、鐘聲善く、七景を挂へ候、

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

本來面目

前路當山にて、新參の人には、「本○來○の○面○目」を見せ候、是にて法身邊の事を、瞥見せしめをき、追々、俊手音聲にていじめ候、六祖慧能、黃梅を去て、後五祖大滿禪師、上堂せず、衆來て咨問するものあれば、我道ゆきぬと答ふ、或もの問ふ師の衣法、何人か得、師曰く、能者得たりと、是に於て、衆議すらく、

虚行者名は能尋訪するに既に失せり衆懸かに彼れが得るを知て即ち共に走り逐ふ時に四品將軍發心して惠明といふありき衆人の先となつて越て大度嶺にて追付たり慧能曰く此衣信を表す力を以て争ふべけんやと其夜鉢を盤石の上に置いて草間に隠る惠明至て之を揚んとするに力を盡せども揚らず時に惠明大に慄きおそれて曰く

我レ法ノ爲ニ來ル衣ノ爲ニ來ラズ慧能遂ニ出テ盤石ノ上ニ座ス惠明作禮シテ曰ク望ムヲクハ行者我カ爲ニ法要ヲ示セト能曰ク不思善不思惡正與麼ノ時那箇カ是レ明上座本來ノ面目ト明言下ニ大悟ス復問テ曰ク上來密語密意ノ外還テ更ニ密意アリヤ否ヤ能曰ク汝カ爲メニ語ルモノハ即チ密ニアラズ汝若シ返照セバ密ハ汝カ邊ニアリト明曰ク惠明黄梅ニ在リト雖也實ニ未タ自己ノ面目ヲ省セズ今指示ヲ蒙リ人ノ水ヲ飲テ冷暖自知スルガ如シト

右の因縁に候、本來の面目と申しても、之にて徹根せしむるにあらず、更に隻手の授所にて煖煉す、又隻手も數段の本則を見せ、後に隻手の授所に立返りて、法身邊の事を徹底せしむ、隻手の授所も、大凡十二三通り御座候、如斯處即ち隱山派の特色にして、卓洲派に至りては、件の方便を不用、直に初一則にて徹根せしめ候、實に容易ならず候、千七百則の内、上根の人は、僅にて罷參を許さるゝものあり、三百四百も數へ上りて、尙成就せざるものあり、根機によりて、いろく候、當山にて、見性の最も速かなりしは、三十日にて、隻手を見、最も遅かりしは、三年目にやうく見候、由、今日の臨濟宗は、むしろ白隱宗と申ものにて、千七百則の内には、五家七宗の家風悉く相備はり居候間、矢張公案は、澤山見たる方、よろしく候、加之一則く、皆別解脱にして、垂示の如き、容易に見分けかね候、尤も唯一則にて、照見出來候得ば、無此上事に候、扱禪宗も、餘程年數を積まざ

れば其功なし、大道に志す人は、一日も早く入門せられんと、希望に不堪候、草々、

大智禪師は、洞派にて最も、偏頗に巧なりし人なり、左に佛誕生の頌一首相記候、

閻浮八萬四千城、不動于戈致太平。
活捉罽曇白拈賊、雲門一棒不虛行。

徳山は言得るも三十棒、言得ざるも三十棒と申され、雲門は我れ一棒を行せずと申候、



禪宗と耶蘇教

毎度御懇書致拜見候、○○兄、彌會堂參詣者とまで、成果られ候段、幾重にもおしき事に存候、先入師となるには、能く申事にて、同兄にも、先に故新島先生の門にあられ候由、今更致方も無之、我輩佛教家の目にて見候は、従來西歐諸國にて、二千年間も、耶蘇教くと唱來りしものは、決して耶蘇教にあらず、謂ゆる保羅教と申ものに、御座候、是れかねて、弟の持論に候、抑も保羅と申人は、猶太教の信者にして、希臘哲學も、聊かは學びたるやうにも、被見受候、去りて、西洋人の如申、決して保羅哲學など、別段擧揚する程のものには、無御座、唯其手翰中に、現はれたる一種の宗教觀に候、此思想、耶蘇の名を藉りて、先づ第一著に羅馬希臘に散在せる、猶太人を信從せしめ、次に西部の蕃族に向て、廣く宣傳し、今は其法孫二千年の間、種々思想の沿革に遭遇し來て、「ユニテリアン」など云ふ境界までも、進化致候得共、矢張保羅教の舊案を脱する不能、依然として基督の

所在を見付不得候、元來保羅は、耶蘇に親炙したる人にもあらず、唯「ペテロ」と數日間同居せしといへ、傲慢自得の保羅、いかでか「ペテロ」の教化を容るべき、却て「ペテロ」を罵りし跡、其書中に見ゆ居候、我が禪宗より眺めたる所、毫も基督教に間然すべき點なし、固より萬有神教にして、臨濟、徳山の棒喝、皆有之神を殺し、祖を罵り、殿堂を毀ち、神民を散する等、皆耶蘇の教義にして、實に神意不思議の妙理、這裏に存候「バイブル」を解するものは、即ち禪宗を解せん、釋迦に相見したるものは、必らず基督をも信する人に候、其聖日を讀すなかれと云ふも、基督の教にては、日々是れ好日、更に日を擇ぶなかれの意、之を安息日と云ふも、神子の位に入るものは、造作するなく、隨逐するなく、神と俱に働くものは、所謂神の安息に入るものに候、又偶像を拜するなかれとは、心に神を置くべからず、目に神を見るべからず、假令眞理と認むるものも、十字架に付せよ、金鎖

なりとて、土牛に對して誇るべからずとの謂に候、創世記の始より、約翰傳の終に至るまで、唯此偶像を拜するなかれ、安息日を聖にせよの二戒に、不過候、我禪宗も、丁度其通りにて、十重禁戒も、皆此一着子より、湧出申候、故に幾千の戒法、之を一括すれば、愛となり、神となり、道となり、皆異名、同根に候、萬法之より相分れ候、

僧問、大隋劫火洞然、大千俱壞、末審、這箇壞、不壞、隋曰、壞

劫火洞然として、此大千世界一時に焚壞し去る、只茲にいふかしく思ふは、這箇の一靈、何處に去るべきや、世界と俱に壞し去るものか、將た如何と、或僧大隋和尚に問ひし時、大隋答へて、それは共に壞し去ると申され候、若し大隋和尚の答處に向て、深く造詣する處あらば、亦基督教をも疑はざるべし、「バイブル」は徹頭徹尾、此の劫火に焚かれ、十字架に死して、落處如何と探索するの一事に、御座候、畢竟保羅教は、舊約にもあらず、新

約にもあらず、基督教にて謂ゆる偶像教に候、法然宗親鸞宗にも遠く不及、我日本に来て、之を傳へんとするものは、恰も河頭に水を賣るがごとし、河頭水を賣る唯勞して功なきのみ、若し更に飲落の漆器を、仰山らしく撥出して、朱門に向て、之を擲がんとせば、管に其買手なきのみならず、恐らくは叱責を免れ得間敷候、今日保羅教の位置は、如此ものに候、〇〇兄學問もある身にして、誰れに魔せられ候やらん、痛はしく存候、乍去何れの時か、尙挽回の機なきにあらず、友愛の誼に於て、不失様、專一に奉存候御返事まで、草々頓首、

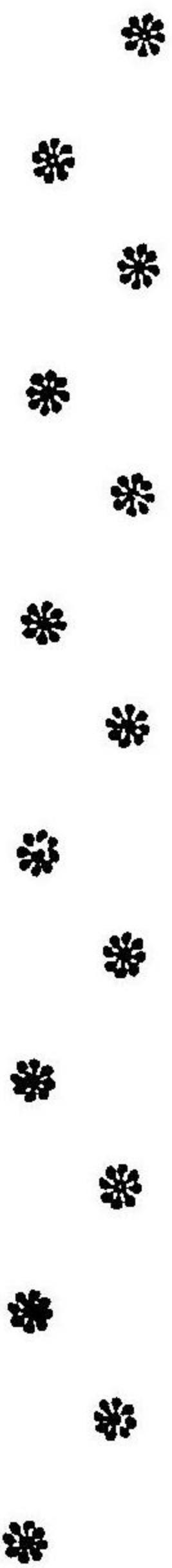
平常心是道

趙州和尚南泉ニ問テ曰ク、如何ナルカ、是レ道、泉曰ク、平常心是レ道、州曰ク、還テ趣向スヘキヤ否ヤ、泉曰ク、向ハント擬スレバ即チ乖ク、州曰ク、

ク、擬セズンバ、爭テカ是レ道ナルコトヲ知ラシ、泉曰ク、道ハ知ニモ屬セズ、不知ニモ屬セズ、知ハ是レ妄覺、不知ハ是レ無記、若シ眞ニ不疑ノ道ニ達セバ、猶大虛廓然トシテ、洞豁ナルガ如シ、豈強テ是非スベケンヤ、州言下ニ於テ頓悟ス、無門禪師ノ頌ニ曰ク、

春有百花秋有月、夏有涼風冬有雪、
若無閑事掛心頭、便是人間好時節。

無休曰、南泉は大睡語、無門は小睡語、且又無門此頌、恐らくは後生を誤る、南泉に和して、三十棒尙不足候、



藕絲孔中

致啓上候、臨濟慧照禪師の藕絲孔中の辨と云ものを見出候間、寫し差上

候

阿修羅ト天帝釋ト戦フトキ、阿修羅王敗レテ八萬四千ノ眷屬ヲ領シ、
 藕絲孔中ニ入テ藏ル、故ニ天帝釋モ之ヲ攻ムルコト能ハズシテ退ク
 ト、是レ本ト經中ノ説ナリ、予常ニ謂ヘラク、阿修羅ニハ、者般ノ大神通
 アリ、彼レ既ニ戰敗レテ走ル、時、豈特リ藕絲孔中ヲ尋テ藏レンヤ、
 眞眼裏、蚊虻鼻孔、一微塵裡、針鋒頭上、隨處自在ニ身ヲ藏クシテ、
 隣
 虛ノ中ト雖モ、八萬四千ノ部屬ヲ包容シテ、
 陝シトナサズ、而ルニ、特リ
 藕絲孔中ヲ指スハ何ソヤ、

阿修羅とは魔王の事に候、八萬四千の部屬とは、八萬四千の煩惱に候、天
 帝釋とは、即ち心の主宰にして、多聞天王、廣目天王、增長天王、持國天王、是
 れ帝釋の四天王なり、

且夫レ帝釋、戰勝テ、諸天大ニ力ヲ得ルトキハ、多聞、廣目、疾キコト、石火

ノ如ク、增長、持國、速ナルコト、颯風ノ如シ、何ノ暇アリテカ、蓮池ヲ尋テ、
 荷莖ヲ折リ、藕絲ヲ拔却シテ、後身ヲ藏スルコトヲ得シ、
 縱ヒ亦隠レテ、
 十成ナルモ、天眼ノ照ストコロ、盡火千界、掌上ノ瑠璃顆ノ如シ、
 何ソ織
 塵ヲ殘サシ、若シ又、三春ノ始、仲冬ノ後、荷錢モ、亦未ダ浮ハザル時ノ如
 キ、身ヲ藏スルニ所ナシ、彼レ即チ敗走、
 郎落シテ、終ニ天兵ノ斧鉞ニ毀
 ヌルモノナラシヤ、吾レ大ニ之ヲ怪ムコト久シ、
 近ゴロ定中、忽爾トシ
 テ、此事ヲ省覺ス、歡喜ニ堪ヘズ、記シテ以テ、二三子ニ授ク、
 願フニ夫レ
 此義ハ、經中微妙ノ譬喩ニシテ、大ニ辨道ニ益アリ、
 蓋シ試ニ之ヲ論セ
 シ、

是より藕絲を何に譬へたるかを辨候、今日唯智識を貴び、
 文を重んじて、
 實を輕んずる世の中には、
 適切な譬喩、特に辨聰一天張りの哲學者先生
 には、頂門の針砭なるべく、奉存候、

茲ニ辨道ノ上士アリ、單單ニ端身靜坐スルトキ、身心寂滅、萬法虛凝、湛然廓落トシテ、自ラ一片ノ長空ノ如シ、忽然トシテ、纔カニ情念紛起スルトキハ、雲霧ノ大虛ヲ包ムガ如シ、波浪ノ巨岳ヲ呑ムニ似テ、谷吼ヘ山怒リ、臭煙氷雹ヲ吐キ、毒霧電雷ヲ籠ム、是則チ阿修羅大ニ戰勝テ、乍チ大身ヲ現ズ、八萬四千ノ部衆、各々等身蒼海ヲ淺シトシ、碧虛ヲ陟シトシ、寶殿ヲ動シテ、叫喚怒號シ、日月ヲ蔽ンデ、顛狂憤悶ス、靈臺之レカ爲ニ震ヒ、動キ、丹府之レカ爲ニ碎ケ裂ク、此時ニ當テ行者忽チ省覺シテ、本參ノ話頭ヲ舉起シ、或ハ自己ノ本有ニ向フトキハ、則チ沸沸タル湯釜ノ内、一杓ノ冷水ヲ洒クガ如ク、性海湛寂、心源虛靈、是則チ帝釋大ニ戰勝ツノ時ナリ、四王各其處ヲ得テ、諸天互ニ歡樂ス、帝綱重重、光光映徹シテ、主伴盡クルコトナシ、

帝釋天の宮殿、珠網を張る、幾億となき珠、一々に他の無數の珠を象映す、是吾人の心性に候、故に性海湛然、心源虛靈なるときは、帝綱の重々光々、互に映徹して、主伴盡くるとなきが如くなるも、是れ唯一時の事にして、決して眞の見性にあらず、思惑と云ふもの、猶殘居候、間後の有様却て甚しかるべく候、「バイナル」の中に、一の惡魔を逐出しければ、彼れ他を遊行して、留る場所なく、復た舊の家に還りしに、甚た清潔に掃除しあるを見、更に己れに勝りたる七の惡魔を他より伴ひ來りて、再び之に住せりと、あるも、同様の儀に候、

正與麼ノ時、彼ノ八萬四千ノ魔軍、一箇モ痕跡ヲ留メズ、上下四維ノ間、千回百匝、神變ヲ盡シテ、搜索スレモ得ズ、神識を以て神識の中に隠れたるものを索む、猶目を以て目を見んとするがごとし、下文を御覽可被成候、

此ニ於テ行者大ニ歡踊シテ云ク、天下已ニ定マルト、特ニ知ラズ、彼ノ

魔○種○歡○喜○ノ○細○念○ニ○入○テ○潛○伏○シ○テ○全○ク○一○毛○ヲ○モ○損○セ○ズ○細○念○ト○ハ○何○ゾ○
 ヤ○謂○ユ○ル○神○識○微○細○ノ○流○注○難○斷○ノ○思○或○ナ○リ○然○ラ○バ○則○チ○彼○ノ○部○衆○思○或○
 難○斷○藕○絲○ノ○如○キ○モ○ノ○裏○ニ○藏○ル○者○ニ○ア○ラ○ズ○ヤ○既○ニ○思○或○微○細○ノ○藕○
 絲○ニ○藏○ル○宜○ナル○カ○ナ○攻○ム○ル○コト○能○ハ○ズ○シ○テ○退○ク○コト○、
 明眼の師家に依らずして、自分勝手に安心したる禪は、十人は十人ながら、如此者に候、所謂歡喜の細念を藕絲に譬へたる處おもしろし、以下之を救ふの術にして、禪宗の本領、此處に候、

之ヲ爲シコト如何祖師ニ善巧ノ一著アリ生死ノ根源ヲ截ルコト天
 ニ依ル長劍ノ如ク妄情ノ窠窟ヲ摧クコト萬斤ノ鈍子ニ過キタリ僧
 問、趙州、狗子還有佛性又否、州曰、無、此話極メテ靈驗アリ學者若シ眞
 正安樂ノ田地ニ到ラント欲セバ謹テ此話ヲ爛斲セヨ豈ニ敵ミ横ニ
 敵瞬シテ一朝乍チ命根ヲ敵斷シテ絶後再ヒ蘇ラバ從上多少ノ說話

唯○是○レ○滿○面○ノ○慚○惶○ナ○ラ○ク○ノ○ミ○勉○メ○ヨ○ヤ○諸○子○老○來○ナ○待○テ○淚○痕○數○行○頷
 ニ滴ルコトナカレ、

狗子佛性の話、他日可申上候、是非共禪宗は、例の公案に依て、鍛はれされば、徹根難出來候、右藕絲の譬喩、よくく御味ひ可然候、白隠和尚の寒山詩集に、右の文引候、御覽被成候は、尙委しく分り候、頓首、

* * * * *

川尻寶岑居士

來意致拜見候、折角老莊やら、陽明やら、御研究に候は、何とて禪學不被遊候や、禪は元印度より、其體出候得共、其用は支那にて、發達致候者に候、拈華微笑、刹竿著等、七佛以來の血脈には、相違これなくも、若し支那との交通開けずば、矢張紫衍錯綜の葛藤裏に葬られ去り可申、幸に般若多羅

尊者の如きありて、什分支那の思想を究め、其簡易を貴ぶ處實に斯道化縁の地たるを卜し、達磨を遣はして、一旦大教を扶殖せしめし以來、一花五葉、忽ちにして繁茂致候、千有餘年間も、印度に埋もれ居候者、支那に來て却て郷土の思ありとは、抑も一問題に候、此時に當て、獨り釋尊の意を、詳にするのみならず、孔子、老子の心髓をも、始めて洞見せられ、茲に唐宋の隆盛を來し候、兎に角、事物は化學作用に洩るゝものなく、親和力によりて、如何なるもの、出來候も難計候、蓋し、達磨の遺書中、禪經、少室錄等は、後昆の追綴に係ると、勿論に候べくも、達磨大師の支那文學に精通せられ、殊に道家の術に於て、得られし點不少候、儼は明白に候、之を要するに、唐宋以後の思想は、全く支那印度の調和に候、扱吉本君の陽明學、河合氏の大道叢誌中に、掲載せらるゝ、川尻賢岑翁の莊子俗話は、翁の先師、故洪川老師の傳にして、翁は鎌倉參禪中、餘程勉強せられ、一々師の口述を筆

記せられし由に、御座候、川尻翁は、元來博學且得道の人故、一層の潤飾も可有之候、老莊學者、世間に澤山相見候、得共皆古文字の攻證のみにして、更に見識なし、又、川尻翁は、陽明學に於ても、土佐派の正宗を受け、石門の道話に至りては、此節第一流に候、他なし、翁は武州芝村長徳寺の願翁和尚に就き、皮肉を得、後、洪川老師に參叩して、骨髓を得、師の証明を受けて、下谷二長町に、開堂被致、隨喜の徒不鮮候、皆之を禪に得て、博く應用せられ候、活句に參して、死句に參すべからずと申事、御座候、折角御骨折に候は、陽明の謂ゆる、羲皇以前に溯て、御究可被遊候、故、洪川老師、真正の居士と申すは、右川尻翁一人に候、同夫人も、鎌倉にて、翁と俱に參禪し、罷參を許され、婦人にして、居士號を得られ居候、由、好一對、天下の俊秀に候、御面會被成候は、多少可有益候、頓首復、

空手把鋤頭ニシテアリ 步行騎水牛ニシテアレ
人從橋上過レバ 橋流水不流ハ

(傳大士)

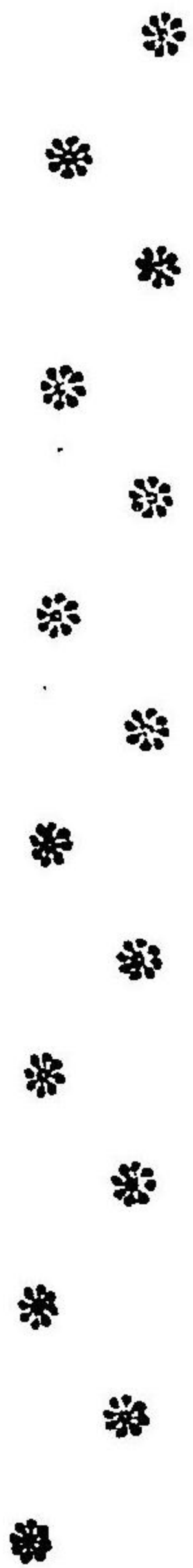
懷州牛喫禾スレハチ

益州馬腹脹ム

天下覓醫人ニ

灸豬左脾上ニ

(杜順和尚)



大慧武庫

拜見候御揃益御壯健珍重存候昨日までに接心相終候爽曉より晚十時
までの座禪にて朝參晝參暮參晚參と有之候又一週間の接心中二回の
總參有之皆残らず入室致候晚睡き頃には大概接待の茶菓出候施主の

名堂外に帖出し居候鳥尾川尻其外在東京の居士禪子より贈られ候事
も御座候提唱は大慧武庫に候是れは平日も一六三八の日には必らず
有之接心中は毎日に候大慧武庫は即ち圓悟の弟子大慧禪師の隨筆に
候宗演和尚の明識と達辨とを以てする事ゆゑ何とも言ふに言はれず
唯愉快に拜聴候其一二節最も短き處を左に

錢弋郎中眞淨ヲ訪テ說話スル久シ溷ニ登ラント欲ス淨行者ナシ
テ引テ西邊ヨリ去ラシム錢遽カニ云フ既ニ是レ東司什麼トシテカ
却テ西ニ向テ去ル淨云ク多少ノ人東邊ニ向テ討ヌ師云ク嗚使少是
レ趙州投子ニ問フ夜行ヲ許サズ明ニ投シテ須ク到ルベシト亦此語
ノ好キニ如カズト

錢弋郎中は官名に候東司は屏側とて溷と同じく便所の事に候師云の
師は大慧に候嗚使は笑貌昔し趙州投子に問て云く大死底の人却て活す

る時如何、投子答へて云く、「不許夜行投明須到」と有之候、多少人向東邊討ス此語の却て好きに如かずとなり、是等は皆、おもしろき公案に候、

南康ノ諸山相會ス、佛印後レ至ル、眞淨問フテ曰ク、雲居來ルコト何ゾ遅キ、印曰ク、草鞋ヲ著ケテ、歸宗ノ肚裏ヨリ過ルカ爲ニ遅キ所以ナリ、淨云ク、却テ歸宗ニ吞了セラル、印云ク、争奈セン吐不出ナルコト、淨云ク、吐不出ナラハ、屙出セン、

南康府の諸寺、集會の席なり、雲居とは、佛印禪師の居所、緇流凡て居所を稱候、歸宗は眞淨の居所、實に達人同士の出會は、奇麗に候、皆現成公案、如此ものに候、

いろく、申上度見聞も、御座候得共、「ハイナル」會參禪仲間、及び諸君と、三方に候間、不遂本意、御不沙汰勝に候、弟も此節は、幸に少々づゝ、よろし、御安心可被下候、復、

舒州ニ一居士アリ、常ニ五祖山ニ往テ、僧ニ齋ス、一日首座ニ問テ曰ク、某ハ俗人ナリ、禪ヲ參得センヤ、座云ク、你ハ是レ俗人ナリ、如何ゾ禪ヲ參得セン、居士會セズシテ、演和尚ニ舉似ス、演云ク、首座却テ本分ノ手段有テ、人ノ爲ニス、居士方ニ信シテ、遂ニ志ヲ篤シテ參究ス、後ニ佛眼ニ見ニ、眼、手ヲ展テ云ク、什麼ニ因テ、喚テ、手ト作ス、居士忽チ、大徹ス、是も武庫中の一節に候、黃梅六祖に答へて、嶺南の人無佛性も、首座の如何ぞ禪を參得せんの話も、同じく候、乍序申上候、追加、

* * * * *

菩薩行

御懇書致拜見候、〇〇兄不相變會堂參詣に候や、弟も廿歳前後、身の廻合

せにて、一時教會に出入候事も、有之候所、其以前禪僧、儒者等より、聊薰陶受居候爲にや、遂に耶蘇教、即弟の非議する保羅教には、身を委ねがたく、今日の主義に相成たる次第に御座候「アマヲハム」其妾及び妾腹の子「イスマエル」を亞刺比亞に逐ひ、其地の先祖たらしめ候折別に臨み、我が正子の裔也、汝の裔とは、親交なりがたしと、告語せしは、今日にも正さしく、應驗御座候、幾度か他國より侵入して、藩國に入れんとし、或は通商定約を結ばんとしたれども、成らず、他を仇敵視して、今日尙依然孤立の姿なるは、恰も保羅教徒の排外的にして、他は偶像教なり、悪魔の子なり、人類として親交すべからずとするが如き有様に候、實に彼れ保羅は、神の庶子にして、正子と和協すべからず候、然れども、我が佛教家の、毫も節操なく、菩薩行なりと稱して、更に諱なきも、亦保羅教と、好一幅對の破倫と謂ふべし、抑も菩薩行とは、一分の無明を存じて、衆生と和し、狸奴白牯對機

に應じて、夫々濟度をなすの、悲願なるべく候得共、實際は左にわらず、佛教家の和光同塵は、決して和して流せざるものにわらず、寧ろ流濁和せざるものに候、本朝に、佛教渡來して、間もなく、本地垂迹を以て、諸神諸貴人を會入し、爲夫僧玄昉のごときは、甚しき非倫をも行ひ、道鏡なども、矢張自分は、大日とか勢至とか名乗て、觀世音を惑亂せしに相違なし、佛教の教義において、理なきには、わらざるも、其本領と、分限とは、何卒、保羅あり度ものに御座候、基督申され候、鹽能く物を淨む、去れど、其鹹味を失ふときは、棄て糞料にもなりがたしと、誠にその如く、何事も其本立たずして、末に走るは、よろしからず候、乍併弟は、佛教家の、巧みなるには、亦成心の外なく候、清淨法行經と申經文御座候、其中に、月光菩薩彼れには、顔回と云ひ、光淨菩薩彼れには、仲尼と云ひ、迦葉彼れには、老子と云ふと、御座候、それも、如是我聞付にして、種々様々の、深き因縁釋尊の口より出候、是

等皆偽經なると申すまでもなく、其外諸明王部諸天部の、お経澤山御座候、茲に最もれかしきは、父○母○恩○重○經○父○母○恩○難○報○經○等○の○作○に○候○夫○れ○印○度○にては解脱を以て、道基と立候故、孝を説くと少し、支那にては、孝は徳の本なりと教へ候故、郷に入りては、郷に隨へる方便なるべく候、我國風に件はざる爲にも、夫々用意周密なりしものにて、傳教、空海の如き、其最なるものに候、佛者の事業、思の外早く成就せしは、畢竟此善巧方便にあり候、方便と眞實とは、固より離るべからず、或一點に人を導かんとするには、他皆方便なり、其一點も、亦他の一點に對しては、方便たらざるを得ず、宗教は元と此方便ある故、眞實顯はれやすく、眞實亦遂に、方便に歸せざるを得候、件の道理、保羅教徒には、解し不得候故、大切なる「バイブル」の譬喩、奇蹟等も分らず、佛教の謂ゆる菩薩行なるもの更になし、保羅教は及ばず、佛教徒は過ぎたりとでも可申歟、儘ならぬは、世の中に候、聊御

送付の雜誌を見て、感ありしまゝ、如此候、○○君、繼令我黨の人にあらざるも、故舊渝はらざる様、致度候、拜復、

* * * * *

文章

拜承仕候、寒氣相催候處、益御壯健、御揃珍重奉存候、弟も弱質の爲、思ふやうに、修行出來兼候、乍去、どうせ氣長に覺悟罷在候間、覽れて止むの前途、却而樂しく存候、然ば、經文中名文に付て、御問合御座候付、早速同學中先輩の者にも、意見を叩候得共、多くは維摩法華等を以て、相答候、楞嚴圓覺の二經、曹洞宗にては、偽經不可讀なぞ申すにも係らず、臨濟宗にては、至極愛讀致候、經文の外、祖錄類は、凡て奇警語中、莊嚴跌宕の美、不尠候間、我が優姿一遍の體を補候には、至極よろしく候、扱南屏燕語と申書御座候

所是は南山谷梁と云人の隨筆にて居士など必携の書に候佛道修行の上に取りてはすべて洩さず載せ候其文中に、

佛經ノ文ヲ批判スルヲ恐ルベキヲナレハ楞嚴維摩ノ如キハ王元美モ文ニ鬼神ナルモノナリト稱シタリ是ソノ行文ノ妙變幻竊冥ナルニ駭テタト莊列ト并ベ稱スルノミ維摩ハモトヨリ羅什三藏ノ譯ナレハ間然スベキコナシ元人陸玄暢南山律師ニ告ラク什公ハ位三賢ニ階シ文珠ノ指授ヲ受テ聖教ヲ刪定シ光前絶後ニシテ及ベカラズト殊ニ生肇融叡ノ四公コレカ輔佐トシテ俗儒ノ潤文筆受ナカラズ行文ノ妙固ヨリ然ルベシ楞嚴ノ如キハコレマタ梵師ノ所譯トイヘハ筆受ハ唐ノ房融トテ外ニスグレタル文章モナク高官ナルノミエテ唐書ニ傳モ見ヘズ然ルニソノ文奇逸變化ホトソド端倪ヲ辨ズベカラズ是アニ不可思議ノ神理コレカ能詮トナル故ニアラズヤ

など申候實に此妙逸變化の妙は佛書に限候様存候其言宗の諸師にも、往々詩文に巧なるもの御座候得共四六對の無變化無統一は空海以來の賜ものにして何分今日に適せず唯曹洞宗のみは唐宋以來一種の美學御座候因て弟常に申居候向後曹洞宗は文學の方面より屹度世に顯はるべしと臨濟宗は辨道を重んじ候間筆硯などに意を凝らすの暇無御座候昨日は同參の友人と長谷の大佛觀音に詣りいろく古事舊蹟相探候雲敬弘法の作などに餘程かもしるき物見候後便尙可申上候復

猶々提唱の前にはいつも正覺國師遺戒を誦し候其始に曰く我れに、三等の弟子あり所謂猛烈にして所縁を放下し專一に箇事を究明する之を上等となす若し夫れ心を外書に醉はしめて文筆を事とする之を中等となす自ら己靈の光輝を昧まして唯佛祖の涎唾を嗜む之

を下等となすと之によりて見候得ば、河派には中等の人のみ多く、河派には上等にあらざれば下等の人に候呵々、

* * * * *

禪海一瀾

今日は鎌倉の名物差上候、鎌倉の名物と申せば、大佛餅か、江島細工かど、御推量もあらんが、實は我が甘露味法門禪海の一瀾に候、抑も禪海一瀾と申すは、故洪川和尚、諏防岩國の永興寺に住持たりし時、府主有恪公の爲、撰述せられたるものにして、文久二年、師歳四十七の時に當り候、此書世に公にせられしは、明治八年に候、本書例言中、自ら序して曰く、

蓋シ山僧ノ道法ヲ論量スルニ、先ツ藤東咳ノ所ニ於テ、學皮ヲ得、次ニ

無爲先師ノ所ニ於テ、道骨ヲ得、中ニ四海諸老ノ所ニ於テ、智肉ヲ得、終ニ棲梧老漢ノ所ニ於テ、心髓ヲ得、究竟シテ一法身ヲ成立ス、天ヲ覆ヒ地ヲ載セ、佛ヲ盡シ、儒ヲ盡シ、其義寔ニ深固幽遠ナリ、是ニ於テ始テ此編ヲ撰述ス、然ラバ則、我ヲ知ルモノハ、其レ唯此編ニ在リ、而シテ我ヲ盡スモノニ至テハ未シ、

此書は全編漢文に候得共、便利の爲、故らに和譯して差上候、以下皆同じく候、藤東咳とは、即ち有名なる藤澤東咳先生に候、師歳十四にして其門に遊び、遂に一家をなして、大坂中之洲に塾を開き、教授せり、然れども遂に意に滿たず、二十五歳にして、佛道に志し、始めて大拙演和尚に従て、出家せり、無爲先師とあるは、即是なり、四海の諸老とは、大震贖翁、越溪、綾河、東海、義堂、巨海等の諸老ならむ、師皆歴謁、一々家風を勘見せられ候由、棲梧老漢とは、即義山來和尚にして、本師鬼大拙に次て、恩ある人なり、覆天

載地盡佛盡儒などの語、決して師の慢言と被見間鋪候。禪宗の禪宗たる所以は、即此に存じ候て見るに物なく、嘗むるに土なく、佛の拜すべきなく、魔の降すべきなく、滿街の人皆聖人と云境界に入りて始めて一法身を成立すと申者に御座候。

此書專ラ府君ノ爲ニ撰ス、府君儒ニ入テ釋ニ入ラズ、頗ル文學ニ長セラル云々、

前にも申通、此書は専ら有格公の爲に撰せられたるものにして、上書一篇、緒言七章、或問五章、公案三十則、及附録三章より成る、公案三十則は、即ち本書の要目にして、世に之を鎌倉三十則とも申候、

山僧又微意アリ、蓋シ禪門學者、大抵教外別傳不立文字ノ語ヲ誤認シ、佛義如何、儒義如何ヲ問ハズ云々、

兎角禪宗にて、外學をおろそかに致候事、通患に候、之を暗證禪と申して、假令千七百の公案は、數へ盡し候ても、何の役にも不相立候、學問ある人は、最初入頭の處に、むしろ困難を感候得共、一旦見性の上は、從前の科學、哲學、皆用を爲し候、婦人などの公案を、技術的に透過すると、誠に速にして可驚候得共、更に得力なし、今日の禪僧皆同様に候、

今二教ヲ以テ之ヲ論ズルニ、儒ニ尙古、經濟性命、陸王、攻證等ノ諸學アリ、釋ニ頓漸、秘密、不定、藏通、別圓等ノ諸教アリ、我禪門ノ大道ヲ談ズルガ如キハ、諸學ヲ論セス、諸教ヲ論セス、禪定ヲ論セス、解脱ヲ論セス、唯見性ヲ論ズ、是レ大乘門ノ眞修ナリ云々、

此編は儒佛二教の對照として、不可見候、大乘の眞修、即ち直視人心、見性成佛の法門中には、儒の佛の、耶蘇の、回回のと、可有之者に無御座候、見性の二字は、即ち達摩大師よりの血脈に候、

大道ハ心ニ求メテ、外ニ求ムルコトナカレ、我心跡ノ妙用、直ニ我大道ナ

リ。儒佛ノ差別ヲ狭ムトナカレ。古人唯主人公ト喚フ以テ知ルベキノ
 ミ。故ニ學者此編ヲ讀ムモノ。儒言ニ著スルナカレ。佛言ニ局スルナカ
 レ。唯各自家ノ大道ト成シテ看ルベシ。

瑞巖彦和尚毎日自ら主人公と喚び復自ら應諾す乃ち云ふ。慳々著嗜他
 時異日人の瞞を受くるなかれ。嗜々之に無門慧海禪師は長沙岑禪師の
 句を引て頌して申され候。學道之人不識眞只爲從前認識神。無量劫來
 生死本癡人。喚作本來人。又蜀山人溺死者ありと聞きて。南無阿彌陀
 つと浮いたり沈んだり。此の人やら見ずしらぬ人。此引導には溺死
 者も往生せしならん。此の見ず識らぬ人。即主人公に候。

儒流毎ニ佛者ノ害ヲナス。動モスレバ佛法ヲ滅セシテ論ズ。佛者モ
 亦吾法ヲ尊ビ尋常儒ト殊別セシテ論ズ。是ニ於テ儒佛互ニ憎ミ見
 テ水火ノ容レザルガ如シ。而シテ此編始終同テ以テ對説ス。是レ山僧

ノ説法天下ノ佛者ト別ナル處。

今日にては耶蕪教も理化學も諸文學も憎見すべからず。兎角世の佛教
 家は今日を疾視して一方に割據せんとす。社會の地平線下に葬られ去
 る由縁に候。鎌倉の家風自ら別にして他の固陋者と相容れざる儀。か
 て聞及候處。本師洪岳和尚も深く先師の意を體せられ居候。

儒佛ノ道若シ正見分明ナラバ。豈軒輊ヲ容レンヤ。大抵毀譽シテ憚ラ
 ザルモノ。皆計閔未ダ究メザルガ爲ナリ。輕躁學者見已ニ軒輊アリ。道
 何ソ軒輊ナカランヤ。

此編維新の前後破佛論最も盛なりし頃の作なれば。濟世の論。此に出さ
 るべからず候。晦堂禪師の言に。若し見性せざれば。佛祖の密語も。盡く外
 書となり。若し見性すれば。魔説狐談も。皆密語となる。有之候。鑊湯爐炭
 も。吹て滅せしめ。劍樹刀山。喝して便ち摧くの禪機。今日はなしと見候。

て類に耶蘇教など仇敵視候は、おかしく候。佛眼を以て、幾重にも解釋出來候筈去れば、彼等も一義諦を見出して、佛者に恩を謝すべく候。又其緒言中に、

宋ニ及テ周惇頤ト云者出ルアリ、聖學ノ支離決裂ヲ慨歎シ、諸レテ古ニ復セント欲シ、遺經ヲ搜索シ、研究歳ヲ積メドモ、茫トシテ入ルベキナシ、竟ニ黃龍山ノ慧南ニ參扣シ、教外別傳ノ旨ヲ問フ、南曰ク、孔子曰ク、朝ニ道ヲ聞テ夕ニ死ストモ可ナリト、畢竟何ヲ以テ道トナシ、夕ニ死ストモ可ナルヤ、惇頤答フル能ハズ、尋テ金山佛印ニ參レ問テ曰ク、畢竟何ヲ以テ道トナス、印曰ク、滿目青山看ルニ一任ス、惇頤疑議ス、印阿々大笑ス、頤脱然トシテ省アリ、後ニ東林總ノ處ニ於テ、淵源ニ透徹シ、後來易學心傳ヲ撰述ス、學徒ニ諭シテ曰ク、吾ガ此妙心實ニ南老ニ啓迪セラレ、佛印ニ發明ス、若シ東林總ニ開遮拂拭レ、斷セラル、ナ

得ズンハ、表裏洞然、該貫弘博ナル能ハズ、云々、見ズヤ、惇頤一類ノ異珠ヲ、吾禪海ニ拾得シテ、以テ聖學ヲ發揮シ、千歳既絶ノ緒ヲ紹隆シ、西漢以來諸儒ノ習弊ヲ一掃ス、其功實ニ大ナリ云々、

慧南和尚と云ひ、佛印和尚と云ひ、又東林總にしても、皆かねてより儒書を、洞破分明にせられ居候故、能く惇頤を伏し、且得道せしめ候得共、今日若し耶穌の徒、來りて問ふものあらば、三界の導師達は、如何可被答候や、臨濟徳山の棒喝のみにては、恐らくは益なかるべし、釋尊以來外道降伏の蹤を鑑み候に、いつも敵に糧に藉るの、悟他法を用ゐられ候事、歴々相見候。

朱熹初メ、李侗ヲ師トス、久クシテ發明セザルヲ恨ミ、張拭呂祖謙等ト、道ヲ徑山大惠ニ問フ、後ニ書ヲ開善謙ニ致シテ曰ク、熹向キニ大惠禪師ニ、狗子無佛性ノ話頭ヲ、開示セラル、ナ蒙レドモ、未タ悟入アラズ、

願クハ一言ヲ授ケテ速ハザル所ヲ警メヨト、謙答ヘテ曰ク、這ノ一念
ヲ把テ、狗子ノ話ヲ提撕セヨ、商量スルヲ要セズ、勇猛直前、一刀兩段セ
ヨト、朱熹是ニ於テ省アリ、後來常ニ言フ、佛説ク所ノ六根、六識、四大、十
二因縁、生ノ論皆極メテ精妙、吾孔子ノ及ハザル所ナリト、今區々タル
小儒、怎生ソ他手ヲ出シ得ン、然ラバ則朱熹固ヨリ佛意ノ崇ムベキヲ
知ル而シテ却テ反噬ノ説ヲナシ、以テ我見ヲ張ル、其レ亦不仁ナルヲ
甚シ、古人之ヲ德ノ賊ト謂フ云々、

佛者は智ありて情なし、是れ其反噬を受くる所以に候、天下の事、佛者の
手に委せば、亡國より外無御座候、社會は熱血人種の領土にして、冷血動
物の共存を不容候、雲照律師の如き、獨り天下に高僧の名を擅にする程
の大德にてありながら、幾世期以前、朝家と佛教と、密接の關係ありしを
説て止まず、今を昔に回さんとの精魂は、口に筆に、銷磨しつゝあるも、御

氣の毒の次第にあらずや、我日本の文明は、十に八九皆佛教文明なると
は、誰人も之を認むる處、むしる佛者よりも、外學の人之を攻證して疑は
ざるべし、然れども一般僧侶の癡言は、恰も明治の天下に、我遠祖は斯く
くの人なり、我は鎌足の末葉なり、我は源姓にして、皇室に大造ありし
一族の子孫なりと、自らあせり廻るも、誰れか之を憐むものあらむ、朕が
意のとくならざるものは、雙六の賽、山寺の法師と、至尊の御口より、歎聲
を發せしめたるもの、子孫は、今日手を合せて、翻て皇室に便らんとす、
陋劣の限に候、因果應報は、僧侶の口より説く處ならずや、朝家幾多の難
衝にも、僧侶より一人出で、之に當りしものなく、子をして父を殺さし
め、二代の后を納るゝなどの、破常非倫も、僧侶より之を諫争せしものあ
るを聞かず、之を是れ德の賊と申候、平家盛なれば、平家に滔ひ、源氏興れ
ば、源氏に媚び、足利の奴となり、徳川の犬となり、維新の事業とても、或は

邪魔にこそなりたれ、毫も與りて力なく、今日の文明を助くるものも、僞
侶中誰れ一人有之候や、却て天下の後進を、愚に安んせしめんとするも
のゝ如し、曾子曰く、之を戒めよ、之を戒めよ、爾に出るものは、爾に反ると、
儒は佛の因果説を假らざるも、大義名分を辨ふると、實際相勝り候、儒は
兎に角今日に至るまで、支那人の血液をなし居候佛は、故國印度棄て、
顧みず、支那にも統嗣久しからずして、絶へ、日本にても、孤城落日、劣敗の
地に立ちて、徒らに、昔日の榮華を戀ひしがるのみ、眞實世に隠るゝの道
力もなく、去りては、亦社會の教育にも習はず、付草依木、中有の幽靈に
して、穢に政府に憑依して、愚民を相手に、一日の怠眠を食らんとす、可悲
之至候、唐宋の頃より、既に社會觀に疎き結果、朱熹も慨歎に堪へず、其の
高尚なると、大學に過ぎて用なしと、被申置候、西洋諸帝王の、代々羅馬法
王の俗權に、抵抗せしがごとく、儒者も當時の弊を、矯めんが爲めには、自

然反噬の音も、止むを得ざるに出候、

程顥惇頤ニ嗣ギ師傳ヲ究明シ、六經ヲ修飾スト雖、初メ未タ大道ノ
闡奧ニ達セズ、竊カニ小乗教相ノ語ヲ聞得テ、佛法ヲ誤認シ、一旦努力
之ヲ排駁セリ、後華嚴論ヲ看ルニ及デ、始テ大乘ノ旨趣ヲ分曉ニシ以
來、釋子ヲ見、釋書ヲ讀ム、必ズ端坐整肅セシト云フ、

哲理の方面より、之を見るときは、當さに斯くのごとくなるべく候、苟も
思想界に於ては、佛敎を舍て、他に求むべきもの無御座候、

獨リ朱子ノ説ニ於テ、相抵牾スルアリ、恒ニ心ニ疚ム、切ニ疑フ、朱子ノ
賢ニシテ、而シテ豈其レ此ニ於テ、尙未タ察セザルアラナヤト、後復、朱
子ノ書ヲ取テ、之ヲ檢求ス、然シテ後、其晚歲固ヨリ已ニ、大ニ舊説ノ非
ヲ悟リ、痛悔極艾、以テ自ラ誑シ、人ヲ誑カスノ罪勝ゲテ、贖フベカラザ
ルヲ言フニ至ルヲ知ル、世ニ傳フル所ノ集註、或問ノ類、乃チ其中、年未

定ノ説自ラ答メテ以爲ク舊本ノ誤改正ヲ思テ而シテ未ダ及バズト云々

此所陽明も被申候朱子の説散漫統一なく説く所皆末を逐ひ本を忘れて更に道源に溯る所なし。佛教にては此くのごときものを塊逐ふの狂狗子と申候言ふとは乃ち似たり是なるとは乃ち未だし忠と云ひ孝と云ひ之を外に求めて心に求めず畢竟するに朱子學は纔に善人を教ふべし未だ大人の養に當らず候晩年に至り自らも餘程後悔せし模様候。

道學一變シテ理窟トナル孔門ノ眞風旋テ復タ溷晦ス苦ナルカナ苦ナルカナ豈圖ヲンヤ明ニ至リ王守仁ト云モノ出ルアリ文武兼備一代ノ人傑ナリ其言ニ曰ク守仁蚤歲學業辭章ニ渴志ス既ニシテ乃チ稍正學ニ從事スルヲ知テ而シテ衆説ノ紛撓ニ苦シム茫トシテ入ル

ベキナシ因テ諸レテ老釋ニ求メ欣然心ニ會スルヲ以爲ク聖人ノ學此ニアリト

快哉快哉王守仁は御互に私淑する所の人文武兼備一代の人傑とはよくも被申候「險夷原不滯胸中何異浮雲過大空夜靜海濤三萬里月明飛錫下天風」此頃の作なるべく候。

後龍場ニ謫官シ夷ニ居リ困ニ處シ心ヲ動カシ性ヲ忍ブノ餘恍トシテ悟ルコトアルガ如シ體驗探求再ヒ寒暑ヲ更ヘ諸レテ六經四子ニ證シテ沛然トシテ江河ヲ決シテ之ヲ海ニ放ツガ若シ然シテ後聖人ノ道坦トシテ大路ノ如シ云々

君子は坦として蕩々小人は長へに戚々其嗽々吟中に平生の所見を呈せられ候「智者不惑仁不憂君胡戚々眉双愁信步行來皆坦道由天判下非人謀用之則行舍則止此身浩蕩浮虛舟丈夫落々掀天地豈懼束縛如

窮○四○千○金○之○珠○彈○鳥○雀○掘○土○何○煩○用○銅○鑊○君○不○見○東○家○老○翁○禦○虎○患○虎○夜○入○
 室○銜○其○頭○西○家○兒○童○不○知○虎○執○竿○驅○虎○如○驅○牛○癡○人○慾○墜○遂○癡○食○愚○者○畏○溺○
 先○自○投○人○生○遂○命○自○灑○落○憂○讒○避○毀○徒○啾○啾○阿○堵○之○中○手○を○執○て○先○生○と○行○く
 がごとく、相覺候、

道同カラサレバ、相爲メニ謀ルベカラザルトハ雖モ、然レモ初志ノ發
 憤儒門ニ一簣ス、是ヲ以テ孔門ノ心法、世ニ行ハレザルヲ坐視スルニ
 忍ビガタク、將ニ力ヲ盡シテ以テ、其道ヲ扶持シ、眞風ヲ已堅ニ翻シ、大
 浪ヲ既倒ニ回サントス、是レ名ヲ釣リ、聲ヲ射ル爲ナラス、唯儒門ノ一
 大缺典ヲ補ヒ、以テ幼來洪澤ノ一滴ニ報ズルノミ、孔子杞宋ヲ以テ、三
 代ノ禮ヲ徵セザルモノハ、文獻足ラザルガ故ナリ、杞宋實ニ夏殷ニ繼
 グト雖モ、當時文獻足ラザレバ、則チ禮スヲ猶徵セズ、況ンヤ道ニ於テ
 ナヤ、如今儒門ノ文學乏シカラズト雖モ、獻德實ニ絶ヘタリ、我禪門明

道見性ノ眞傳、迦葉以來聖人君子、的々相承以テ、今ニ至ル、師證ニ因ヲ
 サレバ、則チ虚構トナス、

此處尤も可味候、儒者傳を失ふ已に久し、各已見を張て、旗幟を翻し候得
 共、誰れか烏の鷓雄を識らん、獨り陽明學者は、文字言句の外に立て、之を
 社會の實際に徵す、其末或は事功を逐ふの弊を免れざるものありと雖
 も、朱子派古學者流に勝ると萬々、尙次段を見て、聖學に三等の別あるを
 可知候、

故ニ、今大道ノ徵ヲ、此ニ取テ以テ、彼レニ及バント欲ス、蓋シ、孔子學者
 ナ煖煉スル、正ニ三等ノ級位アルアリ、後學、本ヲ忘レ末ニ走ル、故ニ之
 ナ用フル所以ヲ知ラズ、等閑ニ看過ス、今之ヲ設クルニ、初等ヲ入徳位
 ト名ケ、中等ヲ上堂位ト名ケ、上等ヲ入室位ト名ケ、且愚意ヲ加ヘテ、實
 學位ヲ置キ、四等トナス、之ヲ「雖曰未學、吾必謂之學」ノ語ニ取ル、此位

ナ初一步トナス蓋シ初學堅ク辨道ノ志ヲ立テ日用行事ノ間ニ黽勉
 シ暫時モ打失セザラント欲ス之ヲ實學位ノ人ト謂フ刻苦力ヲ用フ
 ル久フシテ工夫漸漸純熟忽然トシテ本有ノ自性ヲ見得ス之ヲ入徳
 位ノ人ト謂フ法財無量轉々見得シ轉々求覓シテ而シテ洞トシテ大
 道ノ體用ヲ究メ詳カニ衆物ノ妙理ヲ識ル之ヲ上堂位ノ人ト謂フ尙
 鑽研罷マザレバ向上重々ノ智關ヲ透過シテ明暗雙々ノ機用ヲ運出
 ス之ヲ入室位ノ人ト謂フ然シテ後實學位ニ依テ聖胎ヲ長養シ潛行
 密用怠惰ノ心ヲ生ゼズ死シテ而シテ后ニ已ム是レ荀卿ノ謂ユル百
 姓善ヲ積テ而シテ全ク盡クルナルモノ之ヲ聖人ト謂フナリ

漢學者は一般に尊嚴自ら居候得共見所最も卑きものにして多くはこ
 けおどしに候是れ其入頭の處を得ず稍縁に觸れて昭々靈々地の窠窟
 に入るものは亦出頭の處を不得思想漠然たるものに御座候夫子罕れ

に言ふものは性と命と利なり此三者元より入室位の人にあらざれば
 語りがたく亦語るべきものにもあらず民は唯依らしむるの法治國の
 肝要慈悲の至には候得共子貢の謂ゆる夫子の文章なるものは何を指
 し候や亦何れより出候や子貢唯聞得たるのみにては埒明候間敷如何
 様に見得候や弟今子貢に代て申さん「四時行焉百物生焉」是れ即夫子
 の文章に候性と命と利とを知らざれば六經講すべからず人の師とな
 るべからず候昔日紫璘供奉と云ものあり其の思益經を註せんと擬す
 るを聞き南陽の忠國師申されけるは凡そ經を註するには須らく佛意
 を解して始めて得べし供奉答へて曰く若し意を會せずんば争でか經
 を註すと言はんと國師遂に侍者をして一椀の水に七粒の米一雙の筋
 を安じて之を供奉の前に出さしむ師乃ち問うて曰く這箇は是れ何の
 義ぞ供奉無語國師曰く老僧が意すら尙會せず豈況や佛意をや争でか

能く經を註し得んと、漢學者多くは、本有の自性を見得せず、何ぞ上堂位を望まん、更に況んや入室位をや、我が禪宗にては、向上重々の智關をも一踏に踏破して、明暗雙々の運機妙用にも、尙足を留めず、此上に尙聖胎長養と申もの御座候、荀卿曰く、百姓善を積て全く盡くと、箇の何をか盡し可申候や、洪川老漢「浴乎沂、風乎舞雩、詠而归」の下に、著語して曰く「深海之珠、罔象輩、収之深山之寶、無意者拾之」と、

或人問フ、近世大儒アリ、明ノ李王二家ノ學風ヲ唱ヘ、古文辭ヲ主張ス、其言ニ曰ク、道ハ則チ高シ、美シ、謫劣ノ質、企及スベカラズ、故ニ卑卑諸レテ事ト辭トニ求ムト、又曰ク、聖人ノ心、唯聖人ニシテ、而シテ後ニ之ヲ知ル、亦今人ノ能ク知ル所ニアラザルナリ、今師類リニ、其企及アベカラザルノ道ヲ説キ、汲々之ヲ勸ム、弟子甚惑フト、余曰ク、今日之ヲ望メバ、天邊ノ寸碧ナルモノモ、明日之ヲ踐メバ、脚下千巖ナリ、道ハ高遠

ナリト謂ウテ、斷然進修ニ志ナク、只甘マテ卑ニ就キ、以テ足レリトナスモノ、是レ自ラ慢リ、且孔子ヲ謗ルモノナリ、余少時、其學ニ遊ブコト年アリ、初未ク其言ノ聖意ニ戻ルヲ知ラズ、中間自ラ學風ノ膚淺ヲ知リ、乃罷メ去テ、宋學ニ從事ス、曰ク、其説ヲ請問フ、余曰ク、中庸ニ曰ク、道人ニ遠カラズ、人ノ道ヲナシテ、而シテ人ニ遠キハ、以テ道トナスベカラズト、孟軻曰ク、道ハ通キニアリ、而シテ諸レテ遠キニ求ム、事ハ易キニアリ、而シテ諸レテ難キニ求ムト、是レ當ニ道ノ企テ及ブベキヲ知ルベシ、書ニ曰ク、惟聖念フコトナケレバ、狂トナル、惟狂克ク念ウテ、聖トナルト、顏淵ノ曰ク、舜何人ゾヤ、予レ何人ゾヤ、爲スアルモノハ、亦是クノ如シト、孟軻曰ク、何ヲ以テ人ニ異ナラン、堯舜人ト同シキノミ、是レ當ニ聖人ノ心、亦今人ノ修シテ至ルベキヲ知ルベシ、賢哲ノ言、世人ヲ欺カンヤ云々、

是れ本書或問中の一節に候、兎角儒者中には、殊に古學者流此弊多く候、之を自棄自盡と申候、唯聖人を拜み倒候は所謂聖人を誇るものにして、其罪赦すべからず、耶穌教の人など、甚罪人に候、「バイブル」を解し得ざるの悲しさには、己れ神たるを不知得候、又有恪公に奉るの書中、小少より絳帷の下に周旋し、二十五歳にして墳典を抛ち、更に禪に志し、一朝忽然大死一番、絶後再び蘇息し來て、始めて大道を徹見し、三十九歳にして、同門の請により、天龍寺に入り、古教照心すると數年、次に當時永興寺に住持せられしまでの、因縁を一々叙し來り、其立志は實に、心知百體亦主トスル所ナシ、唯是レ古人ノ精粕ヲ事トスルノミ箇ノ得ガダキ、最靈ノ精神ヲ以テ、終身精粕ニ區ヤトシテ、而シテ精ヲ覆フ、豈憾ムベキナカラフヤ云々、

の處に有之候、三代以降皆是れ精粕にして、其忠と云ひ孝と云ひ、消極的に唯治國平天下の便を計り、國に民なく、家に子なく、世を擧て君父に供するのみ、財産を繼ぐと雖も、不孝の子と呼ばれんとを懼れて、臨機の計らひもならず、學は先王の法に縛せられて、自由を失ひ、獨り醒醒たる没趣味漢のみ、能く善人君子と稱せられ來候得共、今日より申せば、實に自由の敵に候、古來忠臣孝子と謳はるゝ者、決して大人彙傑には、無御座候、魏徵の謂ゆる、臣をして、良臣たらしめよ、忠臣たらしむるなかれとは、よく千遍一律の世に、倦怠し、不平の餘に發したるの言なるべく候、不忠不孝のもの、或は時に取りての良臣良子たるべく候、學術上の思想にかいても、丁度此通りにして、洪川老漢の精粕に鑿かれたるは、尤の事に被存候、又其次に、

抑モ吾禪門ノ誨ヲ設クルヤ、學者ヲシテ、先ツ固有ノ心性ヲ徹見シ、以テ妄想起滅ノ本根ヲ截斷セシム、故ニ能ク凡テ轉シテ聖トナシ、鐵ヲ

點ヲテ金トナス、乃チ上天ニ耻ヤズ、下人ニ耻ヤズ、富貴モ淫スル能ハズ、貧賤モ移ス能ハズ、威武モ屈スル能ハザルニ至ル、然ラバ則能ク禪ヲ明ニシテ、而シテ后儒ヲ見バ、事物ノ精粗到ラザルナク、心性ノ體用明カナヲザルナン、佛法王法打シテ一片トナシ、外仁孝忠臣ヲ施シ、内無上善果ヲ成ス、古德之ヲ真大丈夫ノ能事ト謂フ云々、

真大丈夫たらんと欲せば、須らく禪を學ぶべし、宋儒皆禪によりて聖學を發揮し、明儒悉く見性を本とせしと、人皆知る所に候、西洋にても已に十八世期以來、印度思想によりて、前人未發の理を續々發見しつゝあるにあらすや、次に宋の張丞相、天覺の因縁を叙し又曰く、

獨リ天覺ノミニアラズ、隋ノ王通、唐ノ裴休、季翹、梁肅、柳宗元、白居易、宋ノ周惇頤、呂蒙正、楊億、趙抃、張方平、黃庭堅、呂祖謙、三蘇、金ノ李屏山、元ノ趙孟頫、明ノ趙大州、王守仁、文徵明等ノ諸公ノ如キ、皆大達ノ學士ナリ、

亦成ク深ク吾禪道ヲ究メテ、而シテ服膺スル所以ノ者、固トニ由アリ、右は重もなるものゝみを擧候者にて、其外とても、支那にては唐宋以來、政治家、詩人、畫師、文士皆禪によりて、精を極候者なると、誰も疑はざる所なるが、我日本にては如何と云ふに、其緒言中に、

聖德太子曰ク、政ハ學ニアラザレバ至ラズ、學ノ本ハ神儒佛ナリ、然レ一ヲ好ムモノハ、各其二ヲ惡ム、而シテ其存ヲ嫉デ、其亡ヲ欲シ、我が知ル所以テ、理トナシ、知ラザル以テ、非トナス、故ニ政ヲ操ルモノハ、宜シク三ニ通シ、一ヲ好マザルベシ、若シ一ヲ好メバ、則政ヲ狂ク、政ヲ狂クレバ、則王道廢ル云々、

之に因て觀れば、聖德太子は、千五百年の昔し、已に政教一致の治道に害あるを認めらる、今日稍公平なる思想を容るゝは、太子の餘澤に候、又菅丞相の言を引て曰く、

凡ソ國學ノ要スル所和魂漢才アルニアラザルヨリハ其間奥ヲ闡ム能ハズ、

菅公若し今日の人ならば、和魂洋才と可被申候、依て洪川和尚も之に語を添へて、

我皇國ノ男子大丈夫ナルモノハ先ツ火燒ク能ハズ水溺ラス能ハザル底ノ倭魂眞柱ヲ吐内ニ堅立シ之ニ加フルニ漢籍ノ才ヲ以テシ然シテ後更ニ力ヲ見性ノ術ニ用ヒ以テ一旦豁然トシテ貫通スレバ則其皇極ノ道ヲ權衡スルニ於テ亦開然ナシ、

今日の學者も願くは見性の術に力を用ひ、豁然貫通して政治に科學に既得の才を被振候は、間然なかるべく候、更に或問編に、

或人問フ、承リ聞ク、禪門、道ヲ究ムル靜座ニアリト、其意如何、余曰ク、但吾門ノミナラズ、宋儒亦靜座ヲ勤ム、中略然リト雖モ、吾ガ所謂靜座ナ

ル者ハ、六朝ノ清座、宋儒ノ靜座ニ異ナリ、佛之ヲ正思惟ト謂フ故ニ必ズシモ、坐相ノ上ニアラズ、造次ニモ此ニ於テシ、顛沛ニモ必ラズ、此ニ於テス、若シ但目ヲ閉テ、睛ヲ藏シ、寂ヲ愛シ、閑ヲ嫌フテ以テ靜坐トナサバ、是レ正靜ニアラズ、果シテ邪靜ナリ、

我禪宗の坐禪法は、決して六朝頃の清坐、又は明道、延平、朱子などの教へたる神定法にもあらず、別に暇の費へる程にも無御座候間、學校生徒なとも、日曜日には、接心會に出て、少しく道理を覺へ、次に平生習熟に心懸候は、第一身體を強壯にし、記憶力を補ひ、精神健固になりて、至極よろしからんと存候、白隱和尚の夜船閑話を見し人は、承知もあらん、内觀法、長息法、即ち坐禪にして、世人動もすれば、二乗の死坐を以て、吾禪宗の靜坐と見做候、白幽老人、莊子の謂ゆる真人の息は、之を息するに、踵を以てし、衆人の息は、之を息するに、喉を以てするの解を與へ、且曰く、孟軻氏

の謂ゆる浩然の氣之をひきひて、臍輪氣海丹田の間に藏めて、歲月を重ね之を守りて、主一にし去り之を養うて、無適にし去り、一朝乍ち丹髓を掀翻するときは、内外中間八紘四維、是れ一枚の大還丹、此時に當て、初て自己即ち是れ天地に先て生ぜず、虚空に後れて死せざる底の眞箇長生久視の大神仙なるを覺得せん、之を眞正丹髓功成る底の時節とす云々、長息法は口傳にあらざれば、微を盡しがたきも、先づ夜船閑話の類にて、多少得る處ありて、而して後先進の口訣に爲り、一層細嚼すべし、又曰く、昔し吳契初石臺先生に見ゆ、齋戒して鍊丹の術を問ふ、先生の云く、我に元眞丹田の神秘あり、上々の器にあらざるよりは、得て傳ふべからず、古へ黃成子之を以て、黃帝に傳ふ、帝三七日齋戒して之を受く、夫れ大道の外に眞丹なく、眞丹の外に大道なし云々、黃帝の學及び其後、荆楚派の諸子類、皆養生法を以て本となし、之を直ちに兵法或は治國の術に應用し

たるものゝみ、人生の事、隨の養生の法をさへ得れば、其餘は諸れを掌に指さすがごとくに候、藤澤の遊行寺には、内觀法の相傳御座候、同寺横濱出張所の和尚、斯道に精しき由承候、此頃東京より來參の友人に承候はば、小學校に呼吸體操始り候由、定めし淺膚の見なるべくも、先以て結構の事に存候、扱又附録中、性誠論の下に、

孔子曰ク、吾道一以テ之ヲ貫ク、釋老曰ク、唯此一事實ノミアリ、餘ノ二ハ即チ眞ニアラズト、是レ皆之ヲ誠ニスルノ至言ナリ、顔回ノ肱ヲ曲ケテ、之ヲ枕ニスル、迦葉ノ破顔微笑、之ヲ誠ニスルノ妙用ナリ、孔子ノ匡ニ畏レズ、釋尊ノ身ヲ夜叉ニ投スル、之ヲ誠ニスルノ大用ナリ、曾參ノ手ヲ啓ケ、足ヲ啓ケ、巖頭ノ一喝、數十里ニ聞エル、之ヲ誠ニスルノ餘力ナリ、孟軻ノ戰國ニ在テ、獨リ窮術ヲ排駁シ、以テ堯舜ノ道ヲ稱揚シ、迦那提婆ノ西天ニ在テ、專ラ外道ヲ折伏シテ、而シテ佛祖ノ大道ヲ張

大スル之ヲ誠ニスルノ餘動ナリ、大凡佛祖聖賢タルモノ、性決定シテ、外惑ヲ被ラス、情ニ牽カレス、危ニ臨テ變セス之ヲ性誠ト謂フ、

教育者モ書生モ、皆性誠を曰ふ、去れど、未見性の人にして、性誠を説くは、片腹痛き事に候、聖人は、萬物一體と申候、即性誠の事に候、故に洪川老漢曰く、

天ノ覆ヒ、地ノ載スル、日月ノ照ラス、霜露ノ墜ル、四時ノ循環、萬物ノ消息、皆這ノ性誠ノ徳用ナリ、其物タルヤ、虚ニシテ靈、寂ニシテ妙、萬物ノ爲ニ味マサレス、物々無妄、只一物其中ニアリテ、主宰トナリ、以テ大道ヲ成就ス、是果シテ何物ゾ、亦甚奇怪ナリ、初祖ノ所謂見性ナリ云々、

初祖達磨太師申され候、若し佛を見んと欲せば、須らく、是れ見性すべし、性は即是れ佛、佛は持戒せず、犯戒せず、是れ無作の妙戒なり、前佛後佛、只見性を言ふ、若し見性せずして、妄に我れ、正等覺を得たりと言は、此れは是れ大罪人なりと、獨り釋迦の罪人たるのみならず、孔子の罪人たるべく候、唐宋以後の學をいふものは、其先賢皆、最初此禪によりて、見性したるものなれば、後昆推諉すべからず、是非一度は參禪を試みらるべく候、又緒言中に、

程顥ハ事ヨリ道ニ入ルモノナリ、朱熹ハ窮理ヨリ道ニ入ルモノナリ、陸九淵ハ疑情ヨリ道ニ入ル者ナリ、王守仁ハ研究ヨリ道ニ入ルモノナリ、各自見ル所アリト雖モ、惜ムヲクハ、儒門ニ無量ノ法財ナシ、只一且ノ見處ニ固滞シ、磨煉ノ術ヲ用ウルニ由ナシ、故ニ到アリ、不到アリ、誰レカ吾門牆中、向上ニ至テ、希有ノ法財、妙密ノ伎倆アルヲ知ラシヤ、此說韓退之以來、辨するもの多しと雖も、實際是に相違無御座候、故に老漢叙して曰く、

一夜定中忽然トシテ、前後際斷、絕妙ノ佳境ニ入り、恰モ大死底ノ人ノ

如シ、一切物我アルヲ覺ヘズ、只覺フ、吾腔内一氣、十方世界ニ彌滿シ、光
 曜無量、須臾ニシテ蘇息スルモノ、如シ、視聽言動、豁然トシテ、平日ニ
 異ナリ、是ニ於テ、試ニ天下ノ至理妙義ヲ求ムルニ、頭々上ニ明カニ、物
 々上ニ顯カニ、歡喜ノ餘、自ヲ手ノ舞ヒ、足ノ蹈ムヲ忘ル云々、

今の耶蘇教信者も、何卒、此端的ありたきものに候、老漢も、此時始めて、禪
 に大悟あることを承知せられ、聖人も、凡夫も、元異なりたるものにあらず
 るを會得ありたるものに候、「エホバ」と云ひ、基督と云ひ、決して別靈に
 あらず、疑疑し去れば、「シナイ」の火、舞旋するの焰劍、肯ひ來れば、「シロア
 ヲ」の池、手中の餅、雙脚を伸べて、基督を役し捕へて洗足せしむべく候、乍
 併茲に肝要の心得は、頓悟の後、却て苦しきものにて、後悟の修行、此期に
 有之候、唯困難の中に、非常の樂みありて、前日と同じからず、如何なる苦
 痛をも、忍びやすく、終に無生法忍と云ものを得候、老漢更に「克己復禮

爲仁」と論語にあるを論じて曰く、

孔門己レニ勝テ仁ヲ得吾這裡己レヲ殺シテ仁ヲ得大凡自己無明ノ
 偷心之ニ當ル弱ケレバ則暫ク勝チ忽チ負ク今日己レニ克テ明日舊
 ニ復ス何ノ盡期カアラソ磨ヘバ飯上ノ蒼蠅ヲ追散スルガ如ク乍チ
 散シ乍チ聚ル吾這裡ノ如キハ無義味ノ公案ヲ以テ利刀トナシ單々
 ニ無明ノ偷心ヲ殺盡シテ而シテ自己ノ明德ヲ體得セシム之チ一分
 ノ見性悟道ト謂フ向ニ所謂己レヲ殺シテ仁ヲ得ルモノナリ、中略是
 レ我活法ナリ古人曰ク護生須ラク殺盡スベシ殺盡シテ始メテ安居
 ス故ニ吾室ニ入ルモノハ須ラク先ヅ己レヲ殺スチ以テ急務トナス
 ベシ、

儒教には實に此殺盡の法方無之候爲、今日の陽明學者といへども、唯名
 のみにて、更に頓悟見性などの事不信候、悲しむべきの至候、此殺盡の法

に就ては、佛教よりも、基督教の方向、尙精密にして、一層入り易くも御座候得共、かねて申通、普通一般に信せられたる保羅教には、此事なし、畢竟保羅は、基督の庶子にして、適子に無之、其父の面を見ざる証據に、御座候、其に基督の子ならば、今日にても、やすく其面を見、其懐に依りて眠る約翰の如きものに、御座候、神道にても、此殺盡の法有之、河合、清丸、武井、保村、岡素一郎、諸子の唱導に候、儒教の缺點は、實に此處にて候、「バイブル」の如きは、舊約の始より、新約の終まで、一語く、に皆此殺盡を示し候、依て未見性の目より眺むれば、怪しむべく、愕くべく、又笑ふべき事のみ候、陽明の如きは、主一説、良知説を唱へて、儒教の弊を教はんとせしも、元來此殺盡の法なき爲、終に其功半ばならず、可惜之至候、文中無義味の公案とは、譬へば、僧趙州に問ふ、狗子還て佛性あるや、也た否や、州曰く、有、僧云く、既に有りとせば、何としてか、箇の皮袋裏に撞入する、州云く、他知て故ら

に犯すが爲なり、又僧あり、問ふ、狗子還て佛性ありや、也た無きや、州云く、無、僧云ふ、一切衆生悉有佛性とあり、狗のみ、何としてか、無佛性なる、州云く、伊れ業識あるが爲なりと、如斯者に候、白隠の隻手音聲、即ち此公案に候、公案に、法身、機關、難透、難解、五位、十重禁等の階級ありて、通常千七百則に分ち候、是れは、景德の傳燈録中、千七百人の因縁有之、其中に、臨濟、洞山、雲門、潞山、法眼等の家風、各別なる所、御座候、公案によりて、一々明細に候、弟曾て「バイブル」を解して、聖靈は、佛教にて云へば、法身の事なりと申候處、或保羅信徒あり、基督曰く、聖靈は、父より出づと、今何としてか、此説ありやと、答候、付、弟は、簡単に、基督は「モーセ」より出づと、相答候處、彼れ會せずして、去れり、「モーセ」に由りて、命根絶せざれば、基督を見るべからず、父によりて、死せざれば、終に聖靈を見る能はず候、獅子兒を驗するに當て、千尋萬尋の壑中に、蹴落すと申候、此道理を詳にするものは、唯基

此他浩然の氣、我爾に隠すとなし、曾參の我手を啓け、我足を啓け、致知格物、明德執中、惟精惟一、格物と物格等、皆甘露の門、蘇酪の味、他日本書によりて、親しく可得貴意候、千里の目を窮めんと欲せば、更に一層樓に上れ、折角御辨道專一に存候、不盡、

* * * * *

聖胎長養

冷氣相催候、益御勉強之段、うれしく存候、弟も兎角身體よろしからず、是より寒氣に入候、一層困入候、大平洋中の黒潮、夏季は鎌倉沖に入り、冬季は三浦の方に移候、鎌倉は不幸な地に候、併し當山は南向故、割合に暑寒共凌能候由、何にせよ寒は小弟の大敵に候、此節は唯長息法にて、菓餌に換へ、養生罷在候、何より效驗有之様存候、此法は未見性の人には、何

分難語候、大要は夜船閑話に見え候間、御覽可被成候、扱かねて御約束申候、聖胎長養之事、一通り申上候、當山にも既に罷參を許され、即今聖胎長養中の人、両三者御座候、交際と云程の親しきには、至り兼候得共、面識丈は有之候、罷參を許され候得ば、自然得意の風もあり、他人の扱様も異なる點より、様子何處となく鎮著に見え候得共、其真相は決して、俄に尊敬を加ふべき程にも無御座候、何にせよ座禪とか公案とか、乃至悟道とか云垢、數十年間の修行中、膠の如く固着致居候間、却て我等凡夫の垢は、あつさりと見え候得共、彼人等の垢は、齊つきて皮下までも、浸み入候様存候、子供の時より、理にも非にも頭敲かれ、門外より思ひも及ばざる程の難苦經來り候丈ありて、意力は随分練れ居候様存候得共、其代りに赤子の心と申者は、毛頭無御座、唯落付拂て見え申候中にも、亦平然たる所もなし、心中陰險なるとは申すまでもなく候、僧侶實には僧伽、和合衆と譯

し候、乍併自家活計の外、決して此和合力ありとも不見得候、社会の事に冷淡なるは愕入るの外なし、身は貧に安んじ、係累もなく、所謂雲水の境界なれば、羨ましき點も不尠候得共、去りては亦或一事の外、此人等に就き學度も無御座候、何をか一事と申せば、總べて理窟を離るゝ是れなり、理窟とは道理察窟の謂に候、世間の人は兎角理窟裏に座して、口頭を以て事に當らんとするが故、動作活潑ならず、且又理窟を申者は、其思想必らず腦にあり、理窟を離るれば、其智量全體に遍ねし、之を心身不二と申候、心身不二を得れば、自然理窟を離れ、五體和合し、宇宙の「リズム」と俱に呼吸致候間、天地一體、萬物同根は、唯理解のみならず、不知不識の間自然に體得致候ものなれば、其此に至るには、内觀の座禪にて、定力を得ると實に肝要に候、禪宗にて罷參の人を見るに、凡て身體立派なるものにて、眞に心身の調和均一を得、それは、元氣なるものに候、其言ふと

爲すと、一種の「ペナル」を具し候、日本人の弱點は、實に意思の薄弱なるにあり、是れ畢竟、神經過敏にして、智慮腦に偏重し、下腹處し、脚根浮ひ候に基くものと被存候、無意とか無識とか云やうのものなく、西洋人に比すれば、誰れも皆憂鬱症と申て可然候、西洋人は餘程愚にして、且遲鈍の様候得共、體勢の習養上より、自然無邪氣のびくど致し、境に應じ物に對し、間髪を挟まず、激石火、閃電光的の奪命力有之候、王陽明の謂ゆる、虎を知らざるの童兒、竿を執て虎を驅ると、牛を驅るが如くにして、日本人は妄念邪氣多きが爲、老翁の虎患を憂へて却て其頭を噬まるゝの比喩、從來の外交に鑑て、恰好なるべし、禪僧は何故、此に得所あるかと云ふに、他宗とは違ひ、皆支那大陸の、而も禮儀國より歸化の宗匠に法を嗣ぎ、別乾坤の裏、自ら活計を有し、其工夫辨道は、飲食の法、入廁の規、洒掃應對に至るまで、悉く皆相縁て之を助け、行住座臥、實に不動湛寂の因縁な

らざるはなく、歐陽修見て、三代の風ありと賛歎せしは、食堂の齊莊なるに驚きしなり、其上に正思惟の禪觀を、堂内にて専途と修せしめ、又公案と云ものは、實に思慮を以て計るべからず、智解を以て辨すべからず、奪命の神符と申て、一則一則皆萬尋崖頭に、雙手を放いて、捨身一番するの外、決して透關するを許さず、之を基督教にて申せば、毎日〱十字架を負うて、従ふものに御座候、如此の陶冶ありながら、何故別に聖胎長養を要するかと云ふに、修行には修行の垢あり、悟道には悟道の垢あり、畢竟此垢落しに候、聖胎長養録と申書有之、其序に曰く、

三世ノ諸佛歴代ノ祖師頓悟シテ而シテ漸修ス、故ニ聖胎長養ノ説アリ、譬ヘバ金輪王ノ太子誕生ノ時、輪王ノ具體アリト雖モ、未タ力用アラズ、聖胎長養シテ、漸ク力用ヲ具シ、悉ク衆藝ヲ習フテ、灌頂受職シテ、王位ヲ繼クコトヲ得ルガ如シ、宗門ノ修行亦爾ナリ、頓悟シテ後、漸漸ニ

修滿シ、神通力ヲ具シ、終ニ果滿ノ佛位ヲ繼テ、普ク一切衆生ヲ度ス、此書は上州黒瀧潮音師の編集にて、是は其自序に候、實際智識分上の師家に接し候に、天真爛漫あどけなく、さながら子供の様に親しみやすく候、皆是れ先に、ずう〱敷陰險らしきもの、變じて斯く可愛らしく相成候、其理由は畢竟他なし、此聖胎長養の結果に候、蓋し禪宗の修行は、二乗聲聞の自利とは違ひ、最初より利他的に、菩薩の修行爲致候得共、元來自性惟心を主として、立たる教なれば、勢ひ演釋の一片に傾かざるを得候、されば自利利他を超過して、自他圓滿の大道を體得候には、身を無學無識の蒙昧社會に墜し、虎狼野干の群に和して、従前の修行悟道を洗劫致候、修證は元よりなかるべからず、唯其れに染汚するとは、不相成と、南岳も被申候、兎角人は學問に染汚し、修行に染汚致候者にて、今日の政治家、法律家など、動もすれば學理に染汚致候、却て無學の元老に人氣を奪

はれ候も、彼等の膠澁深刻なるが故に候、佛と云ふも是れ染汚、涅槃と云ふも是れ染汚、菩提修證皆是れ染汚にして、醉人の眼花に候、六祖太師の十年間獵師の中に隠れ、大燈國師、橋下二十年の談も、皆此聖胎長養に候、書中禪門寶訓、晦堂和尚の、朱給事世英と申人に、語れる由を擧て曰く、予初メ道ニ入ル、自ラ甚易キヲ持ム、黃龍先師ニ見ユルニ、遠デ、後退テ日用ヲ思フニ、理ト矛盾スルモノ極メテ多シ、遂ニ力メテ之ヲ行フト三年、祁寒溽暑ト雖モ、志ヲ確フシテ移ラズ、然シテ後、方ニ事々理ノ如クナルヲ得テ、而今咳唾掉臂モ也、是レ祖師西來ノ意、右染汚の事を、滲漏とも申して、情滲漏あり、理滲漏あり、又證悟等の滲漏ありて、一旦豁然として貫通したる後、却て一種の礙縛を受候、世の禪學を修する居士連中、注意すべき事に候、當山にも畫家彫刻師等、參禪に被參居候、皆一所見御座候、其技術を見るに、殆ど野蕃時代の物、到底今日の

美論に相應したるものにあらず、自ら許して曰く、世人の觀て歡ばざる所、却て知己のあるありと、是れ這般の分際にて、可申事にあらず、韓非子に有之、西施癩を煩ひて、眉を蹙め候處、海棠雨を怨むの風情あり、隣家の醜婦之を學で、試みに蹙成しければ、其醜愈甚しかりしと、凡そ天下を駕り、世を遁るゝ等の人、知命の時期に達するまでは、如何にもして世に容れられんと冀ひ、一事なりとも建業の芳勳、世に留度、種々様々の經驗もありし後の事に、て「マイナセマス」のまねして、桶底に身を横へ候ても、當年の歷山王なきは氣毒に候、古人皆俗にも沈み、惡にも雜りして、世をあせり廻り、幾多の境を實見して、後の覺悟に候、高くして容れられざるか、卑くして省せられざるか、反思ありたきものに候、悟後の修行、什分ならざる禪僧、皆悉く是れのみ候、

或人曰ク、先ツ漸修功成ルニ因テ、豁然トシテ頓悟ス、或者ハ曰ク、頓修

ニ因テ漸悟ス、或ハ曰ク、漸修漸悟等ハ皆證悟ヲ説クナリ、先ツ須ラシク頓悟シテ方ニ漸修スベシトハ、此レ解悟ニ約スルナリ、故ニ華嚴經ニ説ク、初發心ノ時、便チ正覺ヲ成ズ、然後、三賢十聖、次第ニ修證スト、若シ未タ悟ラズシテ、修スルハ、眞修ニアラザルナリト、

是レハ潮音の語にあらず、圭峯大師の禪源諸詮と云書に、悟修の二字に就斯く言へりと引たる文に候、扱禪宗と申ても、流儀一樣ならず、是ハ畢竟學人の根機に因るとに候、大根機の人ならば、一聞千悟、前後際斷して、所謂頓悟頓修とも可申乎、乍併通常祖師禪の立様は、頓悟漸修に候、是今日にては文盲の小僧を捕へて、鐵の如き公案を咬破せしむ、其中には百味具足すとは信じながらも、隨分困難の業にて、最初自他善惡等の差別を脱却し、平等性智の大體を窺はしむるまでには、可成讀書を離れしむるの方に候間、自然漸修頓悟と申す譯には不參、悟後の修行に至て、始め

て比較研究をゆるし候、併し頓悟漸修とて別に人意的に之を設けたるにあらず、人の根機により、いろく種類あると左の如し、

若シ悟ニ因テ修スレバ、是レ解悟、修ニ因テ悟ルハ、是レ證悟、然レハ是皆今生ノミニ約シテ論ス、若シ遠ク宿世ヲ推セバ、唯漸ノミニシテ頓ナシ、今頓ト見ル者ハ、已ニ是レ多生漸薰ノ發現ナリ、或人曰ク、法ニ頓漸ナシ、頓漸ハ機ニ在リト、誠ナル哉、

是も禪源諸詮の文なり、元より法に頓漸の別は、無御座候、依て潮音の序文中、

或問フ、聖胎長養、一世ニ限ルト見タリ、曷ソ多劫ヲ論ズ、答テ曰ク、三世ノ諸佛多劫ヲ經テ、以テ長養ス、宗門頓悟ノ士アリト雖モ、豈三世ノ諸佛ニ超過スルコトアラフヤ、

聖胎長養も、廣義に約すれば、釋迦耶蘇即今皆長養中に候、人間も遺傳に

遺傳を重ねて、長養致居候。扱茲に一寸御斷致度は、佛教にて宿世の漸薫
なぞ説候は、今日の所謂遺傳説と大差無之候得共、唯宗教語と哲學語と
は、出所も違ひ、隨て應用自ら別なれば、此他小生の往々假借したる所御
了義可被下候。

人ニ就テ悟修ニ約スルニ、四漸四頓アリ、一ニハ漸修頓悟、二ニハ頓修
漸悟、三ニハ漸修漸悟、四ニハ頓悟漸修、前ノ三修ヲ證悟トナシ、後ノ一
頓ヲ解悟トナス、我ガ禪門ハ頓悟漸修ニ當ル者ナリ。

是れ潮音の語に候、重複ながら擧候、四種の悟法、御座候間、何れなりとも、
人々の因縁に任する外、人力にて致方なし、要は唯誰れにも、皆、インスピ
レーションあるものと信じて、自性を觀發候様、あらまはしく存候。東洋
は經驗より進み、今已に老へ、西洋は學理より來りて、尙稚なり、共に是れ
盛壯の期にあらずと雖も、彼は逸して且鋭なり、此は勞して且惰なり、逆

も今日の會戦は、萬里懸軍、深く敵地に入ての勝利、甚無覺束候間、他國の
傳道なぞは、暫く止めにして、「バイブル」の研究會、并に佛教圖書館等を
開き、内外の智識を集度者に御座候、支那にても、佛教は先づ儒者を鍵鍵
して、大道の二枚なきを悟らしめしにあらずや、昔は客位に在て、儒老を
見ると、筆の雀をにらむが如く、今は主位に處して、唯僅の外教徒をおそ
る。且佛教徒の誇る所は、教理の高きにあり候。其、宗教は寧ろ、教理の高
下によらず、社會に對して、如何を顧みざるべからず候。得庵居士其外、唯
己れを知て、他を見ざるの連中は、忠孝の二字を擔廻て、彼れには人道な
しと、被罵候得共、決して然らず。東洋は個人的道德には、多少長ずる所な
きにあらざるも、是も畢竟見識のみにして、實行なし、彼れには社會道德
大に發達し、日本人の如く、英雄豪傑を夢みる時代にあらず、基督教の教
義は、元來社會を土臺にして、築成候者故、何事をも多衆の力を藉りて、營

む方に候、或は外面を飾るなどの弊も、之に由て來候得共、兎に角、佛教家の箇々分立不調和の類にあらず候、蓋し人皆道德心に必らず一種の公案あり、之を學理より解するも可なり、經驗より徹するも可なり、歸納的に漸修頓悟するも可なり、演繹的に頓悟漸修するも可なり、頓修漸悟、漸修漸悟、各因縁に任せて不可なし、朱子は漸修頓悟にして、陽明は頓悟漸修に候、要は唯宇宙を豎に咬み横に咬み、咬破し盡して一家の藝、一家の術、一家の徳に歸収したきものに御座候、宇宙間最も勢力あるものは、或る制裁力に候、之を基督教にては神の攝理と申して、最も重んずる所に候、矢張此方にて因果と申も異ならず候得共、殆ど積極と消極の相違あり、佛教の因果は、婦女子の涙に和して憐れげに説出さざれば、自然其旨に適はざるの感あり、獨り禪宗にては然らず、「崑崙著靴空中走」と詠せしは、因果の體なり、「取鏡、錘、劍、爭、殺、活」と謳ひしは、因果の用なり、之を般若波

羅蜜多と申候、因果を撮て、一微塵の如しと云ふも、尙未だ及ばず候、是れ自他の見なり、

「僧問、雲門、如何是諸佛出身處、門曰、東山水上行。」

或僧雲門に向て、三世の諸佛は何處より生れ出しやと、蒸地に問懸けたれば、雲門は從容として、「東山水上行」と答へられたり、若し此話解得せば、「バイブル」も、一切經も、なかるべし、「一聲霹靂驚天地」の端的に候、答所は寧ろ問所の親しきに如かず、此僧如何なるか、是れ諸佛出身の處と、問ふたる其の問の出所に向て、佛の出所をも、御探索可被成候、さすれば因果の道理も、相分り可申候、天童の宏智禪師曰く、

「開口不得時、無舌人解語、搔脚不起處、無足人解行、若也落他、殺中、死在句下、豈有自由分、四山相通時、如何透脫。」

無舌の人解語し、無足の人解行する所に、妙道存し候、時々も侃々も自由

の分なし、切々も行々も、尙他の般中に落在す、四山一時に相逼るとき、如何して透脱せんと、常に御工夫被成候はば、一度は必らず釘櫃の抜ける時節可有之候、讀書のみにては、證悟も解悟も、望無之候、

扱又聖胎と云二字、文字上の解釋は、をもしからず、長養の二字も亦然り、御自得の方よろしく候、前の證悟解悟も、文字の義理にては、相分兼候、是も御實見可被成候、併し茲に一通りは、可申置候、證悟の方は、知るとに候、解悟は見る方に候、俳諧は聞くべからず、見るべしと、定義有之候通、我禪宗にても、知るものは多く、見るものは少しと申候、故に見性成佛と申候て、知るとは哲學、心理學等にて、知るを得べきも、此見るとに至ては、是非共參禪必要に候、基督の死より蘇りて、我手を見よ、我足を探れと云ひしは、此見るとに候、未見ると能はざる婦女子に向ては、我に捫るなかれと云へり、心の清きものは幸福なり、其人は神を見るとを得べければなり

とあるも、同斷の義に候、但し證と解との文字上の區別に就ては、自ら論あり、他宗にては證悟を涅槃とし、解悟を學知と致候、我禪宗とは自ら別解脱に候、又唐の慧海禪師、頓悟入道要門論中より、左の問答引用致候、

問 何ノ法ヲ修シテカ、即解脱ヲ得ント欲ス、

答 唯頓悟ノ一門アリ、即解脱ヲ得ン、

問 何ヲカ頓悟トナス、

答 頓トハ頓ニ妄念ヲ除クナリ、悟トハ無所得ヲ悟ルナリ、

問 何レヨリシテカ修ス、

答 根本ヨリ修ス、

問 如何カ根本ヨリ修スル、

答 心ヲ根本トナス、

問 如何カ心ヲ根本トナスト知ラノ、

答

楞伽經ニ曰ク心生ズレバ種々ノ法生ク心滅スレバ種々ノ法滅
 スト。維摩經ニ曰ク淨土ヲ得ゾト欲セバ當ニ其心ヲ淨フスベシ。
 其心淨キニ隨テ即佛土淨シト。遺教經ニ曰ク但々心ヲ一處ニ安
 スレバ事トシテ辨ゼズト云フナシ。經ニ云ク聖人ハ心ヲ求テ終
 テ求メズ。愚人ハ佛ヲ求メテ心ヲ求メズ。智人ハ心ヲ調ヘテ身ヲ
 調ヘズ。愚人ハ身ヲ調ヘテ心ヲ調ヘズト。佛名經ニ曰ク罪ハ心ニ
 由リ生ジテ。還テ心ヨリ滅スト。故ニ知ゾヌ善惡一切皆自心ニ由ル
 一ヲ所以ニ心ヲ根本トナス。若シ解脱ヲ求メバ先ツ須ラク根本
 ナ知ルベシ。若シ此理ニ達セザレバ。虛ク功勞ヲ費シ外相ニ於テ
 求メ。是處アル一ナシ。禪門教ニ曰ク外相ニ於テ求メバ。劫數ヲ經
 ルト雖モ終ニ成ズル能ハズ。内覺ニ於テ觀バ。一念ノ頃ノ如キ。即
 菩提ヲ證スト。

文中、心を調へて身を調へずとあるは、語弊あるやうに候得共、是は唯心
 を主とするの謂に候、全く調身せずと申には無御座候、西洋人など、調身
 の法に至ては、頗相務候得共、心を外相に置き、神を求めて、心を求めざる
 故、保羅教の如く相成候、真宗も矢張同様にて、唯佛を求めて、心を求めず
 候、又維摩經の語に、淨土とか淨心とか有之候は、皆本來淨土、本來淨心の
 謂に候、或人の道歌に、

澄さんと池の藻屑をはらふこそ、

なかく月のさわりなりけれ、

と御座候、三祖大師の信心銘にも、逍遙として性に任すれば、惱なし、と有
 之候、又其次の問答に、坐禪の要を説かれ候、

問 夫レ根本ヲ修スルニハ、何ノ法ヲ以テ修ス、

答 惟坐禪ナリ、坐禪シテ即得、禪門經ニ曰ク、佛聖智ヲ求メバ、即坐

禪ヲ要ス、若シ禪定ナケレバ、念想喧動シテ、其善根ヲ壞スト、
問 何チカ禪トナシ、何チカ定トナス、

答 妄念生セザルヲ禪トナシ、坐ヲ本性ヲ見ルヲ定トナス、本性トハ
是レ汝カ無生心ナリ、定トハ境ニ對シテ無心ナレバ、八風動カス
ト能ハズ、八風トハ、利衰毀譽稱譏苦樂、是ヲ八風ト名ク、若シ如是
ノ定ヲ得バ、是レ凡夫ナリト雖モ、即佛位ニ入ラン、菩薩戒經ニ曰
ク、衆生佛戒ヲ受レバ、即諸佛ノ位ニ入ル、是クノ如クナルヲ得ル
者チ、即解脱ト名ケ、亦達彼岸、超六度、越三界、大力菩薩、無量尊ト名
ク、是レ大丈夫ナリ、

茲に、衆生佛戒を受れば、諸佛の位に入るの語あるを見て、佛教は儀式的
に修むべきものゝ様に、御考被成候ては、甚不本意に候、元良博士、曾て其
宗教論中、禪宗は儀式を離るれば、既に一面を缺けるものゝごとく、論せ

られ候得共、決して然らず、唯坐禪にて足れり、又坐禪とても、行住坐臥に
關したるものにあらず候、圓明國師の坐禪用心記の中にも、

坐禪ハ、戒定慧ニ于ルニアラズ、而モ此三學ヲ兼テリ、謂ク、戒ハ是レ防
非止惡ナリ、坐禪ハ、舉牀無二ヲ觀ズ、萬事ヲ抛下シ、諸緣ヲ休息シ、佛法
世法、管セズ、道情世情、雙へ忘マテ、是非モナク、善惡モナク、何ノ防止カ
之レ有ラン、此ハ是レ、心地無相ノ戒ナリ、

前文に六度を超へ、三界を越るとあるは、六度萬行とて、布施持戒忍辱精
進、禪定智慧の諸行を、一念に超越して、三界とて、地獄、餓鬼、畜生、即ち貪瞋
癡の三毒を、一踏に踏躐して、達彼岸とて、直に涅槃妙心の域に入り候、之
を舉牀無二を觀じて、戒定慧の三學を、一坐禪の中に攝すと申候、
蛇頭落』と御座候通、兎に角、坐禪の趣味を御感被成候様存候、心の雜草を
刈候へば、地獄もなく、佛界もなく候、微風幽松を吹く、近く聴けば聲愈好

しとやら、徐々と御徹根可被成候、基督の己れの欲する所人に施せ、言ひし如く、禪宗にても、防非止惡的の語は、或場合の外、用ひ不申、死水には龍を藏せずと教申候、

定ハ是レ觀相無餘ナリ、坐禪ハ身心ヲ脱落シ、迷悟ヲ捨離シテ不變不動不爲不味痴ノ加ク、兀ノ如ク、山ノ如ク、海ノ如クニシテ、動靜ノ二相了然トシテ生セズ、定ニシテ定相ナク、定相ナキガ故ニ、大定ト名ク、

三學中の定は、觀想無餘と申て、唯天地同根萬物一體なると、觀念理解するのみに止り、身心脱落、脱落身心なると云ふ道理は、不見得候、世人動もすれば、我禪宗を六度萬行中の一に置き、禪定波羅蜜を修するものゝやうに誤り候、決して六度や、三學の定には、無御座、聲聞の十六行、緣覺の十二行、菩薩の六度萬行を、超越したるものに候、此上の事は、師家に就て、御受可被成候、茲に極めて難解難透の一話御座候、陸亘大夫と云へる人、南泉

和尚に向ひ、肇法師の寶藏論に、「天地與我同根、萬物與我一體」とある語を學て、肇法師甚た奇特なりと稱せられしかば、南泉和尚、庭前の牡丹を指して、大夫に答へて申さるゝやう、「大夫、時人見此一株花、如夢相似」と、大夫とは呼掛たる語にして、大夫應諾の處に大事あり、扱時人此一株の花を見るを、夢の如くに似たりと、試みに之を義釋すれば、能見所見の萬物ありと雖も、從來一體の故に、其萬物や亦夢の如く、不可得なりとの意なるべし、然れども斯く解するも亦、天地同根萬物一體の套語なり、願環の誤謬を不出候、何程細密に解し得ても、畢竟離微を離れ、百非を絶するの所に至らず、縱令密々たる工夫、風を漏さずと自ら思ふも、南泉を去ると、千里萬里、遠くして且遠し、或人又曰く、覺夢本あるとなし、虛實待を絶して見よと、是も矢張睡語に候、更に西來の分なし、何程意根下に向て卜度し、事上に就て情量すとも、到底禪宗の公案は、見ぬ不申候、「至人は空

洞として象なし、萬物我造にあらずと云となし、萬物を會して自己となすものは、唯其れ聖人乎。已に是れ恁麼の人、何ぞ恁麼の事を愁へん、無情說法有情聽くなどあるを見て、容易の看をなし、己れ聖人の落所を知得たるやうな、顔付の學者、世間には多く候、這般の人は、教意を極則と信じて、意氣揚々たるものに御座候、去らば如何にせば南泉の面目を覩見し得るやと云ふに、雪竇は之を、「聞見覺知非一」山河不在、鏡中觀」と頌せられ候、又天童の宏智禪師は、「虎嘯蕭々巖吹作龍吟、冉冉洞雲昏」と其端的を詠せられ候、工藝品に偽造多きが如く、居士にも隨分野狐先生御座候間、是等の句に一轉語を添へよと突出しなば、直に尾を見せ可申候、唯前文の如く座禪し、且師家に參せらるべく候、

慧ハ是レ簡擇覺了ナリ座禪ハ所知自ラ滅シ心識永ク忘ズ通身慧眼ニシテ簡覺アルトナシ明ニ佛性ヲ見テ本迷滅セズ意根ヲ座斷シテ、

廓然トシテ瑩徹ス、是レ慧ニシテ慧相ナシ、慧相ナキガ故ニ、大慧ト名ク、

是れにて、座禪は全く別修なると、御承知可被成候、諸佛の教門、一代の所説、戒定慧の三學中に、總收せざるゝなく、而して、祖師の座禪を心得候候ば、戒として持せざるゝなく、定として修せざるゝなく、慧として通せざるゝなく、誠に重寶の者に候、假令へば茲に不殺生戒あり、祖師禪の戒にては、愛憎是れ殺生なり、是非是れ殺生なり、殺生と云ふも、是殺生なり、不殺生と云ふも、是れ殺生なり、去らば何れの處に向て、箇の不殺生戒を守らん、先の所謂戒相なく、慧相なく、定相なき處に有之候、入道要門の續きに、三學等用とて、三學を、一時に等用するの問答あり、

問 三學等用トハ、何者カ是レ三學ナル、如何カ等シク用ウル

答 三學トハ戒定慧是レナリ、清淨無染是レ戒ナリ、心ノ不動ヲ知テ、

境ニ對シテ寂然タル是レ定ナリ、心不動ノ時、不動ノ想ヲ生ゼヤ
 ルヲ知リ、心清淨ノ時、清淨ノ想ヲ生ゼサルヲ知リ、乃至善惡
 皆能ク分別シテ、中ニ於テ染ナク、自在ヲ得ル者、是ヲ慧トナス。若
 シ戒定慧體俱ニ不可得ナルヲ知ル時、即分別ナキモノ、即同一體
 ナリ、是ヲ三學等用ト名ク、

又座禪は、教行證の三徳をも兼候、證とは悟を待て則となし、行とは眞履
 實踐を以て極となし、教とは斷惡修善を以て要となす、座禪は全く別方
 面より入りて、身に所作なく、口に密誦なく、心に尋思なく、而かも學牀全
 提意盡き、理窮まる處に、佛祖の正傳を得候、

夫れ此くの如くして、如法に道を辨し、如實に徳を修すと雖も、習氣と云
 もの尙殘る、まして情滲漏あれば、理滲漏に忤ひ、理滲漏あれば、情滲漏に
 背く、悟滲漏亦然り、故に大慧普說中の話を、長養論に引て、後世の禪學者

長養を蔑視するを戒められたり、

瀉山和向、仰山ニ問テ曰ク、寂子、你ガ心識微細ノ流注、來ルヲナキ、幾年
 ソヤ、仰山未即チ答ヘズ、却テ問テ曰フ、和尚來ルヲナキ、幾年ソ、其時瀉
 山自ラ是レ七十餘歳、仰山ニ謂テ曰ク、老僧來ルヲナキ、已ニ七年、寂子
 何如、仰山曰ク、慧寂正ニ闢キ、アット、此ヲ以テ觀レバ、這裏驪心ヲシ
 テ、脱空ヲ説テ、相瞞セシムルヲ得テ、ソヤ、眞ニ大力量アツテ、始メテ得
 ソ、

慧寂は仰山の名にして、瀉山の弟子に候、父子共瀉山宗、仰山宗と有之位
 に候、此文を見て容易ならざるを御含ありて、蓋りに小賣弄の漢に、御參
 得御無用に候、東京にては小石川の南隱老師も被在、又折々他の名匠も
 相見候、

靈源、圓悟ニ語テ曰ク、衲子、見道ノ資アリト雖モ、若シ深ク蓄ヘ、厚ク養

ハザレハ用ヲ發スル必ラズ峻暴ナリ特ニ教門ニ補ナキノミニアラズ將ニ恐クハ禍辱ヲ招クアラソナ

今日の僧侶は峻暴にも至らず、狹斜の巷に禍辱を招く位のものに候。禪學は海底に蟠る毒龍を壁開して食となすの金翅鳥を教養する學問に候。問世上輕薄の禪家者流を見て御速斷被下候ては甚迷惑に候。達磨は生知の古佛なり、尙般若多羅の膝下に侍すると四十年臨濟は不世出の英なり、大悟して後尙黃檗の會下に留まると二十年、其外皆同様の純熟を経て、後人の陰涼ともなられ候。毒にもならず、藥にもならぬ、賣藥的宗旨とは全く違ひ候。

少しく前に返りて「慧ハ是レ箇擇覺了ナリ」とありし事に付、聊申上候。此慧は智識の事に候。英語の「ノーレツヤ」に當り、我流の坐禪にて談ずる様は、英悟の「ウキストム」に當り候。「バイブル」にも分明に顯はれ居

候。保羅教の人も二者の區別を申候ゆども、正に是れ「學道之人不知其只爲從前認識神」にて、自分は斯様に觀たとか、斯様に行ふたとか云ふは、皆此識神に候。賊を認めて子となすとは、此事に候。「無量劫來生死、本痴人喚爲本來人」何處まで究めても、生死の本を離れず候。保羅教の人は、德行に屬するとは智慧、藝術に屬するとは智識と心得居候。佛教にては何れも皆阿頼耶識と申して、如何に立派に悟るも、昭々靈々地の窠窟に死在すると申候。先づ此阿頼耶識を打破して、行て行くことを知らず爲して爲すことを知らずと云所に至て、始めて一分の修行ありと許候。「バイブル」に「アダム」「イーウ」の兩人、目見るとなく、智慧あるとなかりしを、善惡生死の分別に落しより、目も開け、智慧も出候。是れ即識神にて、十字架に死して、始めて無眼耳鼻舌身意の般若に歸候。人生の真相を能く見せたるものは、實に「バイブル」に候。愛の神變じて烈々の嫉妬となり、嫉

妬變じて、基督となり、基督死して、草木國土悉皆成佛を示し、舊約の始より、新約の終まで、百尺懸崖、推一推して、命根絶し、復活昇天の十字架を、現實的に開示致候、佛教の大海に引入して、用をなさしむべく候、舊約の聖人、何故に救はれざりしや、天國に入るものゝ最も小なるものは、何故に預言者の最も大なるものよりも、上位に置かれ候や、他なし此大死一番、復活現成の十字架を得ざりしに因候、如何に履踐綿密にして、十戒は毛頭缺くる所なきも、十字架に死せざれば、益なし、富めるものゝ天國に入るは、難ひ哉と、基督の嘆息せしは、此所に候、唯右の識神、僅にても存すれば、障礙と相成候、兄も「バイブル」には御熱心の方故、乍序申上候、大悟何遍など、古人の申候は、皆此十字架に、何遍死したと云謂に候、死して復死し、幾遍も死返り、よとがへり致候へば、已に是れ聖胎長養に候、故に道元禪師の坐禪儀にも「未是思量分別之所能解也、豈爲神通修證之所能知」と

と被申候、神通修證とは、小乗の三賢十聖、神通力を具するものにて「バイブル」の所謂、預言者の如きものに候、僧侶の修行は、多く人意的に、社會の現實界を離れて、成丈多衆鬧熱の處を嫌候故、見性悟道の後、實際に適應するには、内外合せず、前得後得の縫解存じて、行動自由ならず、自ら聖胎長養の時間も掛り候得共、居士は大概動中に、辨道致候間、最初より聖胎長養に候、

又簡擇とは、百法明門論に「慧者揀擇善惡也」と有之、又三祖の信心銘に「至道無難、唯嫌揀擇」と御座候、同じく信心銘に「但莫憎愛、洞然明白」と有之、又永嘉の證道歌に「法身覺了無一物」と御座候て、謂ゆる坐禪の上の、所知自ら滅し、心識永く忘じて、通身慧眼の明白、或は覺了ならば、よろしく候得共、唯一通りの見性にては、斯く悟た、斯く諦めた位の明白覺了にて、三祖や永嘉のそれとは違ひ候、是も矢張、識神の覺了に不過候、故に

趙州和尚も「老僧不在明白裏」と被申候、天地一體、萬物同根の端的を會せりとか、有情無情、悉皆成佛したとか、山は是れ山、水は是れ水、本來無一物、魔佛別たすなぞと、何かに少しく觸れ感して、寶珠を得たる如く、珍重護惜する人あり、是れは趙州の反對にて、明白裏に在る人に候、況して、學解心測の覺了明白は、地獄の種、苦痛の源に候。

先は是迄に致し、今一言相添度は、宗教家の法愛を脱する事に候、夫に就ては比較研究、甚必要に候、諸教門、比較研究のなき人は、譬へば狭き井戸の如し、深きやうに候得共、淺し、比較研究ある人は、廣き井戸のとし、淺き穢に見て、却て深し、佛教の支那に來て、發達せしは、儒老其他と比較研究ありたる爲にて候、小生在京中「バイナル」其他、西洋思想を、僧侶の前にて、語り候へば、皆嫌居候、無理ならぬ事とは、小生自らも合點罷在候得共、今日の勢にては「バイナル」と西洋の宗教組織は、是非僧侶に爲知度

候、西洋の外國宣教師は、外交學を第一に修め、暗々裏に、政府の意向と結托し、傳道の方面よりも、寧ろ政治の方面に、缺學致候者にて、或意味にて申せば、たしかに外交協賛員に候、青木周藏の立脚地、何れにあるかも、略御推量可被成候、之に引換、佛教家は、其通弊として、明德を天下に明にするにあらず、唯偏に之を自己に明にするに止り候、但し後者も必要は無論に候得共、世間出世間の差別相立候ては、所謂佛に入て、魔に入らざるの、無事禪、暗證禪と云ものになり了り、祖師の本懐に戻候、「バイナル」の組織は、盡く羊羔を驅て、狼群に入らしむるの法に候、此方の聖胎長養に似て、一層激甚に候、畢竟傳道弘教を以て、罪業消滅の極則と爲心得候、「英の「スペンサー」一たび、可知不可知の説を立候以來、杜撰の徒、喧傳して、終に我大乘佛教家までも、錯會するもの多し、殊に眞宗僧侶に甚敷候、眞智即「バイナル」の「ウキストム」、座禪の慧眼なるものは、見不見、知不

知に涉りたるものに、無御座、茲に玄沙三種病の話とて、難透の公案御座候。雪竇此話を賛して曰く、「盲聾瘖啞、杳絶機宜」實に盲聾瘖啞となり、杳として機宜を絶したる所に、眞智見有之候。又曰く、「離婁不辨正色、師曠豈識玄絲」知覺聰明皆道を得がたし、離婁が明師曠が聰も尙及ばざる處に、一段の玄音幽色有之候。射て百發百中するも、巧力の及ぶ限に候。箭鋒相拄ふと云所に至ては、最早巧拙の待を離れたる者に候。「庵内、人爲甚麼、不知庵外事」など云公案御座候間、此邊より御分け入り可被成候。「爭如獨座虛窓下、葉落花開自有時」此穩座地を得ると肝要に候。「バイブル」に知らざる所なき、能はざる所なき、神と申すは、即ち此眞智眞性にして、即吾人の聖胎に候。

白隠の内觀法に就ては、八王子の大徹和尚、毎月一週間斗宛、下谷の廣徳寺に見ゆられ候筈に付、御入門可被成候。和尚は、已に八十に近き高齡にして、顔面茶色を呈し、腰もかいます、鏝鏝たるものに候。此内觀法は、阿含經にも出居候間、印度にも髓に有之候事、勿論に候得共、古來、日本に傳はりしものは、全く支那道家の遺法にして、僞法にも、自ら大小の二門あり、龍丹霞食の秘法は、小乘にして、眞玄無漏の觀念は、大乘なり。白隠和尚其夜船開話の終りに於て、時々、彼の内觀を潛修するに、機に三年に充たざるに、従前の衆病藥餌用を、用ゐず、任運に除遣せり。特り病を治するのみならず、従前手脚を、扶むと得ず、齒牙を下すと得ざる底の、難信難解難入の一著子根に、透り底に徹して、透得過して、大歡喜を得るもの、大凡六七回、其餘の小悟、怡悅、蹈舞を忘るゝ者、數をしらす、妙喜の謂ゆる、大悟十八度、小悟數を知らずの語、始めて我を、欺かざるを知得たりと、又門人其卷頭に、件の法を修して、若し驗なくば、來て老僧が首を斬れと、白隠申されし由を序し、且門人等も斯法によりて、難治の諸症、平盡せる實驗談

を載せたり是乍併観は無観に至て始めて其功完たし必らず先づ見性肝要に候。

荆楚の學は養生法を推して天下を治め鄒魯の學は孝道を以て濟民の術を講せんとし、「バイナル」は罪惡消滅を本と致候人間萬種の苦痛皆罪惡より來候者故罪滅すれば苦滅すと教候而して此罪苦は實に「アマム」善惡を味ふて分別起り生死來候後の事なれば先づ第一に「汝善惡菓は之を食ふべからず」と禁せし神次に「汝之を食へば智慧生ず」と誘ひし魔を退治せざるべからず神を殺せば魔滅し魔滅すれば智慧忘す、知慧忘すれば即無眼なり無眼の者は即ち神にして天地を創造せしものなり天地今日に七期を経たり佛教の過去七佛を西洋人七大劫「セウソ、イーナルチチー」と譯し候は恰好の文字に候佛教は幾百種の異説を打して一團となし之を般若海に會入して各生命を付し空劫那畔衆

々地に出身獨立せしむ眞に一毛頭上乾坤を定むるの概あり蓋し、「バイナル」「コーラン」我藩國に入れて北辰星外に南面するものは必らず佛教なるべく候吾人は七佛以前より這箇の聖胎を長養して怠らず且此勝縁に遭候目を擧れば田已に熟せり黃稻を以て鳥雀に委すべからず候。

參禪の餘暇少し宛相認候間語路も調はず且前後錯綜致居候御ゆるし可被下候諸君へよろしく御傳言願上候舊教の觀念「メヤテーション」は小生も修し、事有之候是は別段申上るの價値無御座候前に申上候小乗の觀想に候返すくも祖師流の座禪は社會と俱に動き社會と俱に呼吸し社會の關熟裏に安住の靜所あるとを御心懸專一に奉存候僧侶は人意的に疑團を起さしめ亦人意的に之を拔去らんとす居士は罪惡等により自然の飢渴に對して法雨を請候間一旦沛然たる時は従前

個中の消息
 百八十
 の枯苗勃然たるを僧侶の比にあらず候。兎角山中の選佛は頼もしからず。街頭の脱胎こそ、寧ろ祖師の本懐か。と存候。病氣貧困罪惡等は、即ち吾人のよき道場に候折角、助中の御辨道可被願候拜復。

參禪 倉個中の消息 大尾

明治卅三年十一月廿六日印刷
 明治卅三年十二月廿三日發行

定價三十五錢

編纂者 鐵華書院

右代表者 大崎茂馬
東京市牛込區築土前町三十番地

印刷者 谷口默次
大阪市東區北久太郎町二丁目六十六番屋敷

印刷所 大阪活版製造所
大阪市東區北久太郎町二丁目六十六番屋敷

關西大賣捌所
 大阪市東區備後町并池筋角
 中井清玉堂



愚明尾崎忠治題字
水哉中尾捨吉序文

文學士高瀬次郎著

精神陽明學階梯

全一冊 定價卅五錢 郵稅四錢

高瀬文學士は曩に「日本之陽明學」を著はし今又本書を著はして有爲青年の精神修養に資せんとす。抑も陽明學が精神修養に大効あるとは萬人の已に知る所なり。本書の文辭は流暢明快其組織は秩序井然たり。奇警なる問答を設け文學的趣味を交へて心即理、知行合一、致良知等は勿論凡て王學に必要な語句を網羅して之を詳解し進んで王學の精髓を明示せり前著を一讀したる後は必ず本書を讀むべく初見の人と雖一讀せば大に得る所ある可し蓋し高瀬文學士の王學に關する著書を讀む者は井上博士が佛教活論を以て佛教を發揮せし當年を想起せずんばあらず。

子爵 渡邊 國武題
文學博士 井上哲次郎序
文學士 高瀬武次郎著

日本之陽明學

紙數 三百頁
定價 五十錢
郵送料 六錢

本書は高瀬文學士多年研究の餘に成りたる者にして序論に於て陽明學全系統の梗概を叙し本論に於て我國に於ける陽明學を詳述す期する所は王學の鬱屈を解き青年の心術を涵養するに在り苟も陽明學を窺ひ精神を修養し品性を陶冶せんと欲する士は乞ふ一本を購讀せよ。

尾崎先生口述 吉本 襄筆記 傳習錄講義

和裝三十五錢 郵送料金二錢

『日本』評——道心維れ微にして人心維れ盛なる世の中に立ち屹然王學を提唱するもの鐵華書院なり同書は王陽明の傳習錄を尾崎忠治氏の講義して吉本襄氏筆記したるもの即ち是れ志士の必讀を要す

『中央新聞』評——王陽明致良知の學の趣味深くして兼て實用に適するものたるは多言を用ひず此の書は王子の傳習錄を尾崎忠治氏が達眼を以て口述せしものを陽明學の編輯主任吉本襄氏が筆記したるものなり義理明暢幽を顯はし微を闡き斯學を講ずるものをして遺憾なからしむ思ふに今の漢學者は迂疎にして世用を知らず洋學者の多くは輕佻にして未拔に走るの時に方りて王子の學を修め致良知の學理を窮むるは是れ學者の本分といふべし

『高知日報』評——本縣出身の樞密院顧問官尾崎忠治氏の口述にして「陽明學」主幹吉本襄氏の筆記に係る講義明瞭言辭平易實に學習者座右の寶典なり今や道義廢頹人情澆漓の世に際し陽明子の知行合一說の如きは此大弊を救治するに鴻益ある論を俟たず本書の發刊ある實に此目的に出でしものなるべくして其社會道義上に裨補するとならざるべし

吉本襄撰

水川清話

定價 郵一册 稅四卅 錢錢宛

(入挿圖眞之外内邸川水並像肖之前新維及近最伯勝故)

正編(第十渡邊園) 東京日々新聞評

海舟伯の語、陽明學に加ふるに禪味を以し、之を聞きて興味を感ずるもの多し、南洲翁の人物評の如き、維新の難局に處したる苦心談の如き、聞きべきものあり、一種の談話家たるは疑ふ可からず、雜誌陽明學の主筆吉本襄氏簡淨の筆を以て老伯の語録を撰み、加ふるに老伯の肖像詩歌俳句、渡邊無邊子の題辭を以て趣味を添ふるあり、燈火一讀の價値十分なりと云ふべし。

續編(第八谷干城) 日本新聞評

彙に出でしもの續編なり。例の翁が、奇警超脱の口調宛として、其人を見るが如し、古今を論じ英雄を評し、世道人心より種々社會の方面に入つて縱談横論鋭氣當るべからざるものあり、涼夜燈を剪つて机上この翁と對すべく、綠蔭榻下又此翁と對すべし。

續々(第六近衛公爵題辭) 大阪朝日新聞評

勝伯、白眼、世に對して縱評橫批至らざるなく、人、また好んで心耳を廣長舌に傾く、水川清話の出づる已に三編、洛陽の紙價爲めに貴し。嬰鑠老を積むこと果して幾百に達すべきか

故侍講 元田永孚 先生は寔に昭代の醇儒にして二帝三王の道を我

今上皇帝陛下に奉り其德行誠見優に百世の師表たるに足る斯編は先生が

天顔に咫尺して論語尙書易經の中最も時勢人情に剴切なる所を進講し奉りたる者其貴重なる固より論を

俟たず而して文章明暢言論謹嚴海内一あり

て二無きの文字 讀む者をして親しく

經筵に侍するの感あらしむ江湖諸賢請ふ一本を購求して 修齊治平の準則とせんことを。

男爵元田侍講遺編

經筵

進講錄

(卷首には先生の肖像及勝伯の手簡、卷末には) 德富蘇峯氏の「元田東野翁」の一篇を附載す。

(未曾有之美本正價六拾錢郵稅六錢)

趙無狂禪著
本日 禪門豪傑傳 全

定價四十錢
郵稅六錢
本月末開刊

禪海浩々として涯際なし、人々に迷ふて禪の至妙を知る者少し。禪や到底抹香寺裡のものにあらず。手を動かせば活潑潑地の行動となり、事を執れば驚天動地の大業を成す。禪の發現はそれ日月か其潛藏亦玉に似たり。請ふ去つて我禪界豪傑の經歷を看よ、卿等の慕ひ求むる所の物自然に此中に於て獲られんなり。本書學ぐる所、榮西、道元、虎關、疎石、一休、澤庵、隱元、白隱、の閱歷。而して一方雄視の諸豪又時に隨ふて諸所に隱見す、宛然禪海の無盡藏なり、請ふ一本を榻下に秘し、寒夜燈を剪て聊か潛かに精神修養の材に供する所あれ。

近刊廣告

麻衣道人著

男兒八景
婦人六相

全

定價廿五錢
郵稅四錢
製本出來

讀め妙齡の女子

……男兒八景は眞男兒の風采襟度なり、理想の男兒なり。之を内にしては、心學の奧義を説き、之を外にしては、觀相の妙訣を授く。

讀め青年の男兒

……若し夫れ婦人六相に至ては、忽にして慈婦、忽ちにして賢婦、忽ちにして德婦、忽ちにして閨房獨宿の婦婦、忽ちにして額に角を生ずるの婦、忽ちにして、嬌嬌の婦婦、其骨相を觀、其聲音を聽き、一切の秘密を看破すべし。

玄洋社長頭山滿題字
二六新報記者權藤高良序
前野長治著

膽力と其修養

定價拾貳錢—郵稅貳錢